又土左の國にては今も専ら茅もてつゝむ事世にこもにてつゝむか如しと聞

哥に理りを盡さすと云にはあらす其とわりは理りとして時に不意に思ふ心をよむ時はとわりの上をよむにいとはかなけなれとめくらしてみれは理りは有也わさと

所レ憚回依ニ其言ニ世人五月五日作レ糉並帶ニ五色絲及練葉ニ皆汨羅遺風也

あやめかり君は沼にぞまどひける我は野に出てかるぞわびしき

といひて雉をやりける

そこには粽をたまはん料に沼にまどひてあやめを尋め我は雉子をまゐらせんとて野に狩したりと君が勞を謝し我勞をも擧る也古人は心なほくてみづからのらうをもこと〳〵しく神にも君にも誰にもいへり○或説に菖蒲にて粽せし事はなけれどけふはあやめを賞ずる日なればかくいへりといへれど猶おぼつかなしまづ右の拾遺に深き汀にかる蔣とよみ元ざね集にも三の宮に小ちまき奉るとてさつき待ほどに澤水まさりつゝよどの眞こもゝおいにけるかなとあれはいにしへも眞蔣もてつゝみし事知べし今遠江わたりにても必蔣にてせり又山城越後などにては菰葉してつゝめり越後にては笹につゝみて茅の如き草して上をゆへりさてちまきてふ名は若茅して卷つゝむ故にいふ歟さらばいと古へは茅にてし又蔣にても笹にてもさま〲なるをおもふにあやめにてもつゝみけんかし藥にしもあれば也

むかしをとこ有けりあひがたかりける女にあひて物がたりなどするあひだに鳥の鳴ければ

逢がたきにあひたるは哥に切なる心をそふる詞也

いかでかは鳥の鳴らん人しらずおもふこゝろはまだよぶかきに

いともめづらしくあひていまだ夜更ずとおもひをるほどに鳥の鳴たらんはいかでかくは鳴ぞとまで思ふべき也○いかでかくは鳥の鳴らんとおもへるは古意也人しれずおもふ心はと理り盡せしは少し後の哥のさま也いにしへは月やあらぬ春や昔の云云夏の夜はまだよひながら明ぬるを云々まだきになきてせなをやりつるなどやうに其まだき也とおもふまゝにこそよみ侍れ此記者の比にはかくとわりに過ゆくめり○遊仙窟に始知難レ逢難レ見可レ貴可レ重可怜病鵲半夜驚レ人薄媚狂鷄三更唱レ曉はし書よりのさまをおもふに此句々によりて作れる條ならん

とわろとおのつから理有とのたかひにして後世わさとわろはいやしけにこそ侍れ此哥をいと〳〵よろしと云説侍り切なる心なくはあられとかの理りつくせしは古哥に侍らす業平朝臣のはいと異也記者の哥とみゆ此哥後撰に題不知よみ人しらすとて入たりされと古今よりみれは後の哥也後撰の前にもむつかしくよめる人はたま〳〵有しならん古本に尋ると嘗しにてとわり有を一本に夢路をたのむと有はいかにそや又一本に空なきと有もわろし空有と古本に書しをや

むかし男つれなかりけるをんなにいひやりける

行やらぬ夢路を尋るたもとにはあまつ虚有露やおくらん

こは古今集に夕されば雲の旗手に物ぞおもふ天つ虚なる人を戀とて　夢路にも露やおくらんよもすがらかよへる袖のひぢてかはかぬ　もろこしも夢に見しかば近かりきおもはぬ中ぞはるけかりける　思ひやる境はるかに成やするまどふ夢路にあふ人のなき是等の意詞もてかくはよめるなるべしすべての心は相想へば夢の玉しひも行あふといへるに我はおもはぬ人を戀つゝ見る夢なれば夜すがら其人のもとへ行とは見れどえゆきとゞかでさめたる後に袂の涙にぬれたるをみて行方も知ぬ夢路をたとり行袖にはそこはかともしらぬ空の露のおくならんとよめる也

昔をとこ有けりおもひかけたる人のえまじうなりての代に

おもはずはありもすらめどことのはの折ふしごとにたのまるゝかな

こはかくなりて後は其人は思ひかけず有にやしらねどはやくいひてしとのあれば又時としておもひたのまるゝと也こは端の詞につきていふなれどすこしおだやかならぬこゝちすめり然はこれも古哥の有にはしの詞を加へたるにやそのもとはたゞあふとはなしにことばのみよき人のうへをよみたるならん

むかしをとこありけり寢寤思ひあまりて

今本にふしておもひおきて思ひ〲あまりてと有もさる事なりされどうたに暮れば露のといひてたゞ夜の心をいへば古本のかたしかるべし

我袖は草のいほりにあらねどもくるれば露のやどりとぞなる

夜ごとに涙のふかきをふかくいひ入たる也端とあはせてことの心はあきらけし

昔ひとしれぬおもひするをとこつれなき人のもとへ

古本にかく有今本に昔男人しれぬ物おもひけり云々と有は男てふ詞のあり所此ことばにてはわろし又さま〳〵

亂れたる本あれどいふにたらず

戀わびぬ蜑のかる藻にやどるてふ我乍身をもくだきつるかな

ことはこきん集に題しらす典侍藤原直子朝臣とあり　あまのかる藻にすむ虫の我からとねをこそなかめ世をはうらみじてふを少しかへて端をも作たり古今集にては人のたえたる後に我身をかへり見ていへる詞にてあはれふかくとわりもあきらかにしらべいとよろしきをこゝにてはまづ戀わびぬとて年月に戀るかひなきを倦じたるをいひさて今にいたりて思ふにこはかひもなくみづから身をくだきても有つるよと且悔ひかつうらみたる心にて其人にいひやる哥とせり本の哥とは同じ日に云べくもあらずいやしく成ぬ○われからといふ虫外にはいはねば知がたし後世人の說に和布海苔なとにつきたる虫の小蝦の如き物といひ又近き比の物產者流に小虫の圖をかきてそれ也といへども所據もなく皆强ごと也

昔榮而好色なる男長岡といふ所に家つくりてをりけり

榮而を一にはよしづきて一には心やつきて今本にはこゝろづきてとあり此中に心やつきては語をなさず心づきても色ごのみてふ語につゞくべき故なく侍ればとらずよしづきてにしたがへりいかにぞなれば後の物がたりぶみによしばみてふは由緣ありげに物をなすをいふ今のもさるよしめきたる事は榮曜なる方による故に榮の字を用ゐしならん此男世にわびてかゝる里住するにあらず此條は榮ゆるあまりにすきたる家居して在をいはんとてまづおける詞と見えたれば也猶次下の嫗女の好色なる條にむかへ見るべし○長岡は山城の國乙訓郡に在て初の條にいひし如し下に業平朝臣の母親王のおはせし事もあれば是も此朝臣を摸したる條には侍り

そこのとなりなりける宮腹に事もなき女どもの

ことはかの伊豆內親王のみならず桓武天皇の皇女などの其比こゝに住せたまふさま也宮腹とは后又皇女の腹に生れたる御子をいふさてさる宮の御子などに仕ふるよろしき女等をこゝにいへり　源氏に宮はらの中將とは葵上の同胞の兄にて皇女腹にて枕さうしに女ゐん宮はらの屋とあるも后腹の皇女又は皇女のうみたまひたるか住たまふ家ゐいふ宮たちの事とこゝろ得るは俗也　○事もなきとは万葉に大きみの御笠にぬへる有馬皆ありつゝみれど事なき我妹うつぼもの語にこゝに物せらるゝ中に事なきむすめ云々又かたちのいと事もなしなどいひて難なくよろしきを云

鄙なりければ田かり爲とてこのをとこの有を見て忌作之すきものゝ所行かなとてむれて入來れば此男逃ておくにかくれけり

ゐなかといひ田かりせんといひたるは所の狀をも家居のさまをもしらする也田刈せんと云は此女ども事もなき云々といひしからはさるわざすべくもあらす賤どもの刈を見に出たれど下に穗ひろはんともいへるをむかへて思ふに其女どものさわめきて田かりせんなどそら言にいへるさまに書たるなるべしさて女ども田邊見るついでに此男の家に在を見つけて其をとこ見むとおもふより家居をほめ興ずるをことばにて打むれて入也○すきものゝしわざとはおなじ垣ほも洒麗ておも白く作れるをいふ下にあれにけりあはれいく世の宿ならんなど云は男のかくれたるをいふはさる事ながらこゝにむかへみるにかの遍昭僧正の家に秋の野つくりけんやうにしなしたるを思はする文也けり○古本雲集はむれてとよむべし今本にあつまりてとあれどまづ一所にあつまりてさて門に入來る意ならばさもいふべきをこゝはふと用意なき女どものみな入たるさまなれば群てとこそいはめ

田かりせんとよめりもし又將の字の落むるかさらは田むかへらんすとてとよ

遍昭の哥　里はあれはいく世の宿なれやにはもかきも秋の野らもまなる

こきんにてはもとすみし人のたえておとつれもせて宿のあれたるさま也

或説にとなん出したりけるとのみあるを女なおしる本なる見て女なふは出す事といふは矣ふにたへす

荒にけりあはれ幾代の屋門成哉將棲人のおとづれもせぬ

こは古今集にわび人の住居せる宿のさまよめる哥どもの中に入たるを取用ゐたりさてこゝには此住ゐの里びてすきたるさまなるにいまあるじのかくれたるをいひこめたる哥としたるいとをかし○屋門成哉と古本に書たるは萬葉の頃の詞と同じく此比までは宿なるやとよめるを知べし古今集の今の本には宿なれやとあれと後の人の書かへたるならん

といひて此宮に雲集來居而ありけれはこのをとこ

葬生てあれたる宿のうれたきはかりにも醜女の出入なりけり

女の哥をうけて寔に荒たる宿也さて如是荒たる宿のうれはしきは假初にも鬼どもの所えてまゐれるはと彼女等の群きたるをたとへて惡み戯れていへりこは記者のよめる也○うれたきは古事記に八千矛神御うた うれたくも啼なる鳥の云云萬えうに慨哉しこほとゝぎすなどあり○をにとは童どもがおそるゝばけ物てふどとき物をいへり古本に醜女と書しは神代紀に黄泉醜女と有によりて彼女どもを罵る意を得て書り○すだく万葉に多集の二字を訓たり古本に出入と書たるも義を得て書るなるべし 或説に拾遺集平のかれもりか哥にみちのくのあたちか原の黒塚になにこもれりといふはまとかとよめるは彼國名取郡黒づかといふ所に重之が妹あまた有と聞てよめりなにとは女は外面似菩薩内心如羅刹てふ意也といへるはいかにそや羅刹のことくとて女なすへてなにといはゝ重之の妹を戯る意となるへきやこはたゝ黒つかに鬼のこもりし物がたりの有けんなたとへて女のあまた此人のもとにこもりてあるよしを聞てゆかしくおほゆるを云にて今とは意異也

となんいひ出したりける 今本にはいひの詞おちたり 此女ども穂ひろはんといひければ

男のかくれてかくいひ出せしに女等はしたなくて穂ひろはんを詞にて出ゆくさま也かつ穂拾はんは上の詞の始終也

うちわびて落穂ひろふときかませば我も田頭にゆかましものを

寔に世にわびておち穂ひろはんと聞かば我も共に出てたすけひろひなん物をと也先に逃かくれたるをおもひたがひたりといふが如くいひて裏には猶女どものうきたる心をにくむ也

伊勢物語古意卷四

むかしをとこありけりいかゞおもひけんひんがし山にすまんとおもひてよめる

今本に上に京をいかゞ云云と有はさも侍るべし下におもひ入てとあるはよろしからず

住わびぬ今はかぎりの山ざとに身をかくすべき宿もとめてん

こは後撰集によの中を思ひうじて侍りける比　藤平朝臣　住わびぬいまはかぎりと山ざとにつま木こるべき宿もとめてんと有をとりて作れり

かくて物いたくやみてしに入たりければおもてに水そゝぎなどして生出て

水そゝぐ事法花經信解品云于レ時窮子中路　悶絶躃レ地父遥見レ之語レ使言以二冷水一灑レ面令レ得二醒悟一

我うへに露ぞおくなる天の川とわたる舟のかいのしづくか

此哥本は萬葉に此夕ふりくる雨はひこ星の早撈舟のかいの散るかもと有をとりてよめるを古今集には入たりさて古今にては此あたり恩を賜れる時よろこび申たぐひの哥なれば惠みの意にとりなしたるをこの文には死入たるとき面に水そゝげるを病者の心にこは世のつねの露にはあらじ天の河門をわたる船の櫂よりちる露ならんと崇みおぼえたる事とせり○門渡るは河門をわたるをこゝにはいふ海門水門など云門におなじ海又川にても其兩方に山碕など在て門の如き所をいへり○加伊は萬葉におきつかいいたくなはねそ邊つかいいたくなはねそとよめるは釋名に在レ旁撥レ水曰レ櫂と有にあたれりこれ今の加伊てふ物におなじく水をかきて船をやる故の名也けりさて万葉にかぢてふ語もあれど今いふかぢにあらずいまの櫓てふ物にて加伊も同じき也

後世とわたるとは渡なる音と訓とに云ふは甚しき俗解也

今は櫓は末と本とを木にて作る也かいは一木にて其形つくるなへとも思ふに共に一木にてつくるなるかのみあるべし

上に生出てと云は死入たるが生たりと云のみさてまだ正しくばならで夢のごとくして此哥はよみ其後まさしく氣出たりといはん料に上には生こゝには氣と書るなるべし古本に字をおく事さる所多し

むかしをとこ有けり宮づかへいそがはしく心も不被儼ける間にかのいへどうじまめに思はんといふ人につきて他國へ往けり

是は奉公に勤がはしく家に在事も少くもとより妻をねもごろにもえおもはざりしかばかくなめげにしてあらんよりは我こそよくて相住んといふ人にしたがひて任の國へ行ける也

このをとこ宇佐使にていきけるにある國の祗承の官人の妻にてなんあるときゝて女あるじに酒杯とらせよさらずばのまじといひければ盃とりて出たりけるにさかなゝりける橘をとりて

宇佐の使には和氣氏のたつ事なるを此男の行たるとあるいといぶかしきやうにいへる說はれいの此文の樣をこゝろえぬ故也かくさだまれる事をも書たがへたるにて物がたりとはいふ也○御使を祗承するは國の守をはじめて郡司などまでに及ぶべし官人といへるはそれが中に郡司或は驛長をさしてそれらが家に宿れるならん任にてある官人の宿は勅使やどすほどの屋にはあらじかし○さかなゝりける云云は酒のむあはせ物をさかなと云は酒魚の意なるを後は何物をもさる料にするをもさかなといふならん○橘は　續日本紀に葛城王の申文に縣犬養橘宿禰に橘の姓をたまふ時賜二浮杯之橘一勅曰橘者菓子之長上人所好云云かく人の好める物なれば酒料とも

もかちともいひしもみえたりされとも神功紀の新羅王の船ちか言に不レ乾二船柁一而春秋獻二馬柁一と有柁をかちとよむは新羅の語なれは証としかたし新平祭祝詞に青海原爾棹柁不レ干と有は少し後にかきしなれは紀の語よりかゝれしならん然は万葉の中にも古哥には柁のことはゝ見えさるそうへ也けるは半死半生のほとに思さま也さてこゝに氣出と書るは文の前後せるに似たれとかへりておもしろしかゝる味はひよくみぬ天河のかいの雫かとよめるは半死半生のほとに思さま也さてこゝに氣出と書るは文の前後せるに似たれとかへりておもしろしかゝる味はひよくみぬ人此詞は用なしとおもひて去たるなるへし今本にはなし

今本間の字おちたり又まめならさりけるほとのいへとうしとあるはわろし儼は恭敬の意なる釋なゆれは用ぬたもれとみこころなはらさりけれとはとよみたりけれにてと下の儼に實用さてにいへる條にはいやゝかとよむてはくおほゆ今本めは此句なし心もまなとらさりけるとよみ下にもまめにとまあれとにてはしちやうはとしかなとはしは言なれはすし下にかはへかはらす有にそのとわりは委しくいへりは出したり今本にはかれつとさはけにあるとさらせてとき上にさかへ有也とらたゝ盃とり古本にたゝ盃とり

てとのみ有からは出たりけるとよまては語意とほらす在五中將の物かたはりとも其人なれらと必ずなるなるぬ猶さ書てにまいにふ書かとるる事すて万えいにの王えのうたらにかとやへの郡の領出所へやの前とのりつしの郡司り使なとらもやんかへきしのの妻女もをふ買るにこのおとなるなするなくはの郡なとをなとの家つおもらなるへくのくさまほなゆるもひ合せておほ

鉄は借字也

さ月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

こはこきん集に四月の郭公と五月の郭公との間に入られて何となき昔人の香をおもひ得たる哥なるを是には右の詞をまうけて其さかなにせし橘の香につきて故の妻をそへたるいと工みに作れるもの也

といひけるにぞおもひ出て尼になりて山に入にける

此御使もとの夫ならんとはおもひもよらざりけるにかくよみたるを聞てふとおどろきはぢて尼になれると也○右のうた古今集にては昔の人の袖の香におもひあはせんは何の香にてもある事なるを時につけて橘の香をよめるのみ也萬葉に花風に散花橘を袖にうけて君おはせりとおもひつるかもこれも君が袖にまがひたる例には侍れど又梅がゝをも人香にまがひたる哥多きがごとし古事由緣あるやうにいへるは例の附會なり○五月待とはかなら子の香にとりかへたりさるときはさつき待てふ詞は少しとわり遠くなれゝとさはかりの事は此文にて常ありとりかへしにはまたくはえかなふまじき也

昔をとこつくしまていきたりけるにこれは色このむといふ軼者とすだれのうちなる人のいひけるを聞て

前と同じ度なるべし

そめ川をわたらん人のいかでかは色に出てふ事のなからん

此筑紫の國に來て染川をわたりたらんにいかで色に出さる事を得んやといひてこは所がらなめりと中々に其人をうちたる意さへ有べし○此哥は拾遺集に題しらず業平朝臣とありこの集はすべておぼつかなき事多ければ朝臣の哥てふ事はあまなはねど此物語にはさるふるき哥有によりて一條を作れるなるべし後撰集にわたりてはあだになるてふそめ河の心づくしになりもこそすれとよめるは右の古哥有けるをとりてよめるにやはた筑紫に此

事也大和物かたりにも染川の哥あれはこの後の物なれはこゝに不引

河ある事は右の哥どもにてしらる

女返し

名にしおはゞあだにぞあるべきたはれ島浪のぬれ衣きるといふなり

たはれ島てふ名におふからはもとよりあだにぞ有べきと也然るをさるたはれてふ名は僞りの名を負たる島ぞといふ也とよみて是を右のこたへとせる意はそこの色好むてふはまことならんを此染川わたりてより色に出つらんとのたまふはこの島のあだなる事はいつはりならじをそは波のぬれぎぬなめりといひなすがごときぞと也○こは後撰集によみ人名にしおはゞあだにぞおもふたはれ島波のぬれぎぬいく代きつらんと有をとれり右二首ともにとなる哥なるをこゝに詞を書て贈答とせしはとに巧みに出きたる條也○ぬれ衣とはいつはりを云波の濡きぬとは波は白絹にみゆる物故にはたぬるゝことをも豫て云ならん貫之春くればさくてふ事をぬれぎぬに著するばかりの花にぞありけるとよめるはぬれ衣をいつはりてふ事として何のよせもなくていへり

むかし年來おとづれざりける女心がしこくやあらざりけんはかなき人の言につきて他の國なりける人に仕はれけるほどに本見し人の前にいできて物などくはせける夜さり此有つる人たまへとあるじにいひければおこせたりける男われをばしらずやとて

年來なるまで男の音信せて有ける女あり其女心賢くばおもひ過して時を待べき物をよからぬ人の言につきて國人のつかはしめとなりたり其昔の男事有て其國にいたりて宿れる家にしもあれば女は思ひもよらず食物持て出たると也其夜かの女を來させて男故のわれをばしらずやとてよみたり

いにしへの艶ひはいづらさくら花扱るが如も成にけるかな

昔ありし艶色もいづこにかうせにけんたゞ櫻の花をこきおろして枝のかぎり立らんをみるがごとく疲れたりと

いふ也こはひとへに惡むにはあはれとおもふ心をもかねたるならん○こけるが如もを今本にはこけるからともと書あやまれるならん幹といはでも枝の意は有ぞかし古人のかなはなだらかにてごとくと有つらんなからとよみあやまれるならんさる類多しといふをいとはづかしとおもひて報もせでゐたるをなどいらへはせぬといへば涙のこぼるゝにめも見えず物もいはれずといふ又をとこ又男の詞今本になし例の私に去たるならん

かくおとろへておぼえずもとの夫に見えぬる女のかなしさ見るが如く書たり

これや此我にあふみをのがれつゝ年月ふれどまさりがほなき

よき事あらんとて我に逢事をのがれて年ふれどかく勝りたるけしきもなきはと是は耻かしむるいひなし也○これや此てふ語は物二つに事のかよふ時也既につもれば人の老となる物てふ哥にいへるが如しこゝは我に逢身をのがるゝと近江の國とをかねたれば仍てそれしらせんとて古本に近江をとは書たり且近江をのがれといへば此夫近江に在しを女は他國へ道れたると聞ゆ此文には片田舍なる男をんなの事をも多く書し也

といひて衣ぬぎてとらせけれどすてゝ往にけりいづちいぬ覽ともしらず

さすがに哀とおもへばきぬゝぎてかづけたれどはぢてそれもとらず行方もしらず去ける也前の女は尼に成たり

といひこゝは事をかへたり

むかし世營嫗女

こゝを今本に世ごゝろづけると有を古本に世營と書るを合せみるに年たけて世の中の事功づきたる女てふ意歟又弱きをんなの男にあへるを世をしりたると云を打かへして老女にして好ましき心の出來たるをも世心づけると昔はいひけんかし○嫗女を和名抄に於無奈と有は老女の略言也たゞをんなと云は麻績女の意故に昔はをみなと書て昔便にてをんなと唱ふさればおんなとをんなと假字にて事をわかちたり後世はみなあやまれり

いかで情將在をとこに會見てしがなと思へど云出ん言の便りなさに孥三人をよびてまとならぬ夢がたりをす今本の詞たかへる事多しみたれたる本のまゝをうつし傳へし也　情あらん男とは在五中將をふゝめていへり

二人の子はなさけなくいらへてやみぬ三郎なりける子なん好御をとこぞ出こんとおはするにこの女けしきいとよし

夢のやうを占べおはする也拾遺集に夢よりぞ戀しき人をみそめつる今はあはする人もあらなん

と人はいとなさけなしいかで此在五中將にあひてしがなと思ふ心有て狩しありきけるみちに往而馬のくちをとりて是右なんおもふといひければあはれがりていきて寢にけり

三郎はとかくに母に從ふ心よりさりともとてかの男の狩しつゝありく方を尋て其由いへるに嫗女の心はふさはしからねど子としてしかいふをかの男のあはれとおもひて往てねしてふ意に書しならん○在五中將てふ詞此ふみに始て書たりこゝは名高き色好みなればそれならでもあてによろしき男をば在五中將よなど推戯れていふ事のあるをもて書しならんかし例は暗に此中將なるさまをおもはせて書しをこゝは又あらはして中々にそれならぬともみゆる也

さてのちをとこざりければをんなをとこの家にいきて窺けるををとこ入風所道見て

もゝとせにひとゝせたらぬつくも髪我をこふらしおもかげにみゆ

もなり平の事とおもふ故にさるしひたるたすけ言なもいふ也此二首いかて朝臣の哥ならんまつ哥なよく見さためて後こそとしかくもいはめたゝ評者の作れるにこそ前に榮而なよしつきてとよみしは似たるやうにて心も也或說に嫁おしたる女也とのみいへるはいかにそやかく老て子あまた有女を今さら嫁したるなといひいつへうもあらす祖父母なおほぢおほばと云なを略してはおぢおばと書り大父大母の意なれは也伯叔父母なはおぢおばといふは小父小母の意也仍て是はをのかなな事り假字はかくとわり有物そ

人の面影は我思ふ心よりみる物なれはゝ哥にも人の思ふにやおもかけにみゆるなゝいふはゝ例のゆゝなくよめるものを也

しのふに偲の字を万葉にあまた用ゐたり凡此古本には万葉にもとつける事多し

語のまゝにては九十九の女なれどかく甚しく云が戯れ也萬葉に百とせに老舌出てよゝむともなどよめるか如く物をつよくいふに興はある也源氏物がたりの源の内侍はこゝを思ひて書しにやそれは六十に侍るよし書たればこゝも五六十ばかりとは推はかるべき也さて女のかいまみたるを男ほのかに見て面かげにみゆとよめることせまらでおもしろし且つゞけがらは髪より面影と句を隔てゝ心得る體也○つくもは和名抄に水菜部江浦草豆久毛一云太久万と有て今もづくといふ物とみゆげにおほどれたる髪のごとき物也

といひてをとこ馬に鞍おきて出たつけしきを見てうばらからたちにかゝりて家に來てうちふせり

女いそぎて逃かへるさまをゝかしく書たり女のさまのかる〳〵しき事おのづからみゆ且此男馬にて出立は狩などに行さまならん

このをとこかの女のせしやうに偲て立てみるに

男其女の許にゆかん料ならば女のかいまみる間には出たゝじや狩のために出て女の家を垣ま見せし意ならん

女うちなきてぬとて

さむしろに衣かたしきこよひもや戀しき人にあはでかもねん

こはこきん集に本はまたくあり末は記者のそへたるならんげにこゝにはあはれなる哥にしなしたり○狭むしろは延喜式に長席狭席など見えてもとは狭き筵を云をかく用うる時は狭に意なくて發語の如し○衣かたしきはまろねすれば我衣手のかたへの下に敷るゝ故にいふ万葉におほき語也

とよみけるをゝとこあはれと思ひてその夜はねにけり世の中の例としておもふをば思ひおもはぬをは思はぬものを此人は思ふをもおもはぬをもそのけちめみせぬ心なん有ける

こればかりはことよく書たり光源氏のきみの女をみすてぬさまに書たるもこれらにやよりけん○けちめとは荷田在滿云別目の略也とげにも源氏物がたりに松と竹とのけちめといへるも必わかちめならではかなはず此古本に穴目と書たるは借字也けりの事ともいふへけれとなほこゝにも源氏にもかなはす非のけちと云は空闕なとの意なれはそれかさまにかけめ　されはけちめのちは清てよむべし

むかしをとこありけり女みそかにかたらふわざもせざりければいづこなりけんあやしさによめる

こはもといひかはせし女の宮の内などにあるが其在どころもいひしらせぬは且女の心をもあやしむ也

吹風に我身をなさば玉すだれひまもとめつゝ入倍ものを

意は明らか也されど玉簾ひま求めつゝなど云は宮中にてよろしき女なる事を思はせたるなるべし右の詞とてらしてしかおぼゆる也○或説に身を風になさばや也ばに切なる心有といふはわろし是は風になさば入ましとつゞけて一首に切なる心は侍りばやのてにをはにはあらず萬葉に旋頭哥いきの緒に我は思へど人めおほみ不來吹風にあらばしば〳〵逢べき物を又玉だれの小簾のすげきに入かよひこねたらちねの母かとはさば風と申さん又妹がぬる床のあたりに岩くゞる水にもがもや入てねなまし

女かへし

取とめぬ風にはありとも玉すたれたがゆるさばか隙もとむべき

ゆるして尋させずば風もえこそと也此かへしのさまのつれなさをおもふにも更に心かはれる歟又宮中にまゐりたればはゞかりて絶しこゝろともすべし

むかし帝時めきつかはせたまふ女色ゆるされたる有けり

時めきつかはせたまふとは御寵の盛なるを云今本につかう給ふと有はわろし古へはつかはせとよみたる事古本に仕瀨と書たるにてしるべし○色ゆるされたるは禁色とて染色と織物と二つなるをそれゆるされて著るを云延

ある説に結目也と云はいとわろしさてはいつれにも叶はす

玉すたれとてたゝひまもとむる疑辭のみにいへるもあれと此哥はしからす倍の字は次にもましとよみたり今本に入へきものなとは有もそわりはたかはす文選曹子建七哀詩＝願爲西南風一長逝入君懷一

後世人古書をよむにやゝもすれは仕はせ給ふをつかうたまふよみ給ふを

喜式に（彈正）凡諸禁色者總雖下衣不聽服用と有は色也（此前後染色の禁を云條也）又同式に（喚左右京職云云）有著禁色者邪（謂綾羅錦綺之類）とあるは文織物也されば此二つをゆるさるゝをしかいふ事あけらけし

大みやす所にて在ける從父兄弟なりける（此所句也）殿上に侍らひける在原なりける男の未いとわかゝりけるを此女相しりたりけり

此大御息所はまづは清和の御母后（明子）にていとこは高子（後に二條后）の御事と見ゆ在原なりける男は業平朝臣をおもはせたりされど業平高子を相知たるは文德の御時也清和の高子を寵させたまふ比は此朝臣四十餘の歳にて官位共に昇れる事史に見えたれば此時の事にあらずされば皆書まぎらせしを知べし

をとこ女のかたゆるされたりければ女のある所に來てむかひをりければ女痛醜なり身も喪びなんかくなせそといひければ

此男まだいと弱ければ女の方ゆるされてまゐるなるべし〇かたは也とは鳥の片羽を本としていへる事と見えてうつぼ物語に鳥の片羽もていへる哥あまた有さて片羽なるを人の身の具せぬにたとへ又こゝには見苦しく聞ぐるしくせるを轉じたる用ゐざま故に古本に醜とは書り源氏物がたりにかの人の御爲にもいとかたは也枕のさうしに見ぐるしき物色くろき人のひとへのすゞし著たるいと見ぐるしかしのしひとへも透たれどそはいとかたはにも見えずこれらのたぐひ也

思ふにはしのぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ

よう給ふなとやうに云はしひて古めかんとておしはかりにいへるもの也たまはりをたうび物のたまふを物のたうびなと云は昔便なるをすへてさる事とおもひあやまれるにや後世或裝束の抄に禁色とは深紅深紫の事とのみ有はわろし深紅深紫の外にも青色きくぢん赤色白ツルバミは上の御料の色なれはゆるしなくては著す凡禁色禁物は用うるに大中小の儀式により又其人に隨ひ父祖の蔭にもよる品々也式なとを見てあきらむへし後世書る物にてたかふ事多し

今本にいとこ也けりと有古本に稚と書たるはまたきびはの時参り馴たるかおよすけたれとまゐる意なるへし源氏の君のわらはにおはせしほとに藤つほの御簾の内にも入たまへるをおとなに成たまひてはゆるされさりしなとおもひ合すへきかた侍り清和の佛名を御心に入てとなへさせ給ふ比になり平のよはひをさなからんやは實錄を見て戯なる事を知へき也後人は斐輪車の事と思ひ推はかれと片輪の由はこゝの文には見えすして鳥の片羽の心によめる哥侍れは今もかたはと書へしはなわのとくとな

思ふ心のあまりにはえ忍びあへずしてかくおはする所に來るを會にしかへば身のほろびんはよしやと前に身もほろびなんといへるにこたへたりさて此哥は古今集におもふには忍ぶる事ぞまけにける色には出じとおもひし物をてふ本を取命やは何ぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくにてふ末を少しかへて用ゐて一首とせり例の事也

といひてざうしに居たまへればれいの此御曹司には他の見んをもしらで昇りゐければこの女おもひわびて里へゆくされはなんよきとゝていきかよひければみな人聞てわらひけり

∴此女出て居る時すらそこに來り侍る男なれば女の曹司に在時はいよゝ人の見ん事をもしらで曹司にのぼり來てをる也此所にといひてとは右の哥をいふそれよりつゞきたる詞なれば昇居ければとは男の事を云也今本の注に曹司に居給ふを下たまふと意得たるはわろし下るゝ意ならば古本に居と書んや〇さればなん云云を或注にされば何のとよみてふてたる語とおもへるはわろし然らば何之と書べきを古本何とのみ書は皆なんの辭なる例也女のみづからの里へ往たればしかあればなんいよゝよき事とてかよふ也

晨めて主殿司の見るに沓はとりて奥に抛入てぞのぼりをりける

夜はかの女のさとへ行て朝まだきに内裏に歸りて常に直宿する殿上の間にのぼりゐるをいふさて主殿寮の頭は毎日早朝に所部を率て御前の庭宮掖所々を朝清めするとて侍るにそれが見るをも思はで度々如是する也且沓は從者或はさらぬ下部など常にはとりおくべきを忍びたる事なればみづから取て猶端におかば今歸りたるをしらるべきとて奥の方へ投入たる也〇晨は初時の上下略にて早朝を云めてとはつとづけてなど云がごとし〇主殿寮は職員令云頭一人掌供御輿輦蓋笠繖扇帷帳湯沐洒掃殿庭及燈燭松柴炭燎等事助一人允一人大屬一人少屬一人殿部四十人使部二十人直丁二人駈使丁八十人などみえて人數多し又殿司後宮職員令云尙殿一人掌供奉輿

ふるは契沖てふ人の見出ていひたるを用ゆ女かたとよむ事後の物かたりにもあれとこゝは古本に女之方と有からはいにしへは女のかたとよみし事しるへし此二首以て作れるは記者の常のわさなるをいかて後の集になりひらの哥として入られけん哥のさまも作り事なれは本すゐ少とゝのはぬものを右に女之方といへるは臺盤所は女房の侍なれはそこにゆるされて此男まゐるなるへしこゝに曹司に居といへるに對へてしらる禁祕抄に臺盤所三間北間朝餉方敷ニ黄端疊一東倚子其南女房ノ簡入レ袋とも有或說は上のかくなせそといふ詞よりつゝきてとてといふ詞は有とおもへるにや注の心たかへり居のかなはなり下のかなはおりにてまかふ事なし○此文にとなん云けるを諸何かくな

んな是何とかける數いと多し殿庭とは諸殿の庭の事にてたゝ庭上を拂ふのみ也然を男官のとのも寮より女嬬を立て殿上をも司とらしむと云說はいにしへの官職の意にたかへりとのもつかさてふ名は同しかれと司とる事別にてこの男と女と筋と也

神巫陰陽師の下に等とかゝれは今昔物語に法師陰陽師と云かをく神巫にてをんやうかれたるも有故にさる事ならんかともおもひしか猶二つあけたるは文なるへくおもひなりぬ○古書には祓柱とも祓具とも書てははらへつ物とよむそ例なるな此古本に

繖膏沐燈油薪炭之事一典殿二人同ニ尚殿一女嬬六人　こは人數いと少し只後宮の供奉の事のみ司とりて他に及へからす延喜式是に同し　ある說に此後宮の殿司の見るとするはおぼつかなしいかにぞなれば右の女官の殿司は人數少ければ只後宮の内のみにて殿上人などの早朝に侍る殿上の間などに及ぶべからず　但江次第抄元日宴會條云次ニ上ニ南殿格子ニ掃部女嬬供奉酒ニ番殿上ニ主殿仕女供奉かくあれは酒番はかゝる大儀式は御前の事なるへし令式共に女官のとのも司は右に云ごとく人少き也仕女と云も後にはあれと古書にみえす又日中行事など云後世の物には女嬬酒番の事なともあれと此文なとには後世の定は叶かたし　そのうへ里より歸り入時の事なればまづは庭上の方こそいはめ故に男の主殿づかさとせんぞすなほなるべき也

かくかたはにしつゝ有わたるに身もいたづらになりぬべければつひにほろびぬべしとて此をとこいかゞせん我かゝる心をやめたまへと神ほとけにも申けれどいやましにのみおぼえて猶わりなくこひしくのみおぼえければ

かく人目見苦しく爲つゝ有に寵おぼす女の身も仕うまつる事かなはずいたづらに成ぬべし然れば男の我身終には罪なはれなんてふ意今漸おもひおこしていかでこの戀したはるゝ心やめたまへといのれどもえもやまねば祓へをする也

かんなぎをんやうじをよびて戀せじといふはらへの具してなんはらへける随にいとかなしき事數まさりてありしよりけにこひしくのみおぼえければ

神巫は神まつるは元よりにて厭符などをもし陰陽は卜部を豫て解除又は卜なひなどする也然ればいづれにもことゝは一つにて有べき事をねもごろにいはんとて二つを擧たるなるべし文にはさる事多し○祓之具大中小の祓によりて多少有其大祓へには馬鞍麻布幣帛人像などさま〲多く出せり此度は私の事にてかろきはらへつ物なるべし○有しよりけには萬葉に勝異殊等の字をよみて有しよりもことにまさるをいふ

戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

はらへのわさ爲るにつけて猶悲しさのまされば神はうけ給はずといへり此うた古今集に逢ぬ人戀る篇に入てよみ人しらぬ哥也　末を

祓之具と有からは具は音のまゝにていふ也此文つくりし比はやう〱に流れてさも云けんこも末の代になりて作れる一の証也これらはこきん集に入たる中にも古哥にてをによろしき哥也かく有まゝにいひてしかも感情の有は少き也万葉にいかにしてわするゝものそあめつちの神をいのれと我もひましぬ天つちの神をも并はいのりてき戀てふ物はすへてやますけり　六帖につらき人忘れなんとてはらふれは身そぐかひなく戀こそまされいせ集に水くきのかよふはかりをすくせにて大和物かたりに行末のすくせもしらすなとこの比は哥にもよみたり釋名云絆ハ半也物使ニ半行不ヲ得ニ自縱ニ也

倉はぬりこめを云ならんてふ說はさもあらんいとこのみやす所なもまかてさせて

神はうけずぞ成にけらしもと有をなりにけるかなとかへてこゝには用ゐたり○みたらし川とはいづこにても社ちかくて祓へなどする河をいへりある物に京極御息所の哥とて　春日野の松し枯ずはみたらしの河の流は絶じとぞおもふ

ともあれば也○みそぎは身滌にて水もて身を洗ひ清むるをいひ祓禊は身につける穢をはらひ除くをいひて二つのわざなればその意同じければ後にはかよはしていふ也此二つの事古事記に伊邪なきの命檍原にて身そぎし給ふ所にみゆ後世是を御そきと書はわろし身そきのいひ也

といひてなん往ける

こはかのをとこ祓所の河邊より家に歸りいぬるをいへり

このみかどは御かたちよくおはしましてほとけの御名を御心にいれてあかつきには御こゑいとたふとくて申たまふを聞て此女はいたうなきけりかゝる君につかふまつらですくせつたなくかなしきこと此をとこに絆されてとなんなきける

こはおほよそ清和天皇に擬たてまつれり三代實錄に　天皇風儀甚美端嚴如レ神性寛明仁恕温和慈順好ニ讀書傳ヲ潜ニ思釋教ニ鷹犬之遊漁獵之娯未ニ嘗留ヲ意と有をもて書り○すくせは前世の果を云佛教の語也是もいとふるき世にはいはず○被レ絆は　男に　つながれてといふ意也萬葉に馬にこそふもだしかくも牛にこそはな繩かくも云云古今集に世のうきめ見えむ山路へ入んにはおもふ人こそほだしなりけれ

かゝるほどにみかどきこしめしつけてこのをとこをば流しつかはしてげり

先に終に亡びぬべしと云是也

此女をばいとこのみやす所をば退出させて殿倉にこめてしほりたまふければくらにこもりてなく

前に身もいたづらに成ぬべしと云是也さてかの五條の皇太夫人のおはする宮をも去しめて長良公の倉にこめてなやませこらしむると云ならんいまはたゞ倉にこめてと有を古本に殿倉とあり○しほりければゝ落くぼ物がた

りにおちくぼの君をくらにこめてなやませよてふ所に委し　この北のかたにこめて物なくはせそしほりころしてよと父中納言おいぼけて物のおぼえぬまゝにのたまへば云々次にくるゝ戸の廂二間あるへやの酢酒いをなどまさなくしたるへやのたゞ疊一ひら口のもとにうちしきて云云是にて意得べし木の枝などをしをりたわめるがごとくして人を懲しむるを云也

蜑のかる藻にすむ虫の我からとねをこそなかめ世をばうらみじ

意はあきらかにてさこそなげき給ひけんとあはれにおもひやらるゝ也こは古今集に典侍直子朝臣の哥　有をこゝにかりたり女の哥にて哀なるこゝろふかく聞ゆるをよくもこゝにとり用ゐたるかな

となきをればこのをとこは他の國より夜ごとに來つゝ笛をいとおもしろくふきてこゑはをかしうてうたひける

女のもし聞もぞするやと笛を吹又次にあるいたづらに行ては歸るてふ哥をうたふ也けり○他國とはいへど近流なれば夜べごとに來る也されど流罪は其配る所の制有て私に他へ行べからぬ法なるをこは物語なれば筆にまかせたる歟又このゝちに朱雀村上などの御時と成て物の制もあらず成ぬれば其時の筆故に時に隨せて書るにも侍るべし

如是有ければこの女はくらにこもりながらそこにそあなるとはきけどあひみるべきにもあらでなんありける

六帖にいへばえにきけばかなしき笛竹のよどゑや誰と問ふ人もなし

さりともと思ふらんこそ悲しけれあるにもあらぬ身をばしらずて

意明らか也是は記者の哥と見えたり○さりともとは古本の字の如く然は有と雖の略也事出來ての上とはいへども猶いかで逢よしもがなと男の思ふらんがかなしきと女のよめる也有にもあらぬとは我はもとの如くて在ばかゝる憂め見つゝこもりゐるともしらでてふ也

とおもひをり女のもふ也　男は女しあはねば是行乍

こはすでに他國より來てうたふといへるに同じけれどいと度々なれば又こゝにいふのみさるを今本に此行つゝの下に人の國にありきてかくうたふと有は事重なれり傍の注を誤て本文に書しなるべし古本になきを見るべし

いたづらに行てはかへる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ

こは古今集の哥なるをよきほどの所に用ゐたり○万葉にかくしてや猶や歸らん近からぬ道のあひだをなづみまゐりて○物ゆゑにとはよめど物からといふに同じく物ながらといふ辭也

「水尾の御時なるべし大息所は染殿皇后なり五條の掖庭とも」是は此一條のさま水尾清和のみかどの高子を寵たまふ時のさまに書しかば水のをの御時なるべしといひ且其比に大夫人と聞ゆるは御母そめ殿の后なれば染殿皇后也と書り然とも寔に高子のいとこと申は文德の御母五條后なればいと子といふにより五條后といふ說も有といふ注の意也是すべて此物がたりはわざといづれともつかぬやうに書なしたるこゝろ得ぬものゝ裏書なるを後に表へ出して書るもの也其由上にいへるを以て知べしさて高子業平と相知たるは文德の御時也いかにとなれば業平は仁明の御時正六位上と聞えて文德實錄にはかりにも見えず清和の貞觀四年に正六位下より從五位下に轉じて右近衛權少將となり同五年左兵衛佐と見えてより官位いよゝ昇進せり然れば此文の如き事清和の御時にいたりてはあらざりける證にて文德の御世に有し罪なりしを知べしさて染殿后も貞觀六年に皇太后となりたまひ高子も同八年に女御と聞ゆ然るを大みやす所といふ事例の物がたりといひながら實を尋れば田村の御時の文德中事にて田村の御母后五條后のまだ大みやす所とまうす時の事とおもひ定めて後この物がたりの時代をも人をも書まぎらはせしを知也

せられし緣坐にて須广へ退きて住れしを忌へき事にてすへて書さるにや此條の次にむかし男つの國にくたり又世をうみわたるなとよみたるさまさるの時をのり事也田村の御時事にあたりたるといふによくかなひたり次の條に有哥は後撰集にはし書有てなりひら身のうれへありてつの國にすむはんの此他國よりかよひ來たるといふも思ひ合すへし委しくは次に彙く

本文の哥とも五首有か中に四首は古今集の他人の哥をとり一首は記者の作たるとみゆるを猶實事とおもひたる右のうら書は論にもたらぬ事ならすや

昔をとこありけりつの國にしる所ありて朋友貝つらねて難波のかたに往に渚を見やりて

知所とは領ぜる所也昔は大かたの人にては領知てふ所はあらぬ制なれど物がたりなればさて有べし○貝は借字

にてかきつらね打つらねなどいふが如き辭のみ萬葉に浦しまの子かよめる哥　かきつらねとこ世にいたり云云

なにはづをけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟

此海を見ては興有べきに世を倦わたる身は見る物につけてしかおもひよせらるゝ也こは後撰集に入たる業平朝臣の哥にて寔に意も調べも殊なるもの也且それをこゝに擧たるは前の條により所有ならん○難波津は古への官津にて大津なれば御津ともいふなるべし　六と御とは同し事なる例あり　三の津てふ意ならぬ事は万葉に証どもあり然るをこの哥に三津の浦ごとにといへれば三つの津あるにやとも云べけれどさはあらずこゝにはたゞそこら見わたす浦々をいふ也

これをあはれがりて人々かへりにけり

此哥をめでゝ人々はよまぬ也

むかしをとこありけり逍遙しに思ふどちかいつらねていづみの國へきさらぎばかりにいきにけり

日本紀に逍遙をあそぶとよみたるが如く是も心をやりて遊ふをいふ也○きさらぎは二月也此月をきさらぎ月と云は草木發月也草木の芽をはり出すこゝろ也

かふちの國いこまの山を見やればくもりみはれみ立居る雲やまずあしたよりくもりてひるはれたり雪いとしろう

昔をとこありけりつの國にしる所ありて朋友貝つらねて難波のかたに往に渚を見やりて

知所とは領ぜる所也昔は大かたの人にては領知てふ所はあらぬ制なれど物がたりなればさて有べし○貝は借字

にてかきつらね打つらねなどいふが如き辭のみ萬葉に浦しまの子かよめる哥　かきつらねとこ世にいたり云云

なにはづをけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟

此海を見ては興有べきに世を倦わたる身は見る物につけてしかおもひよせらるゝ也こは後撰集に入たる業平朝臣の哥にて寔に意も調べも殊なるもの也且それをこゝに擧たるは前の條により所有ならん○難波津は古への官津にて大津なれば御津ともいふなるべし　六と御とは同し事なる例あり　三の津てふ意ならぬ事は万葉に証どもあり然るをこの哥に三津の浦ごとにといへれば三つの津あるにやとも云べけれどさはあらずこゝにはたゞそこら見わたす浦々

木梢にふりたり

生駒山は峯をかぎりて東は大和西は河内也其いつみの國へ行とて見る方は河内なればこゝに河内の國いこま山といへりと土人の申せし也

きのふけふ雲の立まひかくろふは花のはやしをうしとなるべし

かくえもいはずおもしろき花をば人の見んを妬みをしみて雲の立かくしつる也けんといへりさてこは花也と不意に見たるをそのまゝにいへるぞ古への哥のこゝろ也けふ下に目はたがひながらよめるといへるなど此意にてをさなきぞ深き心のかぎり也ける○詞にくもりみはれみ立ゐる雲やまずとは此頃すべて雪を催すけしき朝よりくもりて晝はれたりとは今日はとに曇りてつひに雪と成たる後はれたるをいふなるべしさるからに哥にきのふけふとよめるにもたがへる樣になるべし○かくろふはと有はいとおぼつかなしされど古本にも隱呂鋪者と書たれば隨ひて云時は雲のかくすはと聞ゆ然をかくすは用の語にて雲のしかなす也かくろふは體の語なれば山の雲に隱るゝ事と成て上に雲のといひし語意そむけり依て思ふに古本の呂はそをあやまり今本もそをろとまがひてかくろふに成つらん萬葉に三和山をしかもかくすか雲だにも心あらなんかくそふべしやとよめるが如くかくそふはと有時はかくすはてふ意にて語の意かなへり○うしとなるべしはねたみてうしと思ふ意也或說にうしとをしと通音也といへどうしとをしと通ふべき例なし妬む心にて憂しとよみたるこそいと宜しけれ

今本におりゐつゝゆくとあるはやまとの也　又みよしの濱のもとにて住吉の郡のことを云ふ　本そりあきえすなにわの闕　古事記にえらの野なるとあり　記にはこしのはやくさのはとなるとあり　記にはしたりれよしのはてありなんすみのはえひえなみのはなとなるとえて云

昔をとこいづみの國へいきけり住江の郡住吉の郷住吉の濱を行にいとおもしろければ下居つゝ或人住吉の濱を加へて海頭をよめといふをみな人よまんとするに或人よめり

郡も郷も濱も同じ名の所を書つらねたるにて文もおもしろくそこをめでたる意もおのづからこもれり○下居つゝは皆人馬よりおりゐる也巳に八橋の條にもあり○住吉はすみの江とよむ事也惣て吉の字をえとよむは古への例にて近江の日吉も古事記には日枝と有比枝の山の社なれは ひえの神といふ也 凡萬葉その外の古書に皆しかりえとよみても即よき事にもなれり又借字なるも物によりてはあり

鴈なきて菊の花さく秋はあれど春は海邊に住の江の濱

鴈啼菊にほふなど秋も面しろけれど春の海べのけしきにはしかず我は春は海邊にこそ棲なんといふを住の江のはまとはつゞけたり住むにいひかけずば海べにてふ詞かなふべからず或說にしからずといふはいかにぞや

とよみければこれにめでゝ人々よまずなりにけり

かく書る例多し一の古本にはとよみければ皆人是をあはれがりて云々とあり 今本にとよめりけれは皆々よまず云々と有は皆人とか人々とか一つにて有けんなれいの亂たる本なうつしけんかし

むかしをとこ有けりそのをとこいせの國へ狩使にいきけるに

こは古今集に業平朝臣の伊せのくにゝまかりたりける時に齋宮なりける人にいとみそかにあひて又のあした人やるすべなくて思ひをりけるあひだに女のもとよりおこせたりけるとてこゝの二首有をかく詞をかへて一條とせる也さて狩づかひの事は史には使の人々をも萬の事をも委しく記されて侍れど業平朝臣をつかはされし事なし此朝臣專らさる事有べき清和の御代には鷹漁の遊びはとゞめられて一度も非ず陽成の元慶八年に再び興されたれど此朝臣はすでにみまかられし也然ば例のことさまに作りかへたる夏知べし

この母と云は染殿の后なり或は實母とも云ふ　說は無益の事なり　とのゝ說にてはものいひならはれたる忠仁公の家禮なれは世のさまとしらぬ說也

文德實錄天安元年二月己巳朝丙申廢二鴨齋內親王慈子內子一更立二无品遠子內親王一爲二齋內親王一　中略　其夜一餘者世无レ知レ之也かゝ齋王はもしは伊せの廢の時は事あるへしとは諺せるへしもいはゝ有の事也文はかりの也恬は子齋王にはすも少しさる史にはみえず然る事なるべし物かたりなもれたるは此むくつけ人は心いかなる人の罪なさだ貴人の罪なるべくとさすかなそこにかやへりそ本ここさせてあり今はつゝこさの言あるつゝこなけまれりはなくてれりの下にかくれんころにいたつきて

かの伊勢の齋宮なりける人の母つねのかりづかひよりはこの人よくいたはれといひやりたりければ母の言なりければいとねんごろにいたはりけり

此齋宮なる人を諸說に恰子內親王にて文德の皇女惟高の御同腹御母は紀の名虎の女靜子也と云は此文に惟高の親王紀の有常業平のしたしくみゆればことにねもごろにせよと母のいひやれると有などをもていへばより所有に似たり然るに恰子內親王は貞觀元年にトばみて同三年に伊勢へつかはされ元慶元年陽成御即位まして代まゐらする例故に京に歸らせ參らせて十七年の間事なくませし也業ひら朝臣は嘉祥二年廿五歲にて正六位上に叙せられ其後文德實錄にはみえずして右より十三年歷て清和の貞觀四年に從五位下に轉任しそれより昇進すみやかにて元慶四年に卒られたり是をおもへば右に云恰子內親王さい王の時は業平三十歲にあまり官位もしきりにすゝみたれば伊勢に下るとも放縱なるべからずもとより五位以上の人くだし給はゞ必史に見ゆべしかた〳〵恰子の齋王を奸せしにはあらざるなりもしさる事をいはゞ貞觀より前十年ばかりの間の齋王のうへにやあらんそも古へより齋王奸されては必廢せらるゝ例日本紀などにあまた見ゆ此天安の比にも鴨の齋院の廢せられし事を祕事なりし由史にしるされしも奸されたまひし故なるべし然るに其比の伊せの齋王は史にさる事みえざるを恰子內親王也とさしたるは無失の罪の反坐おそるべし〳〵

あしたには狩にいだしたてゝやり夜さりはそこにかへりこさせけり二日といふ夜をとこ破てあはんといふ女もはたあはじとはおもはざりけれどいと人めしげゝればえあはず

われてを破而と書は借字にてわりなくして也わりなくはとわりなくの略言にてことわりなしと思ふ事も切におもふ時はえ堪ずしてこひなげくに云を新撰萬葉に鶯の破てはぐゝむ櫻花思ひぐまなくはやもちるかなこれもわりなく强て羽ぐゝむ意なる事下の句にしらるこきん集によひの間に出て入ぬる三日月のわれて物思ふ比にも有かんころにいたつきて

なてふは月の片破てをば理りなくにいひかけたる也

使眞とある人なればとほくもやどさず女の寢屋もちかくありければ女ひとをしづめて夜半一許にをとこのもとに來けり

使眞は使の中に宗とする人を云日本紀に主神をかみざねと訓たるによるに是も使主と書意也○子ひとつは夜の半也昔は一時を四つにわかちて子一つ子二つ子三子四といふ他の時もしかり

をとこはたねられざりければ戸の方を見いだしてふせるに月のおぼろなるに人のかげのしけるを見ければちひさきわらはをさきにたてゝ人たてい

或人外の方の意といへりしもあしからねど古本に戸之方と書たるに依にえねられぬまゝに戸口をさゝで月を見出して倚臥たる也次の詞に我寢る所へ將て入とあるからは今は端ぢかく假に在る事知べし○此狩の使は春の末ならんか冬春共に立らるゝ例なれど冬は戸もさゝでは夜のかりねは堪じかし

をとこいとうれしくて我ぬる所にゐて入て子ひとつより至鷄明あるにまだ何ごとをもかたらはぬに歸りにけり

子の一刻より丑の三刻まで也○まだ何事も古今集にむつごともまだつきなくに明にけりてふよりもはかなし○或說にかくはかなくも書れど高階の師尙は實は此齋王のうみ給へるなど云はいかなるをこのものゝ云出せし事ぞ此說などに云怡子の齋王は事もおはさず歸りたまへる事既に實錄を引て云がごとし努々さる事とおもふべからず大かたの人だに有を專ら物忌をわざとしたまふ齋王にして懷妊の產穢をいかにしのびてあらはれ給はぬやう有べき是は齋宮の事を少もしらぬものゝ云出せし事也

をとこいとかなしくてねずなりにけりつとめていといぶかしけれどわが人をやるべきにしもあらねばいと心もとなくて待をるに明はなれてしばしあるに女之從許詞者無而

鬱悒を万葉にいぶかしともおぼつかなしともおぼにともよみたれどこゝはかのたらちねの母が養蚕のまゆどもりいぶせくもある歟妹にあはずてといへる如く心にこめて思ふを云次の心許なくて待居ると云は女のかへりて後いかゞ有らんとおもひてかなたよりの便りを待をるほどの意にておもひやる心のもとづく所なきを云語也○上のつとめては初時の事にて漸明なんとするほど也次の明はなれては既に明て後也丑三刻より明んとするまではたゞ別れしを悲しとおもひて寢ずなり明て後朝の文やらんすべなければかなたの便を待ほどのさま次序よく書つ○詞はなくてと書るげにしかるべき事也此哥に夢歟うつゝかとよみたる心にては詞に書んやうはなし

君やこし我やゆきけんおもほえず夢かうつゝ歟ねてかさめて歟

はかなく別れ來つればしかおもはるゝ後朝の心をのみ述たるにさま〳〵深くおもふ心はこもれり昔はかく有事の餘意をのみいふ故に姿よく心ふかきそかしさて下の句は上をことわるのみ也萬葉にうつゝにか君が來ませる夢にかも我はまとへる戀のしげきに

をとこいといたう打なきてよめる

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとはこよひさだめよ

夜べの事は我はたかきくらす心にえさだむべくもおぼえられず夢歟現か世人さだめ辨ちてよと也をさなく世人といへるぞかぎりなくよろしき也今はこよひ定めよとあれど此古本にも古今集にも世人と有によるへし

とよみてやりて狩に出ぬ野にありけど心はそらにて

萬葉にわぎもこが夜戸出の姿見てしより心空也土はふめどもてふ如き哥三首ばかりあり

こよひだに人しづめていとゝくあはんとおもふに國の守齋の宮のかみ兼たりければ狩づかひありと聞て一夜酒のみしければ專らあひごともえせで

まなくいふ心をはさとらさりけり

今本はとはいと亂たり

此字音をもましへてよむは天暦なとの頃より多し是又後の世に書しなをしたるへゝぬれぬとては何のぬるとも聞えぬを此万えうの哥をてらして抽のぬきとしるへきぬれぬ也哥の上なは本と云也下なは来と云也枕草子に圍省花時錦帳下書て是かとせ末ないをかしなむるかにりかほとゝなるにすみつのきをしたくおんもひみくそのなにまんなるしてかゝとなれたのついほりれんとなる

貞觀の比に伊勢の守の齋宮寮かけたるはなし是もわざと書かへたる也

明ば尾張の國へ將去べければをとこも女も人しれず血のなみだをながせどもえあはず夜やう〳〵あけなんとするほどに女のかたよりいだせる坏に哥をかきていだしたりとりて見れば

取て見ればといへばさかづきに直に書たるならん今本にはさかづきのさらにとあれど古本に返しの所にのみ盤

と有をよしとす

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば

えにしは緣を江にかねたり緣は字音なれどかゝる事には有もしつべし歩にてわたるにぬれぬばかりの水はいと淺きなるを二夜とだに逢がたきあさき緣をそへたり万葉に廣瀨川袖つくばかり淺きをやとは人の心のあさきを

よめるをこゝに緣の淺きに轉じていへりかつわたれども垂たる袖のぬれぬを略して今はいひけん

と書て末はなし其さかづきの小盤に續松の墨して哥の末をかきつく

小盤は坏をすうる皿也さて上は其坏に書てあれば又書ん所もなきか或は用ゐたれば書がたきにもあらんよりて

今は小盤に書付とみゆとにかくに古本ぞよき○續松の墨は清少納言もさる樣書たるはこゝにやもとづきけん風

流なるわざ也松明を和名抄にも續松と有松の秀を物してまとひつぎてたく故につぎ松といふを音便にてついま

つと唱ふる也ついまつたいまつ同音也といへるはわろし事は同しくて語は別也たいは燭也ついは續也

又あふ坂の關もこえなん

こは又いかにもして逢時も有なんとなぐさめていへりそれが中に京にかへりてもあふ坂を又もこえて伊勢に來て逢んてふ意をもこめつるにや

といひて明れは尾張の國へ越にけり

こえにけりとは海を越てゆけば云歟

「齋宮は水尾の御時文德天皇の御女これたかのいもうと」

此詞今本にそへてあれど古本にはなし此齋宮はかの怡子内親王にては叶はざる事既にかへす〳〵いへるが如し

且此詞に御むすめといひ惟高とのみ書るなどかゝる人々の御名書へき例をだにしらぬ後世のをこ人のわざ也

皇女をはひめみことといふそ古訓なる又惟高親王は文德の一の皇子也いにしへ皇子なたふとむ事後世にことなり終るを此閑たる詞の如くかく事はかつてなき事也

むかし男狩のつかひよりかへり來けるに大淀のわたりにやどりていつきの宮のわらべにいひ懸ける

上の條の同じ度にて尾張より京へ歸るとて伊勢を又經るに大淀てふ所に宿りたれば齋宮より御使の有が中にかの心しりのわらはべもあるにいひかけたる也○大淀は延喜の神名式に伊勢國多氣郡に竹大興杼の神社ありて即齋宮の同じ郡にて遠からぬには御使も有べし且さい宮くだりたまふ時先こゝに祓ひして齋宮へ入給ふ例なれば京よりの道べに有ならん同式に下り給ふ路の次あり然るを或說にいせ尾張の道のわたり口也とあるはいかゞあらん

見るめかる方やいづこぞ棹さして我にをしへよあまのつり船

かの見し後あひみるよしもなくてわひしきにさるよすがををしへよとみち引せし童女なればいふを浦の物もて詞をなしたり筆の人には告よとよまれしを思ひて記者のよめりと見えたり

むかしをとこありけり伊勢の齋宮に内の御使にて參りければかの宮に榲子といひけるをんなわたくしごとにて

こは齋宮へ御使とわきて書たれど例に因に右と同じ度にてやどれる間に有し一つの事とすべしかくまぎらはしきが此文の常也且榲子とは齋宮に侍る女也故に私言といへり源氏物語の須磨に内侍のかみの御もとに中納言の

此哥朝臣の口つきならす後の集になりひらのとして入たるはいかにそや

皇朝の古言にすきまをとうすはなれなかりしなとかうりなとの意と好色風流俗すりなるの意なとも云也物云也そ云也數奇云はふいかにの字なそ也數奇なのくはは漢書にはあれとも意はくしはくきにはあるやしとふ事なはは俗の云也後人皇朝の古言異文字多くこはの字なるもつまつるかあるはあまりしき事也

君のわたくしごとのやうにてとて哥有こは後の物ながら相しらるゝ詞也或說に是を數奇ごとしける女といひ私言をさゝめごとゝいふ皆わろし古本によるべし且この使は私事にあらずと云もまどへる說也御使は公事ながら侍女がおもふ情は私ならずや右の源氏の詞などをむかへて思ふに齋王のおぼす男を私にも戀なる意にてこをもてかのみそかごとを暗にしらしむるにも侍らん

ちはやふる神のいがきもこえぬべし大みや人の見まくほしさに

大宮人を見まほしさには祟りある神の齋離をも越ぬべしと云也しかいふ意は身のほろびんもおもほえずてふ也こは万葉にちはやぶる神のいがきもこえぬべし今は我名のをしけくもなしてふ哥の本を用ゐて末をは記者の作れるもの也同集にゆふかけていはふ社もこえぬべしおもほゆるかも戀のしげきにとも侍り

をとこ返し

戀しくば來ても見よかし千早ぶる神の禁るみちならなくに

忌まはり侍る神垣をみだりにこゆまじきはさる事ながらをとこ女のあふ事は神のいさめたまふ事ならぬからはいと切におぼさば齋離をもこえ來ませよと也此男は大ぞらにおもふさま也○神のいさむるは万葉集に筑波嶺爲婦哥會日作哥長哥也此日は人妻我妻なりは　此山をうしはく神のむかしより不禁行事ぞ此詞をとれる歟

昔男在けり伊勢の國なりける女を又えあはでとなりの國へいくとていみじう嘆ければ女

こゝ上の齋宮にて一夜あへる人を云とみえたり且古本に嘆と書てなくとよめるは意ひろくてよし今本にうらみければとあるは哥の詞になづみて例の書かへたるならん

大淀の松はつらくもあらなくに浦見てのみもかへる波かな

松を女に波を男にたとへて我つらきにはあらぬを我をうらみがほになきてかへるかなと女の云也こは古今集にえらまれしなといかなる事そや

月中桂樹の事ひとの國にはやくいひたる事也

在原元方　あふ事の渚にしよる浪なればうらみてのみぞ立かへりけるてふをもて記者の作れるなるへし

むかしをとこ彼所にはありときけどせうそこをだになんいふべくもあらぬ女のあたりをおもひて

そこには在ときけどゝいひ女のあたりを云々などいふは前に女みそかにかたろふわざもせねばいづこなりけんあやしさにてふ條に似たるにこゝの哥に目には見て手にはとられぬとあるに對ひてはさも侍らず此間の意おぼつかなしとも云べけれどこは万葉の哥を少しかへて詞を作りそへたればさばかりゆきたらぬ事は常有事也大かたに意得て有なん○消息てふ字は死生を問往來の事とから國にていへるをその音のまゝに用ゆされど轉じてはたゞ文をも語をもいひかよはするをいへりさてこゝは詞も文もかよはしがたきほどの女を云也

目には見て手にはとられぬ月のうちの楓のごとき君にそ有ける

こは万葉に四の句まではかく有て終の句妹をいかにせんと有をそこのみかへて擧たる例のわざ也○楓の字を後世かへでとよめるはわろし和名鈔に楓桂といひてかつらとよめる事萬葉に同じ○手にとられぬてふ事は他國にもいへり文選に陸子衡詩　明月入我牖照之有餘暉攬之不盈手

むかしをと子女をいたううらみて

いはねふみかさなる山は隔てねどあはぬ日おほみ戀わたるかな

さるさかしき山などもへだてねども如是逢ぬ日の多く侍るはそこの心也と怨みたる也さてこは万葉に石根ふみ重なる山はあらねども逢ぬ日おほみ戀わたるかもと有を例のとりもちゐて三の句をのみ今少かへたり今本にあらねどもと有は拾遺集によりて後になほせしにや古本に不隔どゝあるからは此文にはかへたる物也二の句古本に山はと有ぞよき今本に誤りて山にと書たるをそれにつきて說を下すはひがこと也又四の句を今本にも拾遺にもおほくと有はわろしおほみと有べき也かゝるみの辭はおほくしてとてふ意也○岩根ふみ重なる山とは岩ほなど不相日數今の万葉にも今調あはぬあはひとあまたとよみたれとおなはてはつきすほみとよむへし万葉にもあられとも後人万葉をみれはおきこゝにあり拾遺なこゝに此文とけたりされと

には万葉を少かへたるは富の事なるべしや

此うたなり平の朝臣とりしはとて後に古哥の風をいかにもなりひらの口つきをもわさかたきにや

ふみつゝこゆる山は深くさかしき山にして人のかよひがたきをもてたとへたる也

昔をとこありけり伊せの國に欲得行而將相とわりなくいひければ女

こは男女京にあれども逢がたければ既に或女を偸みて津の國のあくた川わたりいきけんたぐひにていせの國にともなひ行て相見てしがなてふ也けり伊勢をしもいふは右の齋宮わたりの意にて云にはあらじこゝの哥大淀てふ詞を得たればならん○古本に欲得と書たるは万葉にがもてふ辭に乞願ふ意有をば欲得と書たるによれりさればいせの國にがな行てあはんとよむべしこれを彼齋宮に行て逢んと云說は哥に見るからに心はなぎぬといふにも其外にもそむくを猶それは前に一たび見しを云といへるなどいかなるひが心ぞや文は文に隨せてこそとくべけれ

おほよどの濱におふてふみるからに心はなぎぬかたらはねども

海松を見るに云かけたる序哥也さて共に京に在てよそながらもみるからに心はなぐさみ侍りさる國に將て行てかたらはでも有ならんと也

といひてましてつれなかりければをとこ

袖ぬれて蜑のかりほすわたづみの見るをあふにてやまんとやする

女の哥をうけて我は見るのみを逢にてはえたへずといへりさて海人の袖ぬれてみるめ刈に我涙をそへたり

女かへし

岩間よりおふるみるめしつれなくばしほひ汐みちかひもあらなん

こはかく見る事だにかはらであらば是を朝夕のかひにてこそ有べき物なれと右の大淀の哥と又同意也ましてつれなかりければと書るはこゝを云也○海松は岩に生て且色かへぬ物なればつれなくばといへるはそれによれる語にもあるべし○しほ干汐滿は万葉にあしづの海しほひ汐みつ時はあれどいづれの時かわが戀ざらんとよめるは時有事をいひ此哥には朝夕に常にてふ意にていへり然るを此語に泥みて或は男の心のかはりかはらぬたとへと思ひあるは世の中はかはる事もあれば逢ときもあらんを云などおもへるは皆わろし語はうへを摘てかろくとるると深くもとむるとあるを物によりて意得ぬなるへし

又をとこ

涙にぞぬれつゝしぼる世の人のつらき心は袖のしづくか

かくつれなきに堪ずして涙にぬるれば袖をしぼるに雫の落る也その雫は即人のつらき心がなる歟と切なるうへにてをさなくいへりされどこの哥は例の記者のむつかしき也是をも業ひら朝臣のと云にや此朝臣の心ふかくよめると記者のとはいと異なるをいかで見わかざるにや

世にあふ事はかたき女になん

世にてふ詞は世間に勝れたる事を云略語也たゞに辭と云說は委しからず

むかし二條の后東宮の御息所と申ける時氏神にまうで給ひけるに　古今集雜の部には二條后東宮の御息所と申ける時大原野に詣たまひける日よめる在原業平朝臣とて左の哥あり

是にはいと論ふへきむねあれどまづ東宮の御息所とは東宮の御母みことを申てふ說による時は清和天皇貞觀十一年より同十八年までのあひだを申べし　貞觀十一年二月一日此みやす所の生奉り給ふ皇子(陽成)太子に立たまひ元慶元年正月一日(貞觀十九年改元)に御即位ましゝて其御みやす所(高子)皇太夫人にのぼりたまへれはなり　さるを右年月の間に此御息所氏神詣の事實錄にも古記にもみえざるからはおぼつかなけれど古今集と此ふみにかく有故に右のごとく東宮の母儀とは云なるべし　おのれか考は下にあり　○大原野の神社は今の京と成て藤原氏のちかくて常に詣られん料に春日の皇神を此乙訓郡の大原野にうつし祭られたり其うつされし時を思ふに

この所に背聞妙とやらん云ものに蓋しきひかこと有

東宮のみやす所とは本は東宮の妃なる事はすでにいへるかとし此或說は轉したるにて此文にかなはすそのむれ下に委しみやす所此高子のみ元慶元年までは女御とみゆ或說に嘉祥三年に

文德實錄に仁壽元年二月乙卯　十二日也　別制ニ大原野祭ニ一准ニ梅宮祭ニとあれば其近きほどに還されて此度祭を制められしなるべしさて貞觀の比となりて后の詣給ふ事にはなりにけん

近衛づかさにさむらひける翁人々に祿たまはりけるついでに御くるまよりたまはりてよみて奉りける

業平朝臣元慶元年正月五十一歳左近衛中將となりたれば近衛司とは今年より云べし翁といへるも又哥に神代の事も

と有など皆かなへり然るに今年彼太子も即位ありつれば御母儀をみやす所と稱すと云時はたかへり此朝臣また

貞觀六年に左近衛權少將となりし時の事と云ともさては高子をみやす所と申さぬいと前也かく紛らはしきぞ此

文の例なるをや

大原や小鹽の山もけふこそは最初の事もおもひいづらめ

この皇神は　天見屋根命　天孫に奉侍給ひてより其裔の藤原氏万代たえずいや榮えにさかえて今東宮の御息所の詣給ふを皇神のよろこび給ふにつけて其神代よりの事を神のおもひ出たまふらんと也まことに此朝臣の哥にてしらべ高くこゝろおもしろしさて是は古今集にての意をいへり此文にとりては此御息所高子はやくの密事をおぼし出てや此翁に人よりことに御車よりしも祿たまふならんといふ意をふゝめてよろこぶさまにとりなしたりさる時なればおもてはたゞ此神の御心のさまにていへるとせる作りさまえもいはず巧みたり且かく解ずば詞書に人々にろく賜ける次でに御車より賜りてよみて奉りけると書たる詮もなく哥の意もよく得がたかるべし

とて心にもかなしとや思ひけんいかゞ思ひけんしらずかし

男哥にしかよみて心にもいかばかり昔思ひ出て悲しかりけんといへり右の端の詞のみにては心をそへたる樣猶あきらかならねば此詞をそへてさとらしむる也いかゞ有けんしらずかしと書たるはいよゝ下情有つらんよしを思はせたる也

皇太后幷御息所大原野に詣たまへる考

江家次第云大原野行啓起ニ五條后順子一以ニ藤氏勸學院衆一爲ニ車副一二條后高子以レ妊　乘ニ車後一在中將書ニ和歌一興ニ二條后一人疑先レ是若有ニ密事一歟是は五條后文德母后清和祖母　高子の御息所を車後に乘せて詣たまへりと云也考る に三代實錄貞觀三年二月廿五日に向ニ大原野神社一以ニ藤氏六位以下一爲ニ車從者一と有をもて書る也　此皇太后は五條后也藤氏の六位以下と有は勘學されど實錄には高子の同車なる事なきはまだ初めて從五位下などのほどの人にて記すべくもぬんの衆としらるあらずはた后の私に召し故にも侍りつらん然るを古今集にも此文にも東宮の御息所と有は誰も陽成のまだ東宮と聞ゆるあひだの御母の事と思ふより右貞觀三年の行啓は別の度なりとして江次第の旨は誤り也と定家卿をはじめ其後の人々も云あへるならん三代實錄の大法師圓仁が傳に貞觀三年六月太皇太后五條の宮に僧を請じ給ひし事記せし其大皇太后は順子の御事なれば右同三年二月にたゞ皇太后行啓と有は染殿后明子也とおもひしを右の圓仁が傳は同六年に記して今年順子大皇太后となりたまへば後を先へめぐらして書たるものにて右三年に皇太后と申は順子の外になき也其証は右同貞觀六年正月七日の宣命に以ニ皇太后一大皇太后爾皇大夫人乎皇太后爾上奉云云と有て是より先貞觀三年の比に皇太后と申は順子にて明子はまだ皇太夫人にてませし也かゝれは右の江次第の旨たがひなし哥よむ人はたゞ哥書にのみつきて實錄などをば大かたに見過す故に却て古人の記を疑ふなりけり○或人問右の匡房卿の記をよしとせんならば此東宮の御息所の詣たまへるはかの陽成太子の貞觀十一年の後に別に有けんを實錄に脫せしにやと　答江次第しるされし世はまだちかきほどなれば實錄の正本諸記錄にも依れしなるべきをたゞ右の如くのみ記されしを思ふに他后などの行啓は其世になかりし事知べし又問右のごとくならば物語はひが事ともすべし古今哥集の詞をも採まじきにやと　答ふ此事大かたにてはいひつくしがたしよりておのれが古今うた集の說書るものにて見るべしされどこゝに大かたを云んそも〳〵古事を考るには

先實錄實記を見て有べき限りは其に從て事を定めて後よろづを思ひめくらすべし故に右の實ろくもて貞觀三年五條后順子の行啓と定めて其後古人の記を以て其高子も詣たまひつらんとしさて古今集の樣を思ふに此東宮の御息所とは東宮の母儀を申にはあらで本義のごとく東宮の妃を申なるべしされどもかの貞觀三年は清和のみかど改元の年に即位有て東宮にはおはしまさねど其前東宮にませしほどに既に高子を御息所がねとうち〳〵に定められけんかし東宮いと御幼稚にませはよろつは攝政忠仁公の事也とのさま始よりみやす所がねとみゆ　さて貞觀元年即位同じく三年はもとより天皇と聞え奉れど御歳まだ十一におはして高子を寵給ふにもあらず高子從五位下と聞ゆる比也然れば古今哥集えらばるゝ時書べきやうなければかの御息所がねなりしを以て推てしかしるしたらんとおぼゆ譬へは同集に菅原の朝臣と有は既に延喜三年に左遷の宣命を燒せられて左大臣を贈たまひつれど猶藤原家にはゞかりて贈左大臣とは書がたければのがれてさは書し事あらは也これと打反してまだ東宮の御息所と書まじきにも侍らず時の權をさけへつらへるたぐひ世々の書に多し古今の哥撰ばるゝ時みかどはまだ御わかくまして時平公の心なれば撰者の意思ひやるべし又古今哥集には天皇と后の御哥をは恐れてのせざる也然れば彼是を以てしひて御息所としるしけん事知べし　后と申ていと後に古今撰の比は又既に后位を停められたり且其詣たまふ比はまた女御とも聞えさりし時なれは書へきやうなかるへし且其前御息所かれなる時の勢ひに侍れはかた〳〵を以てしか書るならん此外こきん哥集の今本にはうたかはしき事限りもなし後世好事の人の加筆或は私に改めたる事有とみゆれは個にはよるへからす故に實錄にて事を定めて時世のさまを思ふによく思ひめくらすへき事也けり哥書を是として實記なうたかふなとのひがをはいふにも足すされと史の脫文なとを哥書以て補ふへき事も少からすそは　惣てこれらのうたがひは三十年ばかりおもひ來つゝ漸しるせる事による也古書は私をむなしくして見るへきにこそ　惣てこれらのうたがひは三十年ばかりおもひ來つゝ漸しるせり人大かたに見て定めたまふ事なかれもし私の考へ誤りありとも古き文みる道しるべとならずやはあらん

六條后順子の行啓の事殿上人の加筆と見へし　第二に有にも後人の思へし　第三に此事は定家卿の筆にあらず高子の家にかしる比也　第四に匡房卿の比也　第五に古今集の事は失ひて古言物語のみ浮たる事多し　第六に此物語は古今集の詞書の事多かれ　第七に實錄の事は物語にはしはしはよるへからす　第八に此物語は古今集の詞書の事ほとんど　第九に人作の物語なれは　第十に人のみやす所がねとは書そへしなとせしも多けれは後のわさなるをも知かたけれとそはおして云かたけれは有にまかせてとくのみ殿の女御とも東宮の女御とも書たるは後世の轉也

伊勢物語古意巻五

むかし田村のみかどゝまうす御門おはしましけり其時の女御多賀幾子と申御在けり

文德天皇崩たまひて山城國葛野郡田邑里眞原丘に天安二年八月葬奉たまへりよりて田むらのみかゞと申すこの女御は文德實錄に嘉祥三年七月藤原朝臣多賀幾子爲二女御一と見え三代實錄の天安二年十一月には從四位下藤原朝臣多加幾子卒　多可幾子者右大臣從二位良相之第一女也少有二雅操一云々とみゆ

それうせたまひて後の御行安祥寺にてやよひのつごもりにしけり

安祥寺文德實錄に齊衡二年六月詔以二安祥寺一預二於定額一云云三代實錄貞觀元年四月に緣二皇太后御願一置二安祥寺年分度者三人一願文曰云云延喜玄蕃式云凡安祥寺果二階業一僧擬二補一諸國講讀師一云云或人いへり此てらは山科にあり五條后順子の建給へりと○みわざとは次の條に七々日の御事と有て其御佛事をいふ

人々の奉あつめたるさゝげ物千さゝげはかり木の枝につけて堂のまへにたてたれば山しも更にだうの前にうごき出たる樣になん見えける

昔は物捧るには必枝につけ侍りとにかゝる堂のまへなど廣き所にては大きなる枝にぞ有けめさて哥いはん料にもこゝは書たり

それを右大將ふち原の常行と申人いまずかりけり

常行大將は天安二年十月從五位下周防權守より右近衛少將となりて多可幾子卒りたまふ時はまた官位ひきかりけるを後より以てしか書たりさてこは右大臣良相公の一男貞觀三年右大將となれり右の女御の兄君におはせり

山しものしは助也

今本の詞は此常行大將なる云に似ず此條もすへて古本そよきと

右大將は拾官なる書たりとへ然らは右馬頭とへ業平とせは中將なるへくへし皆さる意にあら

講のをはるほどに哥よむ人々を召あつめてけふのみわざを題にて春のこゝろばへあるうたたてまつらせたまふに
右の馬のかみなりける翁目はたがひながらよみける
此講はいづれの佛經にても有なん必八講也と云はしひごと也○この右馬頭を必業平とするはたいかゞあるべき
此朝臣は貞觀五年に右馬頭と成ぬ此御わざの比は散六位にてまだ翁といふべくもあらぬ歳也是例のわざなるを
いぶかしむ説はまだしき事也○目はたがひながらとはさゝげ物どもの多きを山と見たがひたるまゝに哥によみ
たりてふ事也
山の皆うつりてけふにあふ事は春の別れをとふとなるべし
此女御の御わかれと春三月の別れとをかねて且如來入滅には海水飛涌大山崩裂など云をおもひよせて山々も皆
此御庭にうつり來れるは此別れをとむらふ也けりとよめる也こは記者の哥にて事はむつかしけれど物を甚しく
とりなせしはよろしき也さて其捧物を山と見たれば即山となしていへるぞ古哥の情也けり○此うせ給へるは天
安二年十一月十四日也辛未の其日よりかぞふれば貞觀元年正月二日ぞ四十九日にはあたるを三月のつごもりと
いひ春の別れとよみしなど皆日數をもかへたるは例の事也この日數のたがひしもいふかしなといふにや此文かよくも心得ぬ故そかし
とよみたりけるを今みればよくもあらざりけりそのかみは是やまさりけんあはれがりけり
記者の自らよみてみづから昔の事になしていへるが興也
むかし多賀幾子と申女御みまぞかりけりうせたまひてななぬかの御事安祥寺にてしけり
前と同じ度の事なるをことに事を別におこして書るは此文の例也
右大將常行と申人在けり其御わざぞまうでたまひてかへ樣に人々山科の禪師の親王おはしますその山しなの宮
に瀧おとし水走らせなどしておもしろく造られたるにまうで給ひて

上の人々と云よりこゝのまうで云々と隔てつゞけり哥にも文にもおほき例也
年ごろ遠にはつかうまつれどちかくはいまだつかうまつらずこよひはこゝにさむらはんと申給ふて
山科の禪師の親王は仁明天皇の四の皇子にて彈正尹と聞えしを貞觀元年五月に入道したまへりこも又此女御の
後のみわざの比はまだ入道したまはざりき皆つとめてたがへたる物を此文をしんじて實錄をもうたがひかへり
ては此文の詞をもうたがふ説多し笑つべし○禪師とは惣て出家を云その頃のならはしにて下にも俗なる禪師な
るといへり
みこよろこびたまふて夜の御坐のまうけ作させたまふかの大將出てたばかり給ふやう宮づかへのはじめにたゞ直
やはあるべき
夜の御座は寢ませる所也○出ては親王の御前より退出てなり○たばかりはたゞ議りかんがふるを云日本紀に慮
計測等の字を各たばかりとよめり○直やは有べきはたゞにのみ有べき事かはといふに同じ默然をたゞともなほ
ともよみたゞ人を直人ともいへるを思へ
三條の大御幸せし時紀伊の國の千さとの濱にありけるいとおもしろき石たてまつれりきおほみゆきの後奉れりし
かばある人の御曹司の前の溝にすゑたりしを島このみ給ふ君なりこの石を奉らんといひて御隨身舍人してとりに
つかはすいくほどもなくて持て來ぬ
三條の大御幸は貞觀八年三月廿八日に右大臣良相の百花亭にみゆき有し事三代實錄に見ゆ是も此條と年月たがへり○紀伊
の國の千里の濱は古き物にはいまだみず大鏡花山上皇御幸の事をいふに熊野の道に千さとの濱と云所にて石の有を御枕にて
おほとのごもりたるに○幾ほどもなくてこは一の古本にも今の本にもいくばくもなくてとあれど又の古本にい
くほどゝ有によれりこゝは程と有こそことわりなるなれ

たはかりは手計に
てもの本はは手して物の
すて尺をはかるよりの
ばかりに思ひはりに
かるを云事とはなれは
りさるを後世はなむ又
轉ふ事とのみ思へり

百花亭三條北朱雀西に拾芥抄に
ゆみ在と
一設に紀伊に千里の
濱てふ濱なへしちなりの
とい書たれは强てち
りとはよみかたし

後の集にはまとめいへり千ひろの昔人は深切にて且風流也今の世人はいかくるなりかく物おくるやはすると

三代實錄に行平卿の女の皇子子うみたまへる事みゆ　皇太后の事なり　この國史の八四の巻に此みこ十歳にて賀陵王なる舞を舞たまへる時觀る者感涙をたゝへ最り舞樂て外祖父行平卿舞を持て去たるみゆ

この石聞しよりも見るはまされり是をたゞにたてまつらばすゞろなるべしとて人々に哥よませたまふ

たゞにはたゞちに餘情なくて也○すゞろなるべしも不慮をいふより起りてこゝははえなかるべしてふ意也

右のうまの頭なりける人なんあをき苔をきざみてまき繪のかたに此うたをつけて奉りける

青苔をこまかに切みて是をもて蒔繪のかたちの如く哥の文字を石につけたる也○或說に右大將御監に依て右馬頭を相伴ふ歟といへるはさる心にて書たるなるべし此條に二所まで右大將右馬頭を擧いへれば也　右大將右馬寮を司とる時は

右馬頭を相伴ふとの意也

あかねども岩にぞかふる色みえぬ心を見せんよしのなければ

親王を思ひ奉る心のほどを見えまゐらせんよしのなければ岩に代表して見せ奉るされど是のみにては足れりと思ふには侍らねどもと也此哥も記者の口つき也

となんよめりける

昔氏の中にみ子生れたまひにけり

某の人何の氏ともいはで打つけに氏の中にと書たるは此文先業平物語なればしか書て在原氏の中にてふ謂也さて此皇子は行平卿のむすめの更衣文子貞觀十六年に淸和のみこ貞數親王を生たてまつれる事を云也

御鶉茸屋に皆人々哥よみて奉けり御外舅がたなりける翁のよめる　古夜記に鶉草茸不合草の生れ給ふ時以鶉羽爲茸草造産殿と云を以て古本にしか書たる也

産家に三日の夜なゝ夜などには祝ひ哥よむ例也けんさる古哥ども多く侍り○御おほぢがたなる翁は行平卿の弟業ひら朝臣を指す詞に氏の中に云々と云も同氏にしてあるじならぬ詞也只於是おほぢと云はもとより生れたまふみ子の爲に母かたの祖父なる意也さてその方なると書たるは是大父の兄弟などを指たる語うたがひなし古本に外舅なりける翁とのみあればおほぢの下に方の字落たる事明らけし今本によりぬ

舅妻之父爲外父（異綜稱夫之父同）舅母之昆弟爲舅母方ノオホヂ（母方ノヲバヂ）外祖父母之昆弟爲舅母方ノオホヂ（母方ノヲバヂ）和名抄云外祖父母方ノオホヂ

我門に千ひろある竹をうゑつれば夏冬たれかかくれざるべき

世にことに丈高き千尋の竹を我門に栽つるからは今よりはよろづ世の夏冬に氏族家親此陰をたのみて在べき也とよめりさて梁王の竹園を思ひて皇子をたとへ且仙境の千尋の竹をもて萬代を祝ひ氏族家親は高き御陰にかくれなんよろこびをいひなどせるを只一首によくそなへて安らかにいひとりたり然れども巧みの樣も姿も貞觀の比の哥とも聞えず是も記者のよめる中によく出來たるもの歟○春秋をおきて夏冬としもいへるは竹は夏の蔭よろしく冬にも枯ぬをめでゝ也源氏の夏の御方にも竹を近く植られつと見えたり○今本には千尋ある陰とあれど蔭をうゝるてふ語はなき事也古本に竹と有ぞよろしとす思ふにたけをかげに誤りしなるべし○今本に是は貞數のみ子時の人中將の子となんいひける兄の中納言行平のむすめのはら也てふ詞あるは例の後人の裏書也されば古本に此詞なし文のさまもいと拙なくて本文と異也是をも伊勢が筆也といへるにや此親王は延喜十三年までおはせしを同時にかくしるすをこの者やは有べき

むかしおとろへたる家に藤の花うゑたる人有けりやよひのつごもりに其日雨そほぶるに人のもとへ折て奉るとてよめる

こは古今集にやよひのつごもりの日雨のふりけるに藤の花を折て人につかはしけるとて此哥ありこゝにおとろへたる家云々はた折て奉るなどかへてあげたり

ぬれつゝぞしひてをりつる年のうちに春はいくかもあらじと思へば

古今にてはけふならでは時過て見せまゐらするにかひなかるべければ雨にぬれつゝも折つるぞてふ意にてえもいはずおもしろき哥也○ぬれつゝに雨に折つる藤の花をおもはせ且事極まれる三月の晦日をば延て春は幾日もあらじといへる寔に此朝臣の妙なる物也然るを此文には右の如く詞をそへてぬれつゝぞ云云てふはわびしき人

妻之父爲外父（異綜稱夫之父同）舅母之昆弟爲舅母方ノオホヂ（母方ノヲバヂ）外祖父母之昆弟爲舅母方ノオホヂ（母方ノヲバヂ）和名抄云外祖父母方ノオホヂ

三代實錄に行平卿の女の皇子子うみたまへる事みゆ　皇太后の事なり　この國史の八四の巻に此みこ十歳にて賀陵王なる舞を舞たまへる時觀る者感涙をたゝへ最り舞樂て外祖父行平卿舞を持て去たるみゆ

もちひのなふるもの音のなくとなふるもの音也

千尋竹の事は山海經云在見衛之北有岳之山一尋竹生焉注云一尋竹八尺也

大竹各長千尋此事文選博物志玉篇等に八尺或は六尺と異國の書にもいひて區々なれば大かたに心得て有へし

親王の事

○竹闕なる說いへり

大宮とは此說也

說なるべし

冠辭考

物にはつけたれば物なるものとなる

哥にはいへり心なり

出なるもよみて侍りけるものなる

入てさるなる心は

故に後世はんとするなるもの

の姿はわろく姿わろけれは心さへつたなくなれりよりてかく詞に書てそれにゆつり哥には其事をかつ〳〵いひたるこそよけれ後世の人は題詠になつみてよむ故にいとくしてつたなし 業平朝臣はもとより王孫にて時の權貴にへつらはしき事はなかりけん放縱にしてかゝはらすと史に記されしは女につけての事のみならすよろつに付てさこそ有つらんをしるへし然は此文のことくは有へからぬを却ておとろへてかくへつらふことく書なしたりこもなりひらならぬ男の哥なるやうにもちゐたるもの也 融公嵯峨天皇第八子也承和元平元服賜源氏叙正四位下嘉祥三年從三位貞觀四年左大臣寛平七年七十四薨贈正一位既從一位也續日本後紀以後の諸史扶桑略記等に見ゆ 古本に晦とのみ書たれはたゝつごもりとよまるされとも

のやんごとなきあたりに折て奉るさまをそへたり下に月日の行をさへなげくをとこやよひのつごもりにとてをしめども春のかぎりの云々とよめるは人にあひがたき心なれどそれもて思ひ合するに今はおとろへてなり出ん事の待にかひなくて此春も幾日もあらずなりゆけばあはれをかけたまへとて時めくあたりに花を折てかくいひやれるとなしたるなるべしさもなくては詞をそへたるよしなし

むかし左大臣いまぞかりけり賀茂川のほとり六條わたりに家をいとおもしろく作りて住たまひけり

こは左大臣融公の六條河原院をいへり貞觀十四年に左大臣に任ぜらる（その外史ともに委し） 古今集に君まさで烟たえにし鹽がまのうらさひしくも見えわたる哉てふ哥の注に顯昭がいはく河原の院にいみじき家を造りて池をほり水をたゝへて潮を毎月三十石つゝくみ入て海底の魚貝等を住しめたり陸奥國の鹽がまの浦をうつして蜑の鹽やく屋に烟をたゝせて玩ばれけると也（源順の河原院の賦に委しけれとそは漢文にいひかさりて虚文の多き故にこと〴〵くはよりかたし） ○加茂川の末を六條わたりにても賀茂川と云は妹夫の山の中に落るよしのゝ川とよめるは吉野河のいと末ながら猶しか云が如しさるたぐひ世に多し

神無月のつごもりがた菊の花うつろへるさかり紅葉のちぐさに見ゆるをりみこたちおはしまさせて一日一夜酒のみしあそびて夜あけもてゆくほどに

神な月は雷のなき月てふ事既にいへり

この殿の面白さをほむる哥かみ中しもよむそこにありける難叟人板じきの下にはひありきて人にみなよませはてゝよめる

いといやしげなる翁なるによみ出たる哥の人々より勝れたるきはを見せんとてかたゐ翁とさへいへる例の戯れ言也さるを此語になづみて業平の自書すばいかでかゝらんなと云よ此文を心得ぬよりの事也○かたゐは（古本に難の字を書はかり字也）

こゝは今本によりてつごもりがたとす又今本にうつろひさかりなるにとあれとなるにとてはつぎの句にもそむけり故に古本によれりうつろへるさかりとは白き菊の此比紅にも紫にもうつろひたる其色のにほひさかりをいへり 甚しきは盗人とて國の守にからめられ又ゐ中わたらひせる人の家に寄住せし事なといつれの男ともなきさまにいひなしたり 和名抄の假字はすへて古へにたかはぬを思へはかたゐと有を本とすへし難はかたいの假名なれは古本に此字を用ゐしは誤也さて古本にもかゝる遊ひともまゝ有は思ふに巳に漢字は古學の失たる世に書し物なるをしるへし 物かたりにはいとかしこく物をなすをぬす人也けりなとやうに云も中々にほめあさむ事もありすへてかゝる事はいと渋しくいひて興とするのみ所に從ひて意得へし 或說にだいじき也といへるは何の事そや古本に板敷の下と書たるからは他に云事なし又だいじきといふ事もなき事也 下をはもとゝよむへし垣下をかいもとゝよむか如し下はほとりの意也

和名抄に乞兒列子云齊有貧者常乞於城市乞兒云天下之辱莫過於是（和名加多井） 土左日記に此かぢとりは日をもえはからぬかたゐ也けり云云大和物がたりに芦になひたる男のかたゐのやうなる姿なる云云枕さうしのわびしけに見ゆる物に年老たるかたゐいとさむきをりにもあつきにも云云かゝれば本は乞兒の事なるをさらぬ人をもいやしめいふ語ともなれる也右の土佐日記のやうをも思ふべし○板敷の下にはひありきてふも即かの翁のさまをいへりさていにしへの殿舍は用有時板敷の上にあたり〳〵疊を敷設る也こゝはその敷まうけたる席に居るほどの物ならねば末のいたづらなる板のもとに人々をうやまひてある翁のさまをいへり

或人云みしかき哥一首にて賦なとのやうにはいはれぬをなかくよまれたるは此殿の面白をほむる意主人の心にかなふ事是に過へからすと此況はよろし凡從人は例のさま〳〵なる事をいひつくさんとするまゝにわろし心をたに得ていへは物ことにいはてもそ

しほがまにいつか來にけん朝和に釣する舟はこゝによらなん

我はいつの間にみちのくなる鹽がまの浦には來りつらんかくえもいはぬけしきにつけてはかの蜑の小舟の渚こぐあはれをもそへて見ばやと思ふ心をいへり古人の哥はかくこそ侍れ此さまをよく意得おきて哥はよむべき也

或人云惠崇が烟雨蘆鴈坐我瀟湘洞庭欲喚扁舟歸去故人道是丹青と是に似たり

となむよみけるはみちのくにゝいきたりけるにあやしくおもしろき所々おほかりけり我みかど六十餘州の中にしほがまといふ所に似たるところなかりけりされはなんかの翁はさらにこゝをめでゝ鹽がまにいつかきにけんとはよめりける

なはる也或注にみちのくにあるにもあるへしとよめるいふはわろし天皇の御身をさしてみかゝ申すは今の都をとなりてのことと聞ゆ

万葉に水瀬と書たるも世間の後世はなを水無瀬とは是水瀬の字にあれとも心なしとは必ず水無瀬とは事なるを中々に名を忘れたりといふは戯れのみ常に同様に書さるを興とせるなり

万葉に和哥の事しるすへて返哥のやまとは歌の名なくは書たる万葉にかしこきに依て此哥は古哥なれとも此哥は本に定て倭哥とは書たるにこそ

こは彼翁のはやき時に陸奥に行て見たりし故にかくはよみたりといへる也さて此哥は業平朝臣のに似たれど詞の調べ今少居つきて聞ゆ恐らくは記者のならんがよく出來たるもの也○みかどは國家の二字朝の字等をよみて天皇の御食國をすべていへりこゝも其意也○六十餘州は本より音によみたるならんうつぼ物語にも妻とすべき人を六十餘州もろこししらぎこま云々に尋めんといへり

むかしこれたかのみこと申すみ子おはしましけり山さきのあなたなる水無瀬といふ所に宮ありけり年ごとのさくらの花ざかりにはその宮へなんおはしましける

惟喬親王は文徳の一の皇子にて御母は紀の靜子正四下紀名虎のむすめ有常の同腹也○山碕は山城國乙訓郡にて水無瀬も同所にあり此所類聚國史三代實錄等には水生と書たりかく書る意は此河水は砂の底を泳りて行に又あらはれて流るゝ所々も有は水の生出るてふ謂也故にこきん集の哥にみなせ川ありて行水なくばこそみなせ川下にながれてなどもよめりこゝはいと面白き所也とて後に後鳥羽院もしたひ給ひて離宮を造らせて住たまひしなれば昔の惟喬のみこの宮思ひやるべし

その時右のうまのかみなりける人をつねにゐておはしましける時代經て久しくなりにければ其人の名わすれにけり

こは哥によるに定かに業平朝臣の事なるを中々に名を忘れたりといふは戯れのみ常に同様に書さるを興とせる也けり

狩はねんごろにもせで酒を飲つゝやまと哥にかゝれりけり

哥をたゞにやまとうたてふ事古へはなし今の京の弘仁などの比專ら唐詩の行れてより云なるべし皇朝の事を皇朝にてやまと云云と云はいかにぞやされと万葉にも憶良大夫なとか詩に對して云所には倭哥とも日本哥とも一二つ侍るは別の事にて万葉の比只哥のみの所にやまとうたとはいはす唐詩もその代には

唐詩といへる事は侍らす他の國となりてこそいひたれ

今かりするかたのゝなぎさの院の櫻ことにおもしろし其木のもとにおりゐて枝をゝりてかざしにさして哥よみけりかのうまのかみなりける人のよめる

こは水生より河内國の交野郡のかた野にいたりて狩したまふ也こゝは天皇の御狩場なれどまだ其比には禁れざりし歟又一のみ子なれば心にまかせて遊びたまふ歟さて其所の渚の院は度々御狩ある故に離宮めきたる院のありしにやこの親王のは既に水生にあれは又はあらじかし此院のさまは土左日記にかくて船引のぼるに渚のゐんといふ所を見つゝ行其院は昔をおもひやりて見れば面白かりける所也しりへなる岡には松の木どもあり中の庭には梅の花さけりこゝに人々のいはく是は名だかく聞えたる所也故惟高のみこの御ともにて故なり平の中將のよの中に絶て櫻のさかざらば春の心はのどけからましといふたよめる所也けり云々是にも必親王の家をいふとは聞えず

世の中に不絶櫻のなかりせば春のこゝろはのどけからまし

花故は咲ちるにつけて靜心なきにぞ中々おしなべて櫻しなくはもとよりのゝどかなる春ならましをといへるはふかくしたはるゝが故の心のうらをいひたるにて誠に此朝臣の哥也万葉に人よりは妹ぞもあしき戀もなくあらまし物を思はしめつゝとよめるが如し忠みねの哥に春はたゞ我にてしりぬ花ざかり心のどけき人はあらじなどよめるは今をとりたるならん古今集に花をも鳥をもふかくめづるにつきていとふさまによめる哥どもの有はみな同意也○此哥古今集と此今本にはたえて櫻のなかりせばと有此古本には二の句不絶と書り土左日記には三の句さかざらばと有いづれをよしといはんに絶て無かりせばとては有物の絶たらば也古本に不絶の二字を書たるは轉じておしなべてと云意に用ゐたりと見ゆさらばなべてなかりせばとてはいづこにも本より

古本只なべてふなべてに不絶と書たりの爲に櫻まてに此字の心をかけてみ

るへからすいにしへはかくさまに字を用ゐたる例あるも也

かく心を用ゐたるにて此文也さも古今集のこゝにはたゝ此文の意にあらすとて古今集のこめたるなるへしかくのことくなる後世人哥に倭俗にかゝらすとのいふ事の云なくなれはなし

昔は坏をさす人みづから酌うけて参らす也○おほみきは酒の古語にてくろきしろきなど云きに同じ大御てふ語はすべらぎの御事にのみ崇めて申事なれど此皇子をもとにたふとみてしか云なるべし又此文書し比はすでに事の轉せしも多けれは心のつかでも書つるか猶さはあらしかしみきを古本に三寸と書しは借字なるをこれらによりてや顯昭など三寸の字につきて附會の説を云はあまりに古語にくらかりけり

なくてあらば也然れば本よりなべてなからんてふかたぞとわりも心もやすく聞ゆされど各の好みにまかすべき事歟

となんよみたりければ或人

ちればこそいとゞさくらはめでたけれうき世に何かひさしかるべき

かの哥はあまりなるまで櫻に心そみたるをいさむるさまによめりこは古今に殘なく散ぞめでたきさくら花在て世の中果のうければてふを少かへて記者の作れる物也心は共古今集の哥にあはせて明らけしさて右の二首は此親王つひに世を逃れ給ふ前祥を思はせて作る歟又この二首によりて世間の事に思ひなづむまじき事とおぼしなりてのがれ給ふとおもはしめたる作りさまにも有なん○めでたきはほめいづるといふ語をはぶきてめでといふ也字にては愛感などの意也たきは痛きてふ語にて上の語をつよくする辭也うれたき見たき行たきなどのたきに同じ痛うれし痛かなしなとのいとゝ下におきて云のみ異國に奚殺愁殺なとゝそへて云にゝたり

と讀てその木のもとはたちてかへるに日くれになりぬ御ともなる人酒をもたせて野より出來たりこのさけをのみてんとてよき所をもとめゆくにあまのがはといふところにいたりぬ

天の河は右の交野のほとりにあり

みこにうまのかみ大御酒まゐる

語はすべらぎの御事にのみ崇めて申事なれど此皇子をもとにたふとみてしか云なるべし又此文書し比はすでに事の轉せしも多けれは心の

猶さはあらしかしみきを古本に三寸と書しは借字なるをこれらによりてや顯昭など三寸の字につきて附會の説を云はあまりに古語にくらかりけり

はしれたる事なからも後世の俗はこゝろ得かぬれはいふ

織女と書たるをおりひめとよむは後人の俗よみなりおりひめとよむ事はたつ女にはたなる事也

哥の題にしたとよめるはなぬかのよとよめるなるへしかの哥の中にはたとよむはたなはたつまりはたとよめるは略也たとも略したとも略はよめるは織女と書たるは或也此字にはしたまふ故に御かへ哥よりくよみたまふ故に御かへ哥醉のやしのさいてきに給はぬにとの文をのさまひたれにとしかにはあらし思ふ

み子のたまひけるかた野を狩てあまのがはのほとりにいたるをだいにて哥によみて坏はさせとのたまひければ彼馬の頭よみて上ける

かりくらしたなばたづめに宿からんあまのかはらに我は來にけり

天の河邊には織女の宿の有べしこゝにしも狩くらしぬる今日なれば其宿をからんと也所につけたる心詞のをかしき也○たなばたは棚機のこゝろにて機は女のわざなれば女星をいふさるからにたなばたづ女といふ津は助辭女はをみな也万葉に男星にならべて織女と書たるをたなばたづめとはよみたり是をたなばたとのみいへるは略言也然るを後世の人たなばた妻てふ事と思へるはいとあやまれり又七夕と書ては万葉になぬかのよとよみたり是なも後世人はたなばたとよむ事とおもへりいとなしもわり

みこ此哥を返々ずしたまふてかへしえしたまはず紀の有常御ともにつかうまつりてそれが返し

かの哥のめでたきにつけて御かへしの出來かねたる也かへす〳〵ずし給ひて云々と書るを見るべし○ずしは誦の字の音也万葉に誦二古詠一と書たる意也

一とせにひとたびきます君まてば宿かす人もあらじとぞおもふ

織女はひたぶるに彦星をこそ待たれば他人に宿はかさじとおぼゆと也此君はひこ星人は織女を指ていへり○萬葉にわたり守はや船よせよ一とせに二たび來ます君ならなくに又一とせに七夕のみあふ人の戀もつきねば夜の更行を

歸りて宮に入せ給ぬ

是は暮てかへりたまふなれば都の宮にはあら寸天の川べよりほどなき水なせの宮也

夜更るまで酒のみ物がたりしてあるじのみこゑひて入たまひなんとす十一日の月もかくれなんと爲とて彼うまの

頭のよめる

あかなくにまだきも月の隠るゝか山のは逃ていれずもあらなん

夜の御座に入たまはんとするを月の入にたとへつ〇山のは逃ては後の世に少聞よからずと爲れと時につけてはいと興ありておもしろき事に昔はいひけん土佐日記にこよひの月海にぞ入る是を見て業平の君の山のはにげて入れずもあらなんといふ哥なんおぼゆるもし海べにてよまゝしかば波立碍て入れずもあらなんとよみてましやと書たるにも古今集にも入たるにも貫之の興ぜられしを知べし六帖に友則の入月を山のは逃て入ずとも人の心をいかゞたのまんともよめり

み子にかはり奉りて紀のありつね

おしなべて峯もたひらになりなゝん山のはなくば月もいらじを

峯もすべてあらず平らなる地なれかしさらば月の入どころなからんをと也〇なりなゝんはりたの約らなればならんなんてふを延て云也〇此哥は後撰に上野の峯雄が哥にて大かたは峯もたひらに成なゝん山のあれはぞ月もかくるゝと有り然れは古哥なるを少かへて有常のかへしの哥としたり他し哥をしか用ゐなすぞ此文の例の巧なる且文は後撰よりも後に作れる一の證也落句六帖も同じ

むかしみなせにかよひたまひしこれたかのみこれいのかりしにおはします御ともにうまのかみなる翁つかうまつりぬ日ごろへて宮にかへり給ふげり

日來經てとあれば是は京の宮にかへり給ふをいふならん祿も京にてこそあらめ

御おくりしてとくいなんとおもふにおほみきたまひろくたまはんとてつかはさゞりけり此馬のかみ心もとながりて

此文已に有て且有常の哥なら後撰に峯雄の哥とせんやは

御送りしてとくいなんも京へ歸りつきての証也

草の枕とて草ひきむすぶともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

此大兄の皇子をおきて四のみ子を太子に立られしかばさる事さしてうらみ給はぬ御心とはいへどなどか世の中物うくおぼさざらんされば去る御けしき有てかくとさらになごりをしげにしたまふを馬頭のうたがひて出家したまはんにやとおもふ心もとなさに今夜はとけて寢べからず末ながくかくて見奉らん事ともたのまれねばてふ意をふゝみて表は春のみしか夜なれば枕もとらでつかうまつり明してんとよめる也短き事の裏にて秋の夜とだにとは云り

とよみける時はやよひのつごもりなりけりみこおほとのごもらであかしたまふてげり

大かたは前の條につゞきたる意あれどはた度々狩におはしましけるよしに書たるによるに是はと度の春の事ともすへし然れば終に月日をもしるし且哥に春の盡るをゝしむにつけてねず明すてふこゝろをもそへたるにや

如是しつゝ集祇承けるをおもひのほかに御ぐしおろし給ふてげり

三代實錄に貞觀十四年七月四品彈正尹惟喬親王寢レ疾頓出レ家爲二沙門一（御とし廿九也）とみえたり或說に太子に立たまはで出家し給へるを思ひの外也といふといへるはさる意をもふゝめて書つらん事もとより也〇此みこ惟仁の太子と御位爭ひたまひしてふ事後に云は流言とみえたり三代實錄に此み子出家のゝち封戸を辭し給ふ表文三度までありし其勅答の狀を思ふにさるみあらそひ有しとは聞えざる也かの大枝をこえてなど童謠も有しをおもへば世にはかたむきし人も有けんされば去る

む月にをがみたてまつらんとて小野にまうでたるに比枝の山のふもとなれば雪いと高ししひてみむろにまうでゝ拜みたてまつるにつれ〳〵といと物がなしくておはしましければやゝひさしく侍らひていにしへのことなどおもひ出て聞えけり

もとつは本也とな
はふもつなつ
てもつてつ
めてむ月といふ
也

丹波の國の小野也
と云は論にもたら
す

古今集には惟喬の
みこのもとに
おりるなま
しよひとに
て小野と云頭
月所にに侍
にてはけるとむ
ひえたりはけん
はの山のりなると
れのりの雪禁
みりむけにしいひとふ
拜みけるにつりたてかの
みけるとしてれて
とるとしてかい
物
と
／＼

此時たりかくおまかなくうなしてきくしてて
此りてけ
交にるとよみへ
はとかへ
か有みへなり

世もへしかんゆめのみ子の御か
もかとのかはんさうきと
そもむはゆかしりけ
くやしりけんほとそ
古今集
新古今集
哥
入れたる
且此文は
も
哥
と
哥
の
贈答
情
歌
夢
古
哥
何
聞
思ひ
おもはく
火
其
比
のにのへるる
あてさ詞
つま
たなり

言少くてあはれさ殘る物なく書たり○む月とはもとつ月てふ事也もつの約めむなればしか云親月と云はいふにも足す古言しらぬ人の唐宇の意もていへるはみな　この國の言語にたかへり　○小野は山城國愛宕郡にあり神名式和名抄その外にもみゆ比枝の山の麓とさへいへればうたがひなし○雪高しといふは水かさ高きてふをもて思ふにそこら谷も何もうづもれたるを云なるべしさる雪の中に物かごかならん御室におはするさまおもやひるべし

さてもさむらひてしがなとおもへど公事ありければえさむらはで夕ぐれにかへるとてよめる　むは月はとに公事多けれはつかふる人まこ

とにいそかはし

わすれては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは

大御位にしもつき給ふべきみ子の山ざとの雪の中につれ〳〵としておはするを見てこは夢かとおもふと也忘れてはてふ語まことにしか有へく且雪ふみ分ててふにいと思ひよらぬさまにておはする意有されど古今集によるにもとは歸りて後に參らせたるなれば後に夢かと猶おもふと也此文には直におもひしさまに爲かへたり○おもひきやとはかねて思ひて有けるやは也けりの約めきなれはしかいへり

とよみてなんなく〳〵來にける

此詞今本にはなし是は古今集の旨をかへてたゞちに見奉たる門にしてよみたりとするをたしかに見せん料なるへけれは古本に有ぞよき

昔男ありけり身はいやしながら母なん内親王なりける

此いやしきとは官位のまだひくきを云也はた今本にはみや也けるとあれど古本に内親王と書こきん集には母のみこと有に依に此文もとはみ子と有しを後世に皇子を宮と云事とのみおぼえたる人の書あやまちしならん

その母なが岡といふ所にすみたまひけり子は京に宮づかへしければまうづとしけれどしば〳〵もえまうでず一子

にさへ有ければいとほしくしたまひけり

古今集によるに是は實は伊豆内親王と業平朝臣の事也さて三代實錄に父は行平卿と同じと見えたれどはた伊豆内親王を娶て業平を生むと殊に書たれば此皇女の生たまへるは業平朝臣のみ也故に此文にひとり子と書たり然れば寔にいとほしくし給ふべき也○今本にひとつ子と有はいかにぞや獸にこそひとつ子二つ子とはいへ人にはひとり子とのみ昔も今もいふ也万葉に鹿の子には一つ子人には獨子と書たるをも思ふべし但此古本に一子と書たれと例に依てひとり子とはよみてなんなく〳〵來にけるとはよむへし　○古本に寔惜久と書たるは假字の漸あやまれる比のわざ也此語は續日本紀の宣命にいとほしと書れたり惜はをしのかななる故に此字を用ゐたるは誤り也且是によるにもこの眞字は暫く後人の筆としらる

さるにしはすばかりにとみの事とて御ふみあり驚きてみればこゝに今本には哥ありとあれと古本になしなきそよとみの事とはいとゝくいそぐへき事也こゝは母みこの病たまへる事を告るなるべしさて頓の字普也といへどさはあらで疾み速みなどの意なるべしみは辭也

老ぬればさらぬわかれのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

本句は老てはえも避のがれがたき死別のあるを云さてとみの事といふに對へみるに心ちそこなひたまへる時ならん然ばいよゝ見まほしくおぼゆと也一人子にてことにかなしくしたまふめればいよゝかゝる時に思はるゝ情を端の詞に知せて書り

竹柔物かたりに迎へに人人けれは云かぬへりにもさら云此外哥にもさらすてふ事多し

集にあるこの哥口つ侍るもの
さまなす
首
ならす
又古今二
此みこ
同
其
ものを
なを
能
味
なれ
ら
しぬ
世
なを
偶作也
けんな
古哥
ばは
誤
し
な

るへは
宮中
本より
皇子
皇女
宮
家
皇后
女
宮
腹
なる
又
皇
子
皇
女
なる
といひ
ひとり
子
のみ
昔
今
も
いふ
也
万
葉
に
鹿
の
子
に
は
一
つ
子
人
に
は
獨
子
と
書
たる
を
も
思
ふ
べし
但
此
古
本
に
一
子
と
書
た
れ
と
例
に
依
て
ひ
と
り
子
と
は
よ
む
へ
し
　
○
古
本
に
寔
惜
久
と
書
た
る
は
假
字
の
漸
あ
や
まれ
る
比
の
わ
ざ
也
此
語
は
續
日
本
紀
の
宣
命
に
い
と
ほ
し
と
書
れ
た
り
惜
は
を
し
の
かな
なる
故
に
此
字
を
用
ゐ
た
る
は
誤
り
也
且
是
に
よる
に
も
この
眞
字
は
暫
く
後
人
の
筆
と
しら
る

そ
の
皇
子
は
なさ
して
宮
と
云
事
は
いと
後の俗也
三代實錄云貞觀三年九月伊豆内親王薨云云桓武天皇皇女母藤原氏從三位乙叡女也又云業平者故四品阿保親王第五子正三位行中納言行平之弟也阿保親王娶二桓武皇女伊登内親王一生二業平一云云此伊登を後世いとうとよむは誤也續日本後紀に此みこを伊都内親王と書はた古へは後世にとうとよむ字なつのかなに用ゐたり豆頭圖等是也その外度登なともづに用ゐし所あり其うへいとうとよむへき事むかしの氏にはなき事也万葉に市原王悲二獨子一哥とてとゝはぬ木すら妹とせありとふなたゞひとり子にあるかくるしさ又歎はきな妻とふ鹿こそひとつ子二つ子もたりといへ鹿子しもの我ひとり子のくさ枕旅にしゆけは云云

とありけりそれを見て馬にも乘あへず甚痛うちなきてみちすがらおもひける

此詞古本にかくぞあるふかくなげくさまをそへたる也

世のなかにさらぬ別れのなくもがな千代もと齋人の子のため

おくられし哥を即うけて共さらぬ死別てふ事の世になくもあれがし親をばいかで千代もましませといはひねがふ人の子の爲にと也かくわりなく思ひいふぞ切なる時の實情なるを其まゝに云つゞけたる也○人の子てふは世中の人をひろく云さまにて中に我事はある也○四の句を古今集にはなげくと有此文の今本にはいのると有古本には齋と書たりさて共なげくは歎にて物をふかくおもひて長息つくより起りて神に深く願ふをもいへりいはふは神に仕るにも君を彌千代といはふにも凶をいみさけて吉を用うるをもいへり（いつくてふも同し意也）然れは右のごとくなげくといひいはふと云も共に神に願ふわさと見えて古本に齋と書しなるへし（今本にいのると有もとわりは同しけれとこゝはいはふとかなけくとか有そ古意也けるる）

むかしをとこありけりわらはよりつかうまつりたる君みぐしおろし給ふてげり

惟喬親王は業平朝臣より御歳八つばかりおとり給へば此朝臣のまだ童形なる時よりつかうまつるなど云事うたがはし是も物語にやるへけれと（業平も二世の王にして且長岡に生立給ふほとなる御あそひがたきなとにもあらしかし）

む月にはかならずまうでけりおほやけの宮づかへしければつねにはえまうでずされども本の心をうしなはでまう出けるになん有ける昔つかうまつりし人俗なる禪師なるあまたまゐり集ひてむ月なればとだつとておほみきたまはりけり如是間に雪こぼすが如ふりて日ねもすにやまずみな人ゑひて雪にふりこめられたりといふをだいにて哥よみけり

ことだつとは正月はよろつの事の立そむるとて祝ふを云古本に言立と書たれば祝言を云にも侍るべしされど此古本事と言とを相通して書る例多きによるにも猶事のかたならん○ひねもすは日目もさながらてふを略けり夜もすがらに對へる語にして是は夜もさながらてふ意なるをしらるさてさながらは其まゝに同じこゝは雪の朝ふり出たるまゝに暮るまで降わたるを云（云設有古詞をいかに心得たかへつるならん）

おもへとも身をしわけねばめがれせぬ雪のつもるぞ我こゝろなる

かくいつまでも此所につかうまつりなんとはおもへど宮づかへの避がたくて分べからぬ身の爲んかたなきに雪のつもりてかへり難にするは定にかくて在まく思ふ我心のするわざ也けりといへりこは古今集の別れに（伊秀のとしゆ宗岳の大朝か越よ）

きおもへども身をしわけねばめにみえぬ心を君にたぐへてぞやるてふ哥の本を用ゐ末をば同集の雜に

りまうてきたりける時に　雪のふりけるをおのか思ひは此雪のごとくなんつもれるといひけるをりにてふ詞を採て一首とせる記者の哥と見えたり○おもへどもてふ語はおもへども〳〵と深くおもふ意也と云說はさる事也源氏物がたりにおもへども猶あかざりし夕がほの露わすられたまはずと書る如しされど古今の比より上つかたの哥によめるはさまては侍らぬを其後にしか心を含めてもちゐたり

と讀りければみこいといたうあはれがり給て御衣ぬぎてたまへりけり

みづから作りて書たるも興也

むかしいとわかきをとこわかき女を會といへりけりおの〳〵母有ければつゝみていひ殘而やみにけり年來へて女のもとより猶この事終んといひければ男哥をよみてやれりける如何將念

はじめ弱きほどには男の方より女に逢んといひしがやみつるをその後は女の許より其事とげんといへるに今となりては男のいかさまにか思ひなりけんかくなめげなる哥をやりつるてふ意也

いまゝでにわすれぬ人は世にもあらじおのがさま〳〵年のへぬれば

日もみすとも今もみてふ目のめは言は云目はいにしへ物のみゆるにそ言也

こも例のむつかしき意こめたる記者の哥也こゝろあるまなうなる業平のしつらしたれる也さまにもにらへ似るへうもあらすは有まゝにしへは打にしたる詞なる中比よりしきりに思ひ入又用ゐたりるもつかし多く心はさるむましき詞をさまし〳〵あかしし過してむつかしくいへるも後世にはに侍りへる

今本にはわかき男へりけりとてやひにわかき女をへりけりとてやひに女のかたくてよりくてよりて次にるの詞なる哥はやり男たの方又哥の詞もりとてやに由次のなけりもと女にはみにけりも宮にはなれぬるとあり出にけよて諸說

大にとわりとに侍
れと上の文な思ふ
に女のかたより思
ひおこしていへる
な男は思ひの外な
る返しせし故にい
かゝ思ひけんてふ
詞も古本に有也か
つ衣の詞ぬも男倘
相はなれなとおり
なほの詞さ見るに
もさるな倘けなき
返しして所はた相
はなれぬとに住な
一つの事はせし也
○今本にていかゝ
思ひけんてふ詞な
ももらしる事かた
〳〵故た事と例の
此文な宮ふな思ひ
又かの思けちも思
はぬなも有にめみ
せぬなと人わなつ
みてこはなほろし
とて私にせし
ならんしも後の撰
此哥なるはいかに
に入た
そや
此文には男のなさ
けなきなも女のな
さけおくれたるな
も多く書たり皆よ
ろしきなのみいひ
ては興なふ故なる
へしさるな此文も
て世の中の人の心
なも教ふへく思ふ
說ともはいとしひ
たる事也
後の集に是なも業
平の哥とて入たる

そこはしかのたまへどおの〳〵とざまになりて年經つれば我は今はおもひたえてぞ侍る我のみさとおぼしそかくて忘れぬ人は世上にあらじと也我わすれし事を世の中のならはしもてことわる也かくては情なげなれど此文にはさるさまなるをもあまた擧たりこれもひとつの咲ひ種なるべし

といひてをとこ倘あひはなれぬ宮づかへになん出にける

こは已にも有しは同じ所に宮づかへする男男は有物かとも思はぬを女の目には見ゆるものからなど書たる類にて女のためいたましう書たる者也右は皆古本の旨にていへり今本には詞ども落又違ひも多きは人わろしとて好事の改めたりとみゆ此文の人わろき是のみかは

むかし男津の國うばらのこほりあしやの里にしるよしゝていきてすみけり

しるよししてと今本に有も即いにしへのまゝなりけんかし其意を知らせんとて古本に所知在而とは有つらん詞少たらはぬやうなれど猶昔常にいひけん語ともおぼゆればあへてとわらずさて此男はきとしたる官などもまだなくて散位賦又權官にて暇あれば京ぢかき我知れる所にも住を云ならんよりてなまみやづか へ とも書たりけん

昔の哥に

芦の屋のなだの鹽やきいとまなみつげのをくしもさゝず來にけり

とよみけるはこの郷をよみける也けり此所をなんあしやのなだとはいひける

古への哥は万葉に石川郎女か哥也今本女な少と書たるは誤也 しかの蜑は辛布刈鹽やきいとまなみ髪梳の小櫛とりも見なくにと有て筑前の國しかの海人をよめるなるを所をかへ詞をかへてこゝの芦やの里の古哥としたるは此文の例の事にてひとつの興也最はじめにみちのくのしのぶもちずりてふも詞をかへて用ゐたるに同じ凡は古哥を昔の男又女の哥と

はいともいはんす
へなしいかて古書
なよく見さりけん
それたすけんとて
あらぬ說ないへり
偽りかさりて注な
せんよりは中々に
注せてあれかしい
て古書なとわらん
ならは人の聞て明
らかにしりえんや
うにこそ云へけれ
さるあやまれる人
たたすけんわか身
もにくまれしとて
とわりなまけ侍れ
は又俊の人なまと
やす科いくはくそ
今本にはとよみけ
るこのさとなよみ
けるとあるは上の
よみけるの下に者
の字なおとせし也
古本の正しきな思
へ
此宮つかへてふに
付て業平の自記な
れは進の證也と云
は例の云にたら
す
三代實錄に業平は
貞觀五年二月左兵
衞權佐同六年三月
左近衞權少將行平
は同六年三月に左
兵衞督同十四年左
衞門督と見えた
り
砂の山と意得し
なとはいふにもた
らぬひか事也

もとりかふるが多きが中にこは此所の古哥也としたるはたをかし

此男なま宮づかへしければ

なまてふ語は已にいへりさて右に云がごとく此をとこは權官などなるをいへるな覽

それをたよりにて衞府の佐ども集ひ來にけりこの男のこのかみもゑふのかみなりけり

こは暗に業平朝臣又行平卿の事を作れる條なれと各の任官の時をたがへてまぎらはしく書たるは此文の例也業平朝臣衞府の權の佐なる間は行平卿は督にあらず卿督となりては朝臣は左近衞の權少將也されど此官等を思ひふゝみて衞府の佐どものつどへりとは書りと見ゆ 佐等たれかれ來たるに督の行平卿もいたりけんを云也下に督の哥なあけたれはこゝに相てらして知へし略して書たる也

その家のまへの海のほとりに遊びありきて率この山のかみにありといふぬのびきの瀧見にのぼらんといひて登りて見るに

布引の瀧は同郡の山中に有て生田川の水上也海邊より見ればまとに布を引かけたる如く二段におつ○いざとはとをおこす辭にて人をさそふ意とも成る故に古本に率の字を書り

其瀧物よりも異なり高二十丈ひろさ五丈ばかりなる岩の面にしら絹に岩をつゝめらんやうになん有ける

此條すべておもしろく書なしたり○物よりは何よりなど云がごとく其物をばさゝず略して云語にて物へまかる物してなど云類也源氏物がたり眞木柱に物よりことに花やかなる御うしろ見云々枕ざうしに五節行事の藏人のかいねりがさね物よりことに淸らに見ゆ云々

さる瀧のかみに圓座の大きさしてさし出たる石ありその石のうへにはしりかゝる水は小柑子栗の大きさにてこぼれおつ

瀧の狀よく書とりたり○わらうだは和名抄に圓坐和良字太枕冊子に雪の山きえのこるさまな わらうだばかりに成て侍る○小柑

今本に高さな長さとあるはわろし哥にもいつれたかけんとよみたり

後の世に大柑子とて常の柑子より大なる有はいと後にいたれりとみえたり又九年母てふ物も後にわたれりと覺ゆる也此文の比なるは右の物にはあらていはゆる蜜かん柑子のたくひなるへし

はし書又繪なとの意よむは其詞其繪にゆつりて餘の意をよむへき也たとへは杖をおくりてつくからにといひ雨のふるをはしにいひて哥にはぬれつゝそとよむか如く也詞と哥とてらしてしらるゝ故に心もふかく哥もゆるやかにてよろしき也此心を後人はわすれて侍れは古哥をとくにたかふ事多しこは題とて文字にてのみ書る時より失ひていにしへをわすれたり文字題よむにも右の如く意得たらんにはよろしかるへしあまりに俗情を以てをわりをせむる故に今はたゝ屈したる哥のみ出来

子は三代實錄に太宰府例貢ニ小柑子ニ云々性靈集に（柑子をたてまつる表文）小柑子六小櫃大柑子四小櫃云々皇朝にて今の京のはじめつかたに小柑子と有は金柑子ならんか大かうじは今の柑子てふ物歟恐らくは密柑を云ならんと覺ゆ續日本紀神龜二年に佐味朝臣弟兄が唐國へ行て甘子を持て來しに其兄蟲まろ其種子を植生して今年初めて子を結びたる功を擧たまひて從五位下を授られし事有こは今いふ柑子歟

我世をばけふかあすかと待かひのなみだの瀧といづれたかけん

やゝ齢の老てつひの命を待間の物心哀さにおつる泪の瀧の高さは此瀧に爭ふこゝちすればしかよみたり唐詩に白髪三千丈緣レ愁似レ個長といへり古人の心はいづこも同じかりけり○待かひとは待あひだ也山の間など云に同語にてあとかと音便にて通はしいふのみ○涙の瀧とは涙のいと多くくだるをいひてこの瀧を見つゝあれば其はいはで我泪の瀧もてかれに爭ふぞ古哥のいひなしの常なる然るを後世人は意得ずして涙のと句を切て瀧は實の瀧と意得よといふはわろし（泪のてふ此のは之と意得んも常の事ながら此哥の類にてはしからず）古今集におろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへず瀧つせなればともよめり（定家卿の哥に布引の瀧に涙をあらそひて我年なみのいつれ高けんと有も涙の瀧に實の瀧をかれたり其流くむ人いかで其師の哥をもよく見ざりけん後の人の哥なとは引も益なけれとはた其說いふ人の爲にいふのみ）○いづれ高けんはいづれが高かるらんてふを略していへり語はかるの約めくなるをけに轉じて其けの下のらを略してけんとは云也○此條の意にては督とは行平を指す也されと哥は古今集其外の書にも載られぬは記者のつゞれるなるべし行平卿の口つきにも侍らず

あるじ次によむ

こは彼昔の男にて業平に擬たり

ぬき亂る人こそあるらししら玉のまなくもちるか袖のせばきに

水上に誰人の在てかく白玉を貫亂しつゝ我袖におとし入ぬるにかかくせばき袂にはつゝみあへざるをと也且瀧

るそかし

後世の人は唯をもいひすゑてはた餘意をもいはんとする故に風情ある事なしこゝをよく思ふへし

今本にわらふことゝと有はわろしわらへごとゝよむへし人わらへてふ詞は物かたりともに常ある事也是をしも業平の自記なといへるはいかなるひか心そ人わらへことにや有けんと云は其時他の哥共のなきを推はかりて記者のいへる詞なるをや且自記とせはみつからはこり淌したる事となるへし

茂能てふ人は史に有しかとそれにはよらてけにもさる人の家なとの有か如く書たるに興はある也

此うたをしも業平の也とて後にはとりけんかし名とふみとに恐れて實に見わかちかたきなりけん

定家卿のあしやの里の夏の日にうき

をほめてはた身のほとをうれへたりこゝを助けんとてなま宮づかへする男などゝ書るなるべし且是も瀧は見る〳〵よめば餘意をのみいへり伊勢の御か龍門の瀧をたちぬはぬ衣きし人もなきものを何山姫の布さらすらんとよめるたぐひにて古人の哥の常也（此後に後撰拾遺なとに右の哥をとりてよめるか多けれと皆おとりたり）

とよめりければかたへの人わらへごとにや有けん此哥にめでつゝ停にけり

よき哥の中にわろかめるを出してはそこらこゝらの人の笑はれごとにや有つらんと也是は後に記者の思ひはかりて書る詞也人わらはれをわらへと云はれの約へなれは也○古本諸人をかたへの人とよむはもろ〳〵ある中に一人をいふ時はかたへに多くの人ある故也

かへりくる道とほくてうせにし宮内卿茂能之家のまへ來るに日くれぬやどりのかたを見やればあまのいさり火おほく見ゆるにかのあるじのをとこよむ

其瀧の邊より葦屋のさとへは今の道三里ばかり有けるほどにかへるさの樣いとおもしろく書たり○宮内卿もちよしは何人とも問べからす道の行手に有へきさまを設けて書たる也○いさり火の事は冠辭考にいへり

はるゝ夜の星か河邊の螢かもわがすむかたのあまのたく火か

日暮て家路遠く歸るさまにあの見ゆる火影の多きをかれは何ぞなどいひつゝ來るけしきを即よめり故に見まどへる事を三つ擧てみづからうたがへり哥は記者のにてわろかめれど夜道に有ぬべきさまを思ひて作れるをかし○一首にうたがひのかを多くおく時は意のつくる所なき物なれば是に傳へごと有など後の人はいへど穿ちたる事也此道すからの事をおもひなばなに事歟あ覽

とよみて家にかへりきぬその夜南風ふきて波駁盧いと高し

なごろは万葉に澳つなごろとも汐干のなごりともよみたるは汐のよく干たる時海の底に波の凝たるが如くて有

てよるてふとよみしては此南の風と有につけてさもとりなすへき也されと其哥になつみて此南の風を必しも夏也とのみ思ふへからす續日本紀天平寳字五年九月攝津國御津村南風大吹潮水桑瀧とも見えたり此文の南風はみるめのよれるをいはん料に寄たれはいつにても侍るへきにや

春へ夕へのへはかたてふ意也故に万えうに夕かたまけてとも夕かたともいへり

万葉の今本に所聞多爾をそもたれとよみたるは何の事ともなし是は所聞多はかしましきてふ意にてかしまれてふ地の名にしか借て書たる也けり能登の國の地名にて和名抄にみゆ或説に是をわたつうみととなへよといへるは私事也皇朝の古書は語を主とし字を奴とせし故に字訓にて書た

を云今の人の干ぞこりと云是也さて神代紀に其矛鋒滴瀝之潮凝成ニ一島ニ名之曰ニ礙馭盧島ニ　これ自凝島の意なる事文の旨にて明らかなればなごろとなごりは一つ物也すなはち紀に依て此古本には波馭盧の字をもちゐたり然れども此文はさまでの心はあらでたゞ風吹て浪のいと高しといふまでなるを古ことなればなごろと書たるのみか又今の海邊の人浪のおとの高きを波ごろといへり古へも浦人の常いふ語故に所につけて書しにもあらん

つとめてその家の子ども出て浮みるの波によせられたるをひろひて家のうちにもてきぬ

朝まだきに家人等の濱邊に出たるに夜べの浪風に根をたえてよりたる海松の有を持て來たる也所のさま思ひやるべし○つとめては已にいへりしめてとはたゞつけたる辭のみにあらず夙まけてと云也万葉に夕方まけては夕方に向ひて也春かたまけて春まけてともよめりやゝ春べにむかふ也夏まけて秋まけても是に同じまけの約めめなればつとまけてをつとめてとはいふさてまけもむきもめきもかよはせし語の便にまかせていふのみ

女之方より其海松を高坏に盛て槲を覆ひてそのかし葉にかけり　今本にはかゝるなみな女がたとあれど古本によるにむかしは女のかたといひけんかし

かゝる物盛たる古へのさまを知るべし且其かし葉に書たるも風流なりさて万葉に能登國哥　かしまねの机の島の小螺をい拾ひ持來てから鹽にこゝともみ高坏に盛机にたてゝ母にまつりつやめづ子のまけ父にまつりつや美愛子のまけ　まけは設の意也　これを以て書るにや

わたづみのかざしにさすといはふ藻も君が故にはをしまざりけり

藻は海神の挿頭にていと齋崇む物ながら君たちの御爲には惜まずして海よりよせ來たりといへり○わたづみは海づ持にて海をたもつ神を云事古事記の文にてしらるさてわたとは海を渡るてふ事古くいひなれて即わたを海の名としぬ山を越すといひなれし故に京より高山を越ていたる國を越の國と云がごとし津は助辭也　天つそら國つ神のつの

るをはかな書の有をてらして訓をは定る也たとへはわたつみを万葉に渡津海綿津海方便海なとさま〳〵書たれと假字にては皆わたつみと書たり然は是をもて訓をしり且たなすみつなにこりて唱ふへきをも知へき也右の説は渡津海と書たるになつみてしかいへるならん古書よむ事を意得ぬもの也たとひ海てふ字を下に付て書たるも記に近江の海をかなにてあふみのみと書ることくたゝみの一言のかなに用たる也かつ其用ゐさまは梅を字楠柳を楊奈木と書しかことくそれに付たる字をもちゐて興とせし也かく字をはいかにももちゐたれは字にはよらて語の本を極めて後に解はなすへきを後人は不意にのみ思ふ故にあやまれる也或人月を見て損ニ額色てふ如く惑慨に過ニて老となる意也といへるは是や此てふ詞の例を考へぬ説也万葉にはいつれも

如し持をみと云はもちの約めみなれば也よりて此哥のごとく云時は海神の事也又轉じてはたゞ海の事にわたづみといへる哥も多く侍りそは轉用なるを本末あきらめぬ人はまどへるぞかし○わたづみのかざし云々とよめるは古今集にわたづみのかざしにさせる白栲の波もてゆへる淡路しま山又萬葉におきつ波よせくる玉藻片よりにかづらにつくり妹が爲手に覓もちて云々これらをもて記者のよめるなるべし

ゐなかうどの哥にはあまれりやたらずや

上に田舎人の詞にてはよしやあしやと書しに同じくさだかに書ぬがおもしろき也

昔いとわかき人にはあらぬこれかれ友だちとも雲集而月を見てそれが中にひとり

凡四十ばかりの心にて書るならんこきん集には題しらずと有をかく詞をそへたり哥はまがふべからぬ業平朝臣のうた也

大方之月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの

凡の虚の月影をめづるはもとよりの事なからそをだにめづまじくおぼゆるは此月てふ物のつもりつゝ年となりてかく老となりゆく物にしあればとよめり此意を含みて端にいとわかき人にあらぬとは書たりさて此うたの本には天の月の事をいひ末には是ぞ此てふ詞をおきて年月の月に轉ぜし也これぞ此てふは何にても語同じくこゝろの異なるをいひつゞけて曲をなす一つの語也万葉に阿倍皇女越ニ背山ニ時　これやこの大和にしては我こふる紀路にありとふ名におふ夫の山とよみたまふも夫の皇子の夫を轉じて勢山の名によせたる也此外いと多き詞ぞかし　これや此のやは疑のやに非すよと通ふやにてこれよこのといふ意也然は是ぞ此てふ詞も同意となれり　○大かたは凡と云に同じさて此哥は古今集にも此文の今本にも大かたはと有を古本には大方之とあり然れは常に天に見ゆる月をおほかたの月といひさてそれがつもりて終に身につもるとし月の月となるとよめるにて理り明らか也大かたはと有ては大概ならば月をも愛まじきてふ意となる故

これや此と有を朝臣は是そ此とよまれしのみ

に下にかけて見る時むつかしくて明らかに解がたく古意ならぬ所あり仍て思に此文に大かたはと書ぞこなひしを古本もてよくも正さぬ例の人古今集をもなほしけんかしさる類多き事也○物といひとぢめたる哥いにしへ一つ二つ有たゞはかなくいへるのみ

むかしいやしからぬ男我よりはまさりたる人を思ひかけて年へける

男も賤からぬが上にそれよりは増りたる人を戀ると云はいともやんごとなき女を云されは戀るとだにえしられがたきあたり也けり

人しれず我戀しなばあぢきなくいづれの神になき名おほせむ

思ふとだにいひもしられずて戀死んずるかなさてだにかひも有はいづれの神の祟りとか神になき名のみ負せんずらんがいたづらにあぢきなき事よといへり人しれぬ戀するも有ならひながらこはいとやんごとなきあたり故にえしらするよしなき也○古本味氣無は此字あたれり凡人情を五味にたとへて云中に是は苦々しと云か如く心に味氣のなき也心よしと思ふをば古へはうましといひつるにむかへてしるべしから國にも五味にたとへていへる事常也此哥は万葉のあづまうたに我せこにわが戀しなばそわへかもかめにおほせん心しらずて又ちはやぶる神にも負うらべすゑ龜もなやきそ戀しくにいたき我身ぞ云々古今集に戀しなばたが名はたゝじ世中の常なき物といひはなすともこれらの哥を以て記者の作れる也

むかし男つれなき人之いかてと思ひわたりけれはあはれとや思けん

是は昔男いかでとおもひければつれなき人のあはれとや思ひけんと隔句における文の一体也今本には男てふ語なもらしたり思ひわたりけれはと有はさてもよし

さらばあす物ごしにて物將云といへりけるをかぎりなくうれしがるまたうたがはしかりければ面白かりける櫻につけて

かるのかはくあの約かなればうれしくあるをつゝめていふ也○また古本に復と書からは清てよむべし濁るは未といふとは意と也

櫻花けふこそかくもにほふらめあなたのみがたあすの代のと

櫻花のあだなるにたとへて明日の代の人心の頼まれかたきをいへり代に夜をかねたるなるべし

といふこゝろばへもあるべし

かく詞をそへたるはいとも強顏かりつる人の物いはんといへるがうれしき餘りに中々うたがひのおこれるを云なるへし

昔月日のゆくをさへなげくをとこ三月の晦日に

大かたの人の過る月日を怨むとは異にておもふ人にえあはでいたづらにことしの春もくるゝ事よとなげく也故にさへてふ誤をおけり只一言にて意をふゝめたるは一つの文の体也

をしめども春のかぎりのけふの日の夕ぐれにさへなりにけるかな

心は右に云が如しさて此うたは後撰集に過しらすよみ人不知　三句をけふも又と有てたゞ春の暮るを惜むのみなるを端の詞を加へて戀の哥とせる巧いと面しろし

聞知る人もなしや

右の詞と合せて意得べく書たるを今の本には此詞落たり

むかし戀しさに來つゝかへれど女にせうそこをだにえせでよめる

來てはいたづらにかへりつゝしかりとだに女に傳とせん由のなき也

古本に猫をうたかはしとよめるは猫の略にはあらて疑の草の手よりあやまりしならん猫といとちかし

なたらかにて意ある哥也今もかくこそよむへかりけれ

あしべこぐたなゝし小舟いくそ度ゆきかへるらんしる人をなみ

あまたゝび來れと女にさとしもしられでかへるを芦の繁みを行かへる小舟の見えぬに譬へたりこは古今集によみ人しらす　堀江こぐ棚なしをぶねこぎかへり同じ人にや戀わたるべきてふをなほして作れる也○棚なし小舟は万葉に舟だなうちてともよみたるに和名抄に榀をふなだなと記せるを合せて見れば其榀の無き小舟を云也○いくそたびとは幾十度の意也十をそといふは古語也

むかし男身はいやしくていと高き人を思ひけり少しもたのみぬべきさまにあらすやありけんふしておもひおきておもひ侘て

いやしき身もて似つかぬ貴人を思ひかけたればいかに思へども少だに成ぬべきよしのなくや侍りつらんさればこそ夜晝おもへどもかひなきにわびはてたる後に我身をつみたる哥をよみしを云也○今本に右の詞を少たのみぬべきさまにや有けんと有は詞の落たる也さらばなどかふして思ひおきて思ひ侘てといはん前後の詞と哥とをよく考へは語の脱たるもあまれるもまともあやまりも明らかならんを後人は疎かに見過せしなりけり○になき人とは似つかざる人を云六帖に似なき思てふ題に皆我より高き人を戀る哥を載たるにてうたがひなき事也或說に二無也といへるは俗解也古語に字音はなし

隨分おもひはすべし比なく高きいやしき苦しかりけり

身の分に隨ひたる戀をこそすべけれいやしき身のほどに比類がたき貴人を思ひ懸ればかく成がたくしてくるしき也といへりならぬ戀に侘はてゝ後に思ひさとれるさま也○おふな〳〵てふ語はよく解得たる說なかりしを此古本に隨分と書たるにて明らけしいかにぞなれば我身のほどに隨ふ意にてしか書たれば我脊力のほどに隨ひたる重荷を負にたとへたる語也故に假字もおふな〳〵と書へし〳〵なはそへていふ辭にて朝なゝなとのなに同しき也　物語におふな〳〵のたまふてふ語多きも皆身の分を盡していふ意也負氣無てふは力に堪ぬ重荷より出たる語なるにてもおもへ此語の本は御位につきます時の宣命なとに續日本紀に見えたり○なぞへなくとは比類せざるを云語にてこゝは高きと賤きとひとしからぬをいふのみ此語共を意得ざる故に此條をいと思ひ誤れる說あり

むかしもかゝる事は世のことわりにや有けん

末の世には物ごとに貴き賤きけぢめをなすが昔は人の心なほければさもあらざりけんとおもはるゝに昔すら世はさる物にて及ばぬ極はきはとこそ有けるらめと評ぜり此評にて右の哥の意いよゝ明らか也

昔をとこ女ありけりいかゞありけむその男住すなりにけり後に夫有けれど子ある中なりければ細かにこそあらねど時々ものいひおこせけり

近きほど或人のいへるは此男は業平也女は右大臣良相公のむすめ染殿内侍にて子は滋春也此内侍は滋春の母なれは子ある中とはいへり後に夫ありとは近院右大臣能有公也大和物語にさるさま見えたりと此說よくあたれり然れども此條の哥は業平のよめりとも聞えず記者のならんよりて思ふにさる面かげ有事もて端の詞は作りてさて哥は記者のよみて一條とせしなるべし

女のかたにゑかく人なりければ扇にかきにやりけるを今のをとこの物すとてひとひふつかおこせざりけり

大和物語に染殿の內侍といふいまずかりけりそれをよしありのおとゞと申けるなん時々すみたまひける物をよくしたまひければ御衣どもをなんあづけさせたまひけるに云々又云在五中將すまずなりて後中將のもとよりきぬをなんおこせたりけるこれに洗はひなどする人なくていとわびしくなんといひやりけるを猶必して給へとなん有けれは云々と有は此文を書かへたるなるべし

かの男いとつらくておのが聞ゆるとをば今までしてたまはねばとわりとおもへどうらみつべき物になんありける

にも有へく又おしはかりにしひて名を書たるもありとゆれは必とはしかたき事也心をやりてみるへきのみり

○あらはひはあらひを延てしかいふ

ある説に漏の字也といへるはより所もなし

とてよみてやりける時は秋になん有ければ

今本によみての上にろうじてと有はあしからず是は畊の字音にてあざけりてといふ意也さか木の卷にさらにかろめろうぜらるゝにこそはとおぼしなすにと有に同じ○時は秋と書るは今の夫を今の秋にたとへたるをしらする也

秋の夜は春日わするゝ物なればかすみに霧や立勝るらん

秋と成ては去し春をは忘るゝ事世のならはしなるをおもふに春霞よりも秋霧はいかにも立まされる故にやあらんといひて昔の我よりも今の夫をはいと思ひまさるらんとそへたり○古本に立勝ると有にてこと足れるを今本にちへまさるらんと有は語の俄旦めきたるをもて思ふに立の草書をちへとよみあやまれるならんか三の句も今は物なれやと有はわろしさてはとわりも明らかならず古本に物成者と有に從ふべし

となむよめりければ女かへし

ちゞの秋ひとつの春にむかはめやもみぢも花もともにこそちれ

又譬へもてよみたり今の夫の如きは幾許ありとも故の一人に及ぶべきには待らずされど共にあだ心は同じかればと云て事のついでにあだなりしをうらみたる也

昔二條の后につかうまつる男ありけり女のつかうまつるをつねに見かはしてよばひわたりけりいかで物ごしにてもたいめんしておぼつかなくおもひつめたることとすこしはるかさんといひければ女いと偲て物ごしにあひにけりもの語などして男

此男女例のたはふれ事なれば誰とも指べからす然るをこれらをも業平は忠仁公の家禮なればしかるなどいふよ時代をしらぬ人の定也王孫の人臣家の禮を學ぶ事などはかつてなき時也已にもいへば略けり

ひこ星に今夜はましぬあまの河へだつる塞をいまはやめてよ

二星の年の契りも物隔てはあはねば我は彦星にまさりたる戀をするとなげきたり且男のみづからを云故に彦星とはよみたり今本に戀はまさりぬと有もあしからねど猶古本に今夜はましぬとある方を用う

此哥にめでゝあひにけり

よくも聞えぬ哥を擧てかへりてかくいふが興なるべし

今本の詞わろき所々古本によりて改めつ　少し秋風吹立なんの後ちてといへるは秋のみ思ふ事とのろ七月の末ななとの事と見てはこの有なさんの終からなは此條の始終かなはす

古今集に夏は人まれさゝのに葉ひのとりぬる霜夜はの我曾丹集にせみの羽のようすらに衣になりのいもとぬるのまとほなる夜の哉

こきとまれと誰も汗ぬとや心へたほにうれは間と

和名抄云風癰診

（カサホロシ）人皮膚虚爲二風寒一所レ折則起也　又熱沸瘡（アセモ）細瘡也　今本に秋たつこるほひとあれと古本に持の字なし用ゐたるにより其外宜しき古本の詞とも

口舌て言は其比より俗言也万葉にこちたきと云にたる事也

伊勢物語古意巻六

むかしをとこ有けり女をとかくいふ事月日へにけり岩木にしあらねば心ぐるしとやおもひけんやう〳〵哀とおもひけり

いは木にあらすてふ詞は白氏文集に人非二木石一皆有レ情又遊仙窟にもあるより物語ぶみにかた〴〵書しなるべし○心ぐるしとは源氏物がたりなどに多き語にて今の俗の苦に思ふと云に同じくなほさりに捨てあられぬ事也

そのころみな月のもちばかりなりければ女之身に風瘡もひとつふたつ出たりければ女のいひおこせたりける今は何の心もなし身に瘡も一つ二つ出たり時もいとあつしすこし秋風吹立なん後に必あはんといへりけり

今はてふより女の詞也さきには故有てつれなうしつれど今は逢まじき心ありて云ならす身に瘡も出來時もあつきに堪ねばこの時過してこそと云也實に暑きほどは身も汗ごければ女の用意すべき也　此かさかいつはりことゝ云はわろしさてはやう〳〵あはれとおもひけりとあるにかなはす○かさは古本に上に風瘡下には瘡と書たれば上はかさぼろしともよまるれど暑き寒中をいふに熱沸瘡なるべきを女のさまで委しくはとわりやらでかさとのみいへるぞよからんさらば二ところともにかさとよむなれど記者の意もて一所に風瘡と書てかさの狀をしらする歟○六月の望は暑氣の寒中なれば万葉にふじのねに降おける雪はみな月の望に消ぬれば其夜ふりけりともよめり望は和名抄に釋名に望月毛知都伎月大十六日小十五日日在レ東月在レ西遙相望也と皇朝にては月と日と相對ひてあれば持てふ意に云ならんむかふ物の增おとりなきを持といふに同じ

秋まつころほひにこゝかしこより口舌出來爾人者其之人の許へ往なんといひのゝしりけりされば此女のせうどにはかにむかへにきたりければ

しか契りて其秋を待間にと也こはまた六月の末にていへる也さて秋の來てはさる事言痛いはれてより後つひに紅葉の落そむるほどに兄人の率てゆかるれば契りし事はあらすなりぬるを遠く思ひ含めて書たる也○せうどゝは兄人を延て唱ふる言也弟人をおとうとゝ云にむかへて意得べし背と書はか日本紀に汝をなびとゝ云に依にすべて人てふ言をそへて云ぞ古意也ける

この女かへでのはつもみぢをひろはせて哥を書つけておこせたり

いひのゝしれる間に秋もなかば比になりて初黄葉のやゝ散たるも有を拾はせてそれに哥は書たる也

秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ

哥の意は契りし事もかくあらぬさまに成行は寔に淺き緣にて有けると云也さて既に秋風吹立なん時にあはんと契しをいへば其時も過て木葉の散しくといひて月日のうつり來しを詞のつゞけにてしらせかつ木葉のちりつもる水は淺くなる物をもてあさき緣に江をそへてたとへたりかくむつかしきは例の記者の哥也けり○あらなくにのなくはぬを延して云あらぬにといふ也

とかきおきてかしこより人おこさば是をやれとて去ぬ

已に黄葉に書付ておこせたる由有は落著を先いひし也さて其後の事ををち〳〵にしるすは文の例也　是を意得ぬ人は詞の前後せしにやとうたがふへし

さてやがてより後つひにいまゝでしらずよくてや在覽惡てやあるらんいにし所もしらず

やがてより後とは右の哥書おきて有し即時より後と云也且次の呪言をてらしてよくてや有らん云々とはいへり

かのをとこは天之逆手を打てなんのろひをりけるなる

古本ける成と書るは上につけてよむへし

むくつけきこと人のゝろひごとはおふ物にやあらんおはぬものにやあらんいまこそは見めとぞいふなる

女のせんかたなくて契りにたがひたるを男はしらねば腹だちてかくさか手を拍て此呪咀は必女の身におはでは

あらじ今に其祥見んぞと云也のろひ言とむくつけき事を二つにこゝろうるはわろしむくつけき事をいひて人の

のろふ言はと意得べき也○むくつけきと報ひがましきてふを略きていへりむくひに善悪の二つあれと常には悪報を

はおのつから惡報の事となれるは俗言のならはし也　おふは其報ひを負を云万葉にますらをのおもひわびつゝあまたゝびなげくなげきはお

はぬものかはうつぼ物語にさても人をのろふ人は三とせに死る也大將足手のいさゝかの恙もあらば朝臣の爲る

と思はんをせちに怨じたまへば云云○あまの逆手とは天之はいにしへの常にて天より傳へたる事を始とし物の

稱美にも奇妙なる義にも冠らせ云辭也たゝ稱美に天之といへる事古事記日本紀に多し　さか手は吉事には手を我前の方にて打凶事には後

方に手をめぐらして打也　古事記に事代主神この國を天孫に避て海に入時の文に蹈二傾其船一而天逆手矣於二青

柴垣一打成而隱也又日本紀に彦火々出見尊に海神のをしへていはく以此鉤給其兄時言狀者此鉤者於煩鉤

須々鉤貧鉤宇流鉤云而於後手賜云云これら也かゝればこの此文の意かの男の咀へる時のわざなる事明らけし

然るを或人は是をも業平の事と思ふよりこは實にのろへるにはあらずといひ又海人の海に入時の手つきなど云

はあまりなる强言也

むかしほり河のおほいまうちぎみと申在けり四十の賀九條の家にてせられけるに中將なりける翁

堀河の大殿とは基經公を云也諡昭宣公　此公は貞觀十四年八月に三十七にて右大臣の左大將となりたまひ四十は同十

八年也此時まだ業平朝臣は中將ならず翁ともいふべからぬほどなるを例の此文の書ざま也されど哥は古今集に

有て此朝臣の也○四十歳を老の初とて賀ふ事は懷風藻に正六位上刀利宣令詩五首賀二五八年一從五位上上總守伊

岐連古麻呂一首五言賀二五八年一云云かゝれはいと古き代より侍り藤原の朝より平城の初めにいたれる人々

也

さくら花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まどふかに

古きん集に老らくのこんとしりせば門さしてなしとこたへてあはざらましをこはいと古哥なればとりて業平は

よまれしならん老をば人の如く云にをさなくてをかしき味あり○散かひは散ちがふ也萬葉にゆきかひと云を往

反と書たるに依べし○老らくは老るといふを延て老らくといふ也まがふかにのかは疑ひの辭なるを或人賀の意

自然により來れりと云はいかにぞや自然により來るといふからは作者の意ならぬは知つゝ猶いかで云らん古人

の哥は言少なにこそあれ

むかしおほきおほいまうちぎみと聞ゆるみまずかりけり

此文は文德清和の御時のさまに書たればそのほどの太政大臣は藤原良房公也諡忠仁公淸和之外祖父天安元年二月太

觀十四年九月薨堀河太政大臣ト申ス　政大臣同四年從一位二年十二月攝政貞

此つかうまつる男なが月ばかりに梅のつくりえだに雉をつけてたてまつるとて

此男をしも業平として忠仁公の家禮也など云說は前にもいへる如くいとひが心得也此御時などまだおほやけの

禮法行はるれば臣下の家禮を用うる人なしまして王孫をや

我たのむ君が爲にと折花は時しもわかぬものにぞありける

こは古今集にも六帖にも初の句は限りなきと有て題もよみ人もしらえぬ哥也然れば時ならぬかへり咲の花など

折て公家に奉りし時の哥なりけんを今は端書に梅の作枝とし雉を著たりと書て時しもの詞に雉子をかくせりと

万葉に見らくすくなく無らくのをなきと云は見るは多くはいと少なくこふる事也らくの約めいるなるを知へし

前にほり河のおとゝとありしは此御子也

長月としも書は夏月八月迄雉賞せすは春又冬は實はの梅花あれは作枝はの用へからすかれ是よれ思ひて長月そなきほしてはいとは是もいてへるふなるに梅へかえに雉なつへるも花のに有時は花はつけ其なきゝおろしき付也て付こゝて付ふるか故實也といふ

つくりなしたりさて太政大臣にたてまつるなどをかしく巧にとりかへたる也本事の意のまゝにのみ思ひてかつ此文なを實事と心得てはいかにときあやまらさらんや

とよみて奉りければいと賢がりたまひて使に祿たまへりけり

かしこがりとはかしこきとりなし也とほめたる也さて記者のみづから作りなして且ほむるは例のとりなし也

昔右近馬場之射禮日

こは世に難き事とて云說あれど猶わろければ年經て思ふが中に一二つ侍りし右の一つは先馬場の埒をばひをりと云べし引はへて長き柵なれば引柵の意也さて此古本に射禮日と書たれば騎射の日なるを知べし此事有には必埒をゆひてそれが中にて馳れは其日を其比の語にひをりの日とはいひしなるべし万葉に馬柵をうまをりと訓たるは馬をこめおくをり也是に准らへて馬場の埒も馳る馬を左右へはぶれざらしめん料にて引はへゆへればひをりといふべき物也引を略きてひとのみいふは水田の引板なひた盜人の引剝なひはぎといふ類猶多し又ひとつは埒をたゞをりとよみ調の意右に同ひは標の事か貞觀延喜の式などを考るに競馬には必馬場の埒の末に馬どめの標をたつめり然ばくらべ馬ある日を標埒の日ともいふべき也標なひと云は字音なれとすでに寛平延喜の比となりては常云語には音調打ませ　かくはあれど右に射禮の日とていへる事多かりし也且標なはぶきてひとゝなふるは標位なひいと云か如し有からは騎射をいひてくらべ馬の事ならずおぼゆれば猶前の旨によるべし○右近の馬場は一條京極の末に在よし拾芥抄にいへるも是也或說にこれを五月六日の右近衛の眞手結の事といへと其日なるは内馬場にて行はれて武德殿に行幸有なれば右近の馬場にての日は他日なる事明らけしもし五月三日四日の荒手結はこゝにて有もやせん考へし且五日六日は物見車の立べき所にもあらず右近の馬場にて行なはるゝは他日なる事は知べき也今昔物かたりに云種合の戲れも右近の馬場にてせしに物見ぐるま多かりとみゆるなと思ひ合すへし

むかひにたてたりける車に女のかほの下帷裳よりほのかに見えければ中將なりける翁

此男の物みる馬場の埒を隔てゝむかひの方に女車は立たる也けり此文のさまも馬埒なるべき據なり○したすだれは和名鈔に帷裳俗車車帷也と云物也○中將云々は或說に中少將は馬場のおとゞ屋に著べければ女車たてらんほどは遠くてはたみゆべからずはた哥よみてやるべうもあらずなどいへど此ところ古今集に中將と書ず何の官の時ともしりがたし又此文は例の書かへたれば實をもて論ずまじき也大和物がたりにも物見に出たるよしいへり

みずもあらずみもせぬ人のこひしくばあやなくけふやながめくらさむ

見ざるにもあらず又見つるともなくはつかに見し人をかく戀しむならば何のわかちもなき物思ひして今日の日をくらすにこそあらめとてほのかなりしも心にしみておぼゆる心をいへりまとに業平の哥にて高貴にして心ふかき也例の記者の哥又あたし人のしらへたみて心むつかしき哥との別ちなこれらにてしれかし甚となるもの也　○あやなくは古本に文無と書たるは正義にて織物の文などの鮮やかならぬよりおこりて物のわかちのなき事にはみないふ事となれる也閑はあやなしてふにてよく心得らるゝなりさてこゝは見ずもあらず見もせぬてふ事よりあやなくけふやとはいへり或說に無益なりといへるはこゝに少あたらず○ながめは默然として物思ひをる時のとわりすでにいへり

かへし

知しらぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそ指南なりけれ

男の哥をとがめてもとより知ぬ人をば戀まじとやうにのたまへとなにか知しらぬをわきていはんやとわりなき事也知もしらぬも心こそ道しるべとなりて思ひはつく物なるをといへり○しるべは日本紀には導の字を訓み新撰万葉には指南と書たるをこの古本には用ゐたり

昔をとこ後涼殿のはさまをわたりければ

此殿は清涼殿の後北にある故に後涼殿と云○はさまはこゝは殿と殿とのあはひを行なれば古本に迫の字を書たり常に間の字をしか訓むとわり同じ

あるやんごとなき人の御局より萱草をしのぶぐさとやいふと出させたまへりければたまはりて

此貴人は例の誰とさすべからずされどももと此男の相知たりしが絶たるには侍るべしよりて女の方より萱ぐさを出してこは忍草とや云と問に男のいな是はしのぶには侍らず忘草といはんときさればこそと咎めんためにそらおぼれして問へる也○わすれ草は万葉にわすれ草我下紐につけたれど戀はわすれずといふ意によめるに萱艸と書たる多し和名鈔に萱草一名忘憂和名須久左と記し後撰におもふとはいふものからにともすればわするゝ草の花にやはあらぬ枕ざうしに六月に忘草の花さける事も書たり然ば今も萱艸とて夏の比黄なる花の咲ものを云事明らけし○しのぶ草は和名抄の苔の類に本草云垣衣一名烏韮和名之乃布久左とて苔なる事此初めの條にいへるが如しさて右の二種は甚異なる物をわざと呼たがへて問たるにをかしき意は侍るを後の人は一草に此二名ありと云にやこゝの意を覺らぬ故也

わすれ草おふる野べとは見るらめどこはしのぶなり後もたのまん

こは忍ぶぐさなるからは後たのもしとよそごとの様にいひて我忍び思てふ事をそへたり女のそら問ひを心得てあらがはぬさまにてこは忍ぶ也といへるがいとおもしろき也

むかし左兵衛督なりける在原のゆきひらといふ人有けりその人の家に美旨酒ありと聞てうへにありける左中弁藤原の良近といふ人をなんその日客直にてあるじまうけしたり

行平卿は三代實錄に貞觀六年三月從四位上備前權守在原朝臣行平爲左兵衛督と見えたり良近朝臣は貞觀十二年正月右中辨となり同十六年ぞ左中弁には轉ぜれば行平左兵衛督なる時は良近は左中辨にあらず又下に云大政大臣は忠仁公同十四年に薨たまひて良近まだ左中弁のほど也みな事をかへたる例のわざ也上戸なりければこゝに擧たるにや○上に在けるとは殿上に侍らひけると云に同じ○まろうどざねとは客人の中にて上客を云既に使さねと云に同じ

情ある人にて瓶に花をさしたり其花の中にあやしき藤のはなありけり花の莖三尺餘なんありける

瓶に花させし事後撰集にも枕ざうしにもみゆ櫻藤などの大なるは大きならんかめにさして高欄のもとなどにおけるさまみゆ○藤の花ぶさ今は五尺ばかりなるも有はやしなへる故也いにしへおのづから三尺あまり也けんは珍らしとしつらん

それをだいにて哥よむよみはてがたにあるじのはらからなるあるじまうけしたまふときゝて來たりければとらへてよませけるもとより哥の詞はしらざりければすまひけれどしひてよませければかくなん

あるじの行平卿の弟多かればいづれともいひがたき中に是も業平朝臣をあてたるなるべしさて史にすら哥をよく作ると有ほどの人を哥の詞しらぬよし書はたこゝの哥のわろきなどみな記者の狂言也けり條を幾重もたがへて人を咲はしむるもの也

さく花のしたにかくるゝ人おほみありしにまさるふぢの陰かも

次の詞を以てみれは藤原の太政大臣の先祖にこえて榮えたまふも同じ氏族にて良近朝臣の如きよき人々其下に多ければかくは有らんと其日の上客をはじめて其席なる藤原氏の人を藤の花にそへていへりこは主人がたの垣下のあるじの云べきさま也

などかくしもよむといひければおほきおとゞのえいぐはのさかりにみまぞかりて藤氏の所々にさかゆるをおもひてよめるとなんいひける皆人不轉なりにけり

いにしへの哥はなだらかにてとわりもよく聞え侍るを此哥まとに哥の詞しらぬ姿情なれば笑ひそしるべきを時の横貴をほめつと云は中々に刺る意もあるか且記者のみづから哥の如くもなくよみ出て自ら爾いへるは例の興のみ

むかし男ありけり哥はえよまざりけれど世を少しおもひしりたりけり

古への哥はおもふ心をたゞにいひ出るのみにて人も我もさるからおのづから人情をしらる其人情やがて世の中のあらふるとわりなければげにいにしへ哥よむ人はしか有べき哥の藝となりて後の世の人はしかはあらずさて次の哥にいへるとわりを對へて見るべし且其人のよめる哥を舉て得よまずとはよくはよまずといふ也

あてなる女の尼になりて世間をおもひ入れて花城にもあらずはるかなる山家にすみけり

おもひ入てといふと上の少思ひしるといふとをてらしてみるべし今本におもひうんじてといへとすべてのさまかおもへは思ひ入てとあるによるへき也

この男の氏族の尼なればとむらひがてらによみてやる意也もとあひし中也など云は惡し

氏族なりければよみてやりける

そむくとて雲にはのらぬものなれど世のうきとぞそらになるてふ

世をそむくとても雲に乗て飛行ほどのこと〳〵しきわざはあらねとおのづから世間の憂事は大空に成て思ひもとゝめず有物そといひて且さこそおはすらんやと問よし也そらとは物のとりとめもなきたとへにてこゝはうき世を忘れゆくを云さて空の語より雲にはのらぬといひよせたり今本によそにと有も雲の語にはあれと古本の空まされり　今本の右の末に「となんいひやりける齋宮のみやなり」と有此語古本になし後人のくはへしなる事知べしさて齋宮二字にていつきのみやとよむ事なるを又下に宮てふ字あるはいかなる事ぞと思に後世の俗は皇子皇女をさして宮と申をいにしへなき事ともしらぬものゝわざ也けり

中世より後の哥は巧作れは此意にかなはす万葉の中にして此意を心得へし実用はもし実目にあやまりけんかし

むかし男ありけりいと儼に實用にてあだなる心なかりけり

古本に儼にと書たるは恭の意なれはいやゝかとよむべし實用は實樣なるを晋にとなへ來れるをしらせて用の字をかりて書るにや今本にまめに實やうにてと有はまめと實やうと同意なればあやまれる事明らか也

ふかくさのみかどになんつかうまつりける心あやまりやしけんみこたちのつかひたまふげる人をあひいへりける

さて

深草のみかどゝは仁明天皇を申す嘉祥三年三月廿一日崩御同廿四日深草山に葬奉られし故也さて此うたはこきん集にては業平朝臣の哥なるを採て例の誰ともさすべからずなしたりかくいやゝかにしてまめなる人の今はた其いやまふべき親王達のおぼす女にしも物云事は心あやまりやしけんかしといふ也先かくいひて下をおこす文のこゝろを思ふべし

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにも成まさるかな

よべ逢しは只夢のごとくおぼえてはかなければ定かにも見ねば彌はかなく成まさりて堪がたき心ちすといふ也

艶に心ふかくまことに朝臣の哥也○右の如く解は古今集にも此文の今本にも三の句まどろめばと有によれり古本には夢乎墓無見覺者とあるを右の二書にしたがひて思へば覺は臥見の二字をあやまりて一字に寫たるなるべく覺ゆる故也　若又覺は覺の字をあやまりたらはさめぬれはとよむへしさて上は右と同しくて三の句より下はさる夢のことくなりしかさめてけさ思ふにいよゝはかなくなこり思ふ心のまさり行と云歟此文には一句かへて心ないとことにぜる例あれは也

となんよみてやりけるさる哥のきたなげさよ

こは哥のわろきとにはあらずかのいやゝかに實やうなりし人のゆくりなく心あやまりしてぬしある女に逢にしをばおもひかへしてもやみなん物をかくまで思みだれしさまの哥よめるは心ぎたなきわざよと云也こゝをいは

んとて中々に實なる人といひ出たるが文の巧み也○或說にはこは自記なれば謙退して哥をしか云といへるは何事ぞやこゝは謙退して云と上に儼に實用にてはみづから誇ると云へし又哥のわろきをきたなきてふ事やはあることは哥によみたる心の名殘たへがたう聞ゆるをさるよき人にしては心穢なきと云を略してしかいへる也そも〳〵此哥はとにおほかた人の及はぬ委情なるを例の端をかへなどして興とせるのみ哥は本よろしければとりかへても宜しぞかし

昔となることなくて尼になれる人有けりかたちをやつしたれど物やゆかしかりけん賀茂のまつり見に出たりけるををとこ哥よみてやる

已にも夫の覺えぬ事によりて家出せし女の事をいへりこゝもそれに似たりさて尼に成たるを猶物見まほしがるにつけて夫のよみてやれる也○今本にかたちをやつしたれどゝ有に古本に良乎志有望と書たるは有望の字は尼のすがたは似つかはしくさるかたによろしき心にて書たるか意得がたけれとしばらく今本に隨ひて訓は改め侍らず若又望は替たれとてふ字をあやまれるにやとも思へとしからは有の字は望の下に書べき例なるを上にあるからはさも侍らす字の落たるなるへし

世をうみのあまとし人をみるからに眉せよともたのまるゝかな

世をうしとて尼になれゝどかく物ゆかしきてふ心と見るからは猶互に目をくはせて心かよはすべき人也今かく離れてあれど猶たのもしくおぼゆといひて嘲る也さて尼を海人によせて世を海といひかけ海藻喰せよとそへたり海邊の人は海松を專ら喰へば也○めぐはせは源氏物語に人々目をくはせつゝあまりなるみ心やりかなと云べし云々後拾遺集に清少納言あさりする蜑のすみかをそこなりとゆめいふなみやめをくはせつゝ史記項羽本紀に梁駒レ籍而使之也古曰動目文選加原九哥云滿堂美人忽獨與レ余目成とも有に同じめみくはせと云を略してめくはせと云今もしかいへり

哥の左に　これは齋宮の物見たまひける車にかく聞えたりければ見さしてかへり給ひにけりとなんと云とあれど一の古本にはなし例の後世の俗のなすわざなる事上に云るがごとし殊に本文に異なる事無くて尼になりたると書しはかの夫はおぼえぬ事をうらみなどして家出せし女のたぐひこそ見ゆれ齋宮のかへりて尼になりたまふをしか書べきかは

むかし男かくては死ぬべしといひやりたりければ女白露は消なばけなゝんきえずとて玉に貫べき人もあらなくに

是は男はいと切に戀るを女の情なきを擧て一つの興とせる也さて哥の心はよしや消なばきえよさて有とも玉とぬきてめづる人はあらじ物をといへる也後撰集にまだあはず侍りける女の許に死ぬべしといひやりければはやしねかしといへりければ又つかはしけると有類也且古今集に櫻花ちらば散なんちらずとて故郷人のきても見なくにてふ哥を採て万葉に元興寺の僧自歎のせどう哥白玉は人にしられず不知ともよししらずとも我ししれらは知ずともよし古今に萩のつゆ玉にぬかんとゝれば消ぬよし見む人は枝ながら見よなど云哥の詞をとりて記者の作れるなるべし

といへりければいとなめしとおもひけれど心ざしはいやまさりけり

此ことば古本には無し落たるなるべし○なめしとは崇むべき人をおし平等たるさまに爲すを云故に萬葉に妹といへば無禮恐し云々此ほかにも無禮の字をなめしとよみ孝德紀には輕の字を訓たり物語ともになめげなるなめぐなどいへる皆是也さて此女のよめる哥のさまあまりに無禮とは思ひながら猶こひしう思ふと云のみ

むかしをとこ親王たちのせうえうしたまふ所にまうでゝたつた川のほとりにて

こは古今集に二條后の東宮のみやすん所と申ける時に御屏風に立田川にもみぢ流たる圖かけるを題にてよめるとて素性法師のもみぢ葉のながれてとまるみな戸には紅ふかき浪や立らんてふ哥の次に業平朝臣の哥とて侍る

を此文に端の詞をかへてとりたる例の事也○逍遥はあそぶ心なる事既に出たり

ちはやぶる神代も聞ず龍田川からくれなゐに水くゝるとは

こは立田河に紅葉の流るゝは紅して水を絞染にしたりと見えてえもいはず珍らしきさまなれば神代よりもまだ聞ざりしけしき也とほめたりさるを近きほどの説に紅の下より水の泳るを云といへるは理りも聞えずさせる面白きふしもなし其上紅は色にて體なき物なれば紅に水の泳るといはんは後の俗なるべし絞るといふ時は實に珍らし且或家の傳にも絞る事とせるをさては詞の聞にくしとおもひて用ゐざるよそれこそ後の俗の心なれ古今六帖に霜の題木の葉みなから紅にくゝるとて霜の紋にもおきまさる哉とよめるはたしかに絞染なる証也又在原の友于の時雨にはたつたの川も染にけりから紅に木葉くゝれは是も絞り染也さて絞りぞめは纈纈にて是をゆばたといふは結機の略言也然れば機ものを糸してゆひくゝりてさて染るを云事しるべし今の俗しぼり染と云是也○ちかのこ染也云はわろしはやぶるてふ語は已に出つ○からくれなゐは延喜式に深紅の事を韓紅と書たり我朝にて染たるよりは韓より來るはとに色深ければ又それがやうに染るをしかいふめり

昔あてなるをとこ有けり其男のもとなりける人をうちにありける一本かく有もよし内記なりける藤原の敏行といふ人よばひけり

敏行朝臣の内記なりける事こゝにみゆ此文官位の時をばわざと書かへたれど又其人になき官をば云ぬ例なれば是に從ふべし或説に貞觀元年少内記といへり其任せし時は三代實録には見えず何によりけん外に考ふべきもある歟○一本に裏に有ける云々いへり内記なれば殿上に有を上に在けるといへるが如し

さればどまだわかければ文もをさ〳〵しからずいはんや哥はえよまざりければ此あるじなる人案を書てかゝせてやりけり可愛まどひにけりさて男のよめる

稚ければ文も專らえかゝず哥は本よりまだよまねばあるじ下書してかゝせし也○をさ〳〵しからずを古本に不幹と書しは日本紀に幹了ををさ〳〵とよみたるに因くなちん此語は物の長たるををさと云にて不長をゝさ〳〵しからずと云事知べし万葉にをさをさもあはぬ子故に物思ふてふ意たれば長より轉じて專らなる意にもなれる也○案とは俗に下書てふ事を云令に案とはとめ書の事を云とめ書下書相似たる事也○或説に此女をかの初草のなどめづらしきてふことたへせし同人として業平の妹也と云はおぼつかなし事の狀妹ともおぼしけれどさらに兄人など書べきにあるじの男と有は妹とゝせぬ書ざま也此もとは古今集に業平朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしけるとしゆき朝臣と有を思ふに業平朝臣の母親王につかふるやうにてある氏族の女にや

つれ〴〵のながめにまさるなみだ川袖のみひちてあふよしもなし

女を心に思ひつらねつゝ長目してをればいとゞしき涙の川は水まさりゆきてわたりがたくいたづらに袖のみぬらしつゝ逢べきよしもなしと也けふもながめ雨のふるによれる詞也○長雨をながめによせ云事已にもいへる如くまして此哥は六帖に長雨と涙川と一所に擧たり又此哥を採て同六帖につれ〴〵と袖のみひちて春の日のながめは軒のつまにざりけりともあり○つれ〴〵とは連々物を思ひつゝをるは獨いとまある時の事也それを轉じてさびしき心ともなれるを後にはたゞさひしきを云のみおもひて此哥をも心得たがひたる説ありこゝは其女をおもひつらねつらねの略なるべしてつれ〴〵といふ

返しれいのをとこ女にかはりて

あさみこそ袖はひつらめ涙川身さへながるとときかばたのまん

其涙川はあさくしてこそ袖ひづるばかりは有らめわたるとて身も流るゝばかりのふかきほどならばおもひけりとはたのみぬべきをと也万葉に廣瀬川袖つくばかり淺きをや何にふかめて我戀るらんと有をおもひてよめるな

今本の詞にはいとていたうめでゝ今まてきてふはこにいてありとなんいふなるとあり少とゝのはぬ所あり

かす〳〵の語は跡に說有右にくはしくいふ

るべし

といへりければ男いといたうめでゝ文箱に入てもたりとなんいふなる　古本寅箱可愛而文箱に入而用行而云有とあり用行而は用利與のあやまりなるへし

これまで一條のごとしいと祕藏におもひて文箱に入て久しく持たると也こは記者の詞也

をとこふみおこせたりえてのちの事なりけり

前のは女を繫想せるあひだのうた也今は得て後の事としも有からはと時の事なれど同し男女の事故書つゞけたるなるべし仍てさる意もて說也

雨のふりぬべきになんみわづらひ侍りぬる身さいはひあらばこの雨はふらじといへりければ例の男女にかはりてよみてやる

數々に思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

そこにはおもひ思はぬかたの數々あれば雨さはりせぬかたも有なんを我をば雨のふらば問じとのたまふからは我身の幸ひの有無をも雨にて知べきに其雨のかく降まさるがかなしと也男の身幸ひあらば此雨はふらじといへるを女の我かたにとりて云也○數々にてふ語をたゞ我を思ひおもはぬ數々にと云といふ說侍れど此哥には問といひ身をしるといへる詞のさまを考るにとかくにおもふかたをば雨にも問ひおもはぬかたをばさはるてふ意なれば思ひ思はぬ人を數々もたる男をさす也けり○古今集の此哥の次に大ぬさの引手あまたになりぬればてふ哥をつらね入られし編のついでをも思ふべし同古今に數々に我を思はぬ物ならば山の霞をあはれとは見よとよまれつるも花がたみめならぶ人のあまたあればとよめるごとくおほからん中にも我を忘れたまはぬよしのあらばてふ意也但万葉にかす〳〵に思はぬ人はありといへとしはしも我はわすれえぬかもとよめるは世間にさのみ物おもひぜぬ人は多しといへともと先設ていへり此は同言にてもちゐるやうのもなるのみされと猶數の人をいふは今も同し

○身をしる雨とは右に云ごとく男の詞をそのまゝうけ其雨にさはりてこぬからは我身の幸ひなさは此雨にてしらるゝといふのみ或說に身をしる雨とは涙を云などいふは此文をよくも心得ぬもの也

しほ〳〵しなとゝしのゝなとみなと勾かよひて同しこと也しのをしは後世しけき事とおもふはあやまれりみなしなへたる事也

ある說に業平此女のかくうたふを身に聞負て也と云はいかゝこはもとよりきけとて云なれはは右の如くいひて今更めくも也

とよみてやれりければ簑も笠もとりあへずしとゝにぬれてまどひ來にけり

しとゝにぬれては萬葉にしのゝにぬれてといふに同じくぬれしなへたる也衣手も何もぬるればしほ〳〵となへる也後世の語にしほ〳〵ぬるゝと云に同じ万葉に春雨にしとゝにぬれてよぶこ鳥又しのゝにとも有　六帖に春雨にしとゝに袖をぬらしつゝなどもいへり○簑も笠も云々萬葉にかきくらし雨のふる日を我門にみの笠きずてくる人や誰とよめり

むかしをんな人の心をうらみて

風ふけばとはに波こす岩なれや我衣手のかはくときなき

とわり明らけしさて哥にうらむとはよまねど涙のふかきを云にて端のことばを合せ見て怨の涙としらるゝは古哥のこゝろ也○とはとは常磐の略也とこいはの約めときはなる也略してとはといふ也　さてときはにかはらぬ事を何にもいふ事となりければ物の止ぬ事にも轉ぜる故に古本に不止とも書たり且其ときはに二つあり一つは常磐堅岩のこゝろ也　ときはゝとこいはの語上の如しかきはゝかたきいはのたといふ略せる也　又ひとつには常葉とて松柏などの葉がへせぬ物を云事万葉に分ちてよめりされどいにしへはそれをすぐにとこはとよみたるを後の世には松杉などにもときはといへるはまがひたるもの也後の人は此分ちを心得ぬ也

とつねのことぐさにいひけるをきゝをりける男

男の聞つゝをれどしからまるべき事を覺えねば大かたに聞過しつるにあまたたびとなればよめる也哥は記者の口つき也

よひごとに蝦のあまたなく田には水こそまされ雨はふらねど

かはづの鳴は女のおのれ鳴て袖ぬらす也たとへ雨はふらねどとは男の心にうらまるべきふしなきをたとへたり
さて男は女の哥をきゝながらあらがはずよそごとのやうに鼻吟してをる有さま也○蝦のなくに水まさると云は
鶯の氷れる涙とよめるがごとく鳴といへば涙の有さまにいへり○よひは万葉に初夜と書てもよみ又すべてたゞ
夜るの事によひといへるも多しこゝはたゞ夜ごとに也

昔をとこ友だちの人をうしなへるが許へやりける

めにおくれたる友たちのもとへやれる也

花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきにこひんとか見し

あだにちるめる花をこそ戀んものとこそ誰も思へりしにかく人こそはかなくなりたまへりけれ其許はいづれを
さきに戀んとかおぼしつるぞと問ふ也されど下の心には人を先にとはおもひかけじをてふながら暫くかりに問
のみされど端の詞に花の事少もあらでは此哥花もてたとへたる不意なるやう也仍ておもふに妻を失なへるがも
とへ櫻の花に挿てやりけるなど有けんを今は詞のおちたるなるべし○或說に花を先とも人をさきとも見さりし
がと云はわろし此哥は古今集哀傷の部に入て詞書に櫻をうゑてありけるにやゝ咲ぬべき時にかの植ける人みまかり
ければ其花を見てよめる紀茂行とあり是もと花をこそ期したれ今此文にとりて詞をかへたれど哥はかはれる意も
見えざる也

昔をとこみそかにかよふ女ありけりそれがもとよりこよひ夢になん見えたまひつるといへりければをとこ
おもひあまり出にし玉の有ならん夜ぶかく見えばたまむすびせよ

みそかなる中なればえゆきあひがたき時はおもひあまりて魂のうかれでゝこそゆきつらめさるをりはむすびと
めよといひて幸に我思ひのほどをのべやる也○諺に人だまを見て魂はみつぬしはたれともしらねどもむすびぞ
たしかへし
玉むすびせよ

とむる下がへのつまと三たび唱へて衣の下がへのつまを結ぶ事といへり此諺の哥は古きロつきにあらず然を此
文にしかよめるは玉むすぶてふ事の本より有しよりよめるなるべしかのとわざの哥をとりてよめるとは見えぬ

哥の口つき也是は吉備公のよめると云はいふにもたらす奈良の朝の哥はさる物にあらずたゞ此物かたりの比に哥もえよまぬものゝ作り出たるなるへし

むかし男やんごとなき女のもとになくなりたる女をとむらふやうにていひやりける

此貴人は女也さて其たふとき女のもとに在し又の女の身まかりたるをとむらふやうにて實には其貴き女を戀る
哥也今本にはやんごとなき女のもとになくなりたるをとむらふやうにてとて下に女のことはなしさてはとのさま明らかならされは古本によれり

いにしへはありもやしけんいまぞしるまだみぬ人をこふるものとは

家にさる女の死たる時此哥を得ばけにまだみぬ人の身まかれりと聞てかくしたひかなしまるゝ哉むかしへには
さるためしのありきあらずはしらねどまづめづらかなる我心ぞとよめりと聞ゆべしさて其貴女の心を得てよく
よまばかの女を云にはあらで我を戀る也けりとおもひうべきこゝろしらび也さて此哥は古今集賀部にいにしへ
にありきあらずはしらねども千とせのためし君にはじめん同集戀部によの中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ
人も戀しかりけりてふ二首を以て作りて端書をそへたるにや

昔をとこつれなかりける人のもとに

古本に如是あり今本には此詞おちて次の詞も哥も亂れたり

こひしとは更にもいはじしたひものとけんを人はそれとしらなん

人に戀らるれば下紐のとくるといひ來ればさこそあらんそれを我こふるしるしとはしたまへ今より更に戀しと
いひたらじと也

かへし

したひものしるしとするもあらなくにかゝるかごとはかけずぞ有べき

しか戀るしるしとせよとのたまへど我下紐はとけ侍らざめりかくばかりいたづらなるいひよせ言はいひかけたまはで有べき物か是はそら言也といふ意也古き諺をたのみていひやりしにしるし見えずとこたへられしは口を開きて笑ふべき也○古本には右のごとく有て理りあきらか也今本には右のはしの詞おち又哥も今と前後してあげて且下紐のしるしとするを前の條のいにしへは有もやしけんてふ哥の女のかへしとせり此かへしにはよりもつかぬたいかてよく見さりけん又戀しとは更にもいはじてふをば上に又かへしと書て男の又のかへし哥とせり　右の男の哥とせは又おくるなとこそいはめ又返しとは何ともなき事也此二首は後撰集に戀しとは更にも云々を在原元方のおくる哥とし下紐のしるしと云々を女の返しとして有をとりて一條の物語とせるのみ也或説に此ものがたりには哥を前後して作れりといへるは誤を餝らんとするなり凡此文にはさま〳〵にとりかふるを巧とすといへど斷もなきやうにとりかへたるためしは侍らず○人に戀らるれば我した紐のとくるとも又人に逢ん祥に我下紐の解るともいふとわざ万葉に見えたればいと古き諺也鼻紐とけ眉れかきなといふみなしかり○古本にかゝる鹿言は不レ懸云々この鹿言は借たるにて實には託言と書べしさてかごとゝはかこつけ言の略言也

むかしをとこねんごろにいひ契りける女のことざまに成にければ

こは古今集に題しらずとて有を此文に端の詞を作れる也

須麻の蜑の鹽やく煙風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり

我思ふ女のあらぬかたになびきつきたるをたとへたりげに是はよろづよくよみたる物なれば上の品の哥とは定めしぞかし○こは萬葉に綱の浦に鹽焼烟夕されば行過かねて山にたなびく又しかのあまの鹽やく煙風をいたみ立はのぼらて山にたなびくこれらもてよめるを古今集にはとれり

中將なと云はこの條には行平にもなりひらにもかなはぬ時なりは今本にはわされと書もらしたるなるへしよりて古本もて加へたり

昔をとこ有けり鰥にて居て

やむをは和名抄に鰥夫とて鰥名を引て無レ妻曰レ鰥夜無乎と有て男也又寡は無レ夫曰レ寡夜毛女と有て女也故に古本に鰥と書て且此條のさまをも男の事なるからはやむをとよむ事なるを今本にはやもめと書あやまれりながからぬいのちのほどにわするゝはいかにみじかき心なるらん

こは逢たる女のわすれし後男は猶したひてこと女をもよばでやむ男にて在つゝうらみてよめる意也哥のこゝろは明らけし

昔仁和のみかど芹河に行幸したまひけるとき生翁の今はさることにげなくおもひけれども本づきにける事なれば大方之鷹飼にて候はせたまひける

荷田東万侶いはく仁和のみかど芹川行幸の事は仁和二年十二月十四日に有し事三代實錄に委しく見ゆ此時行平卿供奉にて翁さび云云とよまれたる事後撰集に入てうたがひなしさるに此物語にては業平朝臣の供奉してよめるが如く作りなしたり此朝臣は此時已に卒られて七年の後なるを猶かくも作りなすは此文の常也生翁とも中將なりけるとも書たるからは他人の事ならぬは明らけしさるを此文よく意得ぬ人は時世のたがひたるにつけていと〳〵難き事とうたがふよいふにもたらぬ事也○なま翁はやゝ年老たるほどを云俗になま年よりて我物ぶるてふに同じ○本付にける事は大方之鷹かひ云々前にも其かたに付たる人なれはとて凡の鷹飼部に入て供奉にさむらはすると也今本に大鷹の鷹飼と有は大かたを大たかと見ぞこなへるならんさてはとわりむつかしくこゝの趣にかなひてもみえず

すりかりぎぬの袂に鶴をぬひて書つけゝる

鶴を繡て云々は後撰集に嵯峨の帝の例にて芹川に行幸したまひける日在原行平朝臣さがの山みゆきたえにしせり河の

千よの古道あとはありけり又同日鷹かひにて狩衣のたもとに鶴のかたをぬひて書つけゝる同人翁さび人なとがめそ云々是をもて書たり且嵯我の御かどの例といへるを以て芹河行幸は嵯我の御時に始めたまへりと云説は悪し類聚國史帝王部に桓武天皇延暦十五年正月遊獵于芹河野と見えて已に桓武の御時有し也然れば其始をいふにはあらす凡行幸には國司に官位をまし田租を免じ老を惠みたまひ又供奉の次第裝束などさま〳〵の事有を嵯我の例に依せられしと云也

翁さび人なとがめそ狩ころもけふば狩とぞたづもなくなる

翁すさみに中々花やかなる出たちするを人なとがめそよかゝる齡にて今日ばかりの狩にこそあらめ鶴すらけふばかりとそ鳴といへり此けふ計に今日は狩とそへたりいとも風流なる事ぞかし○翁さびは翁すさみの略也ひの濁とみの清とかよふ例也　心に進む事を云故に轉じては慰と云意にも落る也萬葉に大伴池主針袋今はたばりぬすり帷今は得てしが翁さびせんと云も翁なぐさみと云心也

おほやけの御けしきあしかりけりおのがよはひを思ひけれどわかゝらぬ人は蒼おひけるとかや

こは記者のそへて一つの心をなせり且此みかど今年御とし五十七におはしければ御身におぼし負せたまひてみけしきあしかりと云也

むかしみちの國にて男女住けりをとこ都へいなんといふこの女いとかなしうて馬のはなむけをだにせんとておきの井みやこ嶋といふ所にて酒のませてよめる

此一條古本になし落たるなるべし

おきの居て身を燒よりもかなしきはみやこじまへのわかれなりけり

こは古今集の物の名に沖の井都島を隱して小野小町がよめる哥なるをかくはし書を作りて一條とせし也さてこきん集にての意はおきの井は熾の居て身をやくと隱したるに宮こ島は隱れすと云人もあれど今憶ふに加役流人に別るゝ意にて身役島へ行別れが悲しきといふをそへたるが役とやこと音をかよはし且上の身を燒とみやこと語のひゞきをかさねたるを曲とせり且物の名は島方なるをべをえのごとく唱ふるも又ヒを異ならしむるは隱れさるにあらすさて此文には都へ歸る夫の別れをかなしむ事と採かへて宮こ島方を都へと聞するなるべし詞の中に他し言の交りても凡の語の韻にて聞しむるは古哥の常也へは此文にてはえのことくとなへて都の方てふこゝろとする也○此哥古今集に載たるを或家にては畢もてけしたり其謂は伊勢物語は朝臣の實事也と思ふ人此哥古今集に小町のとて有時は業平とまたく夫婦のごとく也然とも此二人夫婦てふ事は物にもみえす必さは有べからぬ事とて此哥をけちて取ぬなるべし常に云が如く古今集よりいと後に作れる此文をよくも意得すしてみだりに古書をけちなどせるよ惡むへきに堪たり

むかし男すゞろにみちのくにまでまどひいきけり夫みやこにおもふ人にかくいひやりける

波間よりみゆる小島の濱久木ひさしくなりぬ君爾不會而

こは万葉に浪間より見ゆる小島の濱久木久しくなりぬ君に不相四手と有を其まゝ用ゐてさて陸奥に在て京をおもひやるに似つかはしと思ひよりて右の詞を加へて一條とせし也けり哥の意いと久しく離れゐて戀しく覺ゆるてふ事は万葉の如く也されど此文には何事も皆よくなほりにけるてふ詞をそへたるによるに今までは好たる心の進びに本の妻をば大かたに思ひて在つるをさる心なほりてより今更になつかしくおぼえ侍る意としたるならん○濱久木は濱邊に生る楸の屬をいふ萬葉に吉野にて赤人ぬば玉の夜の更ゆけば久木おふる清き河原に千鳥しば啼又わたらひの大川のべの若歴木我久ならば妹こひんかもなどよみて此木は水氣ある所に專らある物ならんよりて濱邊にも有べしさて此文の今本に濱久とあるは定めて定家卿の本はしか有けんを後にかたくなに守りて

書しならん此同し哥萬葉にも此文の古本にも濱久木とありそれを取たる拾遺集にも濱ひさぎと有からは後の家々の本にいかに有ともとるに足ずいはんや濱ひさしてふ語はすべて例なき事也

なにごともみなよくなほりにけるとなんいひやりける

昔放縱なりし事ども今はよくなほりたるといへり此詞たゞに見ては此文の意に適はず右に其旨はいへり今本にはよくなりにけるとあれど古本になほりにけると有方よし

昔みかど住吉に行幸し給ひたりけるに

かくて此左の哥御製ならばみゆきしたまひてよませ給ふとか又哥の次によませ給ふければなど書べきをたゞ行幸したまひたりけるにとのみ有は其時にかの男のよめる意とみゆ

我見てもひさしくなりぬ住吉のきしのひめ松いく世へぬらむ

こは古今集に題しらずよみ人知ずと有哥をとりてはしの詞を作りて一條の物語とせる也さて此古今集の哥は万葉にいにしへの事はしらぬを我見ても久しくなりぬ天のかぐ山てふ哥の有を所をかへ物をかへて作れるのみしかも万葉のよりはしらべ劣りたるを古今にとられしは今少委しからざりけんかく古哥を犯せしものなるをいづれのみかどの時也などいへる例の由意得ぬ人のさだのみ

御神現禮給而

今本には現形したまひてと字音によみたれどさよみてはこの文の詞の例にもそむきて且いやしげ也文かくに妙なる此記者いかでしかつたなき詞書んや古本に右の如くあるぞよき也（されと一の古本には現形とも有を思ふに禮を形にあやまれるならん若又現形正字なりとも此二字をあらはれとよまんに何のさらひかあらん今は現形とあるを見て調をつくへき例をも雅俗をもわきまへすして音によむならん）

むつまじと君はしらなみみづがきの久しき代よりいはひそめてき

或人此哥の詞どものとゝのひ侍らぬをうたがひて瑞を水になして水より浪はたてばしかつゞけたるにやしからねば白浪の詞こゝろえられぬ也奥義抄には君はしらずやとかけり世にもしか言ならへり君は業平也といへり眞淵今考ふるにさるうたがひいくらもおこるべき哥也委しくは次に云べしさて此君は天皇をさし奉る也久しき代よりいはひそめて君が代を守りぬるむつまじき神の御心を天皇には更にも知たまはじやと云意なれば也昔の男のうへを久しき代より齋ひそめたまふよしは前後に見えずたとひ其男のよめる哥としてそれにつけて神の現れてよみ給ふともこたびは行幸の從駕にての事なれは大神は天皇の御事をおぼしてよみたまふとすべき也○荷田のあづま万侶いはく住の江の大神の事は神功紀に見え其後に神功皇后をも相せ齋ひ奉れる事誰もしれるが如く也さて此御神海路を守り又神功皇后の天の下治めたまへるみわざにつきてすめら御國を守りたまふ事は云にやあらん及ぶ然るを後世六百年ばかりの人は此御神は哥を守りたまふとぞいふいにしへ今の書どもゝ神の秘事てふものも見きはめ侍れどさる事は見えずたゞ此物語の此條を戯れ事ともしらぬ人のいひ出たる也けりさま〳〵にもいへる此文を誰かまとゝせんかつ物毎に神のます事は古へのむねなれど人の言語をと更に守りたまふ事は有べうもあらず幸ひを祈らんにはいづれの神にても守りおはしなんと眞淵考るに右の論實の言にてぞ侍る是をば神の御哥とてかしこみて誰もよくとかぬにやよく見ればたゞ例の記者の作れるが中にもいとわろき哥也けりいで其由をいはんには實に神の御哥ならば古事記日本紀などにみゆる皇神たちの御哥の樣にや有べき又其時に從ひてよみたまはゞ時の上手の哥さまにも有べきをいと姿情もわろき此記者の口つきなるはいかにぞやさてかの君は白浪とて詞もつゞかぬ如きはいと古き代の哥にも見えぬ事也みづがきの久しきとは磯城瑞籬宮の御時に（崇神天皇の御代云々）初めて大和國山邊郡石上邑に社を建神寶を納めて齋ひたまひしより石上の布留の社を瑞籬の久しきといひなれ來て萬葉に　人まろをとめらが袖ふる山のみづがきの久しき時ゆおもひき我はとよみそれより轉じて同萬

御心なれは人のはかろへからぬと云設有然らは古事記なとの神詠の心明らかなるはいかに古書に擧られし神詠の明らかなるなおして後世云神詠の明らかならぬは皆實の神詠ならぬを知るへし天下の古き書を委しくする人は後の書をもよく見侍るに付ていにしへよりの世のさま人の心を明らかにみるへし然るを後の人は物をかくせはかくさるゝ事と思ひて物しり皃し古き傳あり皃するよその筥の内見すともいつこにはいかなるほとの書をいかさまに意得いかなる心さまてふ事ともしらるゝもの也必々私事すましきは學問の道也

葉にも少し後には楉垣久時從とて布留ならでもよめる事となりたり然るに此神詠にたゞ久しき事の冠辭との
みせられしは此御神は古しへをば捨ていと後に轉々せる例を用ゐたまふとせん歟其うへかの人まろの久時從と
有はひさしきときゆとよむべき事は他の卷に此哥の再び入たるに時由と書しを證とすべしゆはよりてふつゝめ言也さるを
今本に久しき代よりと訓あやまりたるまゝに神も詠たまふにや古語の意は明らかなるものを又齋とは凶をいみ
吉を用うる事をいへば身に物いみして神にも君にも仕ふるをも人の上を祝ふてふも皆さる心にていふ語にては
侍れどかく久しき代よりいはひそめてきといひては此御神を齋ひはじめし事の久しき事と聞えて神の君を祝ひ
給ふとせんには少との筋違へるに似たり又巳にいへる如く萬葉にあめのかぐ山をよめる哥を墨の江に云かへた
るのみにて實には古哥を犯せし哥也その哥を唱ふるを聞給ひて神のいと感たまひて現れたまふとは古哥に委し
からぬ神と聞ゆべし皆そらをあふぎて笑ふべき事ならずや哥よく意得たらん人は學問に私すまじき理りを知て
心の鬼をやはらげつゝ考べき事也或人云さのみにては道の立侍らじと答ふ道は直きを專らとこそすれ枉て立ん
と爲るは道を失ふわざ也幾ほどもなからん己が命のうちにむなしき事もて人を懐けんは何の爲ぞ極りなからん
すめらぎの御代ゆく末の人に笑はるべき事をこそ恐れめとある人又云然らばこの條はいかに解にやと答ふ凡古
書をかくまで先論ろひて後になだらかに心をやりて解べき也よりておもふに物語てふものにはあやしげなる事
を云ぞ興なる故にかくも作りそめ且此記者は文よく書哥もよろしきも有をかくわろく作りてしかも神の御哥也
としもいへるは後世好事の作りて神のよみ給ふてふによくとゝのひたる哥はなし共比はさこそ有けめ故に中々
にかく人笑ふべく作りけんあらはに古今集に載たる哥に端詞をつくりて出したるを誰か作り事とせざらん共歌
をめでたまふ故に顯はれたまひて即神のよみたまふとする哥を誰か實の事とせん後世おもひまどへる說あれば
こそかくあげつろひも侍れそのかみは人皆物がたりとしりてさるかたの興にこそしたれ只後の世こそかなしけ

今本たえぬ心のとあり古本ことの葉玉かつらによれゝはよろしき也

或人かたみは忘難の心と思へるは事のすしを誤れり是は哥なとのいひかけに忘がたみと云にて本語にあらす或說に定家卿のかたみこそあたの大野とよまれし哥を謂する人あたなすみてとなふへしと云に麗中にて女の

れ

昔をとこひさしくおともせでわするゝ心もなし參りこんといへりければ

此男久しくおとづれだにせず在て今更に忘れたるにはあらずゆきて逢んといひおこせたる也〇まゐりこんとは
參りは聞えて來んとは先の方にて云べき語なるを此比の語にやありけん巳にも男の方より今參出來といひたる
即このまゐりこんと云に同じき也さて哥は女のよめる也然るを或說に女の男のかたへ參りこんといふ事とし哥
も其心にて云はいかなるひが目なるらん

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ言葉のうれしげもなし

ひとつ葛のかた〳〵にはひわかれてあまたの木にかゝれるを男のあだし心多きにたとへて且久しく音づれもせ
ず有て我にも絕ぬ心といふはうれしともおもはずといへりたえぬもこと葉も葛の語也さて是も古今集の哥に詞
をそへたるのみ〇葛に實あれは玉かづらといへり或說に是を綫の事と云はまどへり玉鬘と玉葛は語は同じくて
事は別也萬葉に此二つ有をとに付て見わかつべき也こゝは草かづらならではいかにとかん

むかし女あだなる男の念記とておきたるものどもを見て

かたみは形見の意にて昔在つる人の形のかはりに其物を見る故に云〇遊仙窟に念記をかたみとよめり古本是に
依て書るならん

かたみこそ今は怨なれこれなくばわするゝときもあらましものを

こは又こきん集に題しらずとて有哥也心明らかにてよろしき哥也さて中々にかたみは怨敵にこそあれと云のみ
これを化と濁りてとなふるはひがこと也伊勢の集に我爲に何のあたとて春風のをしむとしれる花に吹らん貫之集
にも怨の心なる有源氏のさか木の卷にあふ事のかたきをけふにかぎらずば今幾代をかなげきつゝ經ん敵を難にいひかけ

あな恐ろしといひしに付て聞よきに隨て定家のいはぬへしとからは今にはこれもかへきにそやうにかたいみこそのつゝしもはくさとのもの也是はらはいかけたるもとよりたいひかけたるなれはもとより其所の名の本につきてにこるへき也たとへはかくとたにえやはいぶ云みたはいひかけたるの大野てふはあだの大野にいひかけたるなれと本の伊吹の地のにこりなは其まゝにていひかけの方のすむ語にはかゝはらぬ也玉かつらおもかげ又物云と聞えて後とか有つ

ちたるなるへし

北條古本になしおちたるなるへし

拾芥抄に凝華舍は飛香舎之北五間四面也といへり

昔をとこ女のまだ世經ずとおぼえたる人の御もとに忍びてものきこえてのちほどへて　こゝは物きこゆると聞て後とか又物云と聞えて後とか有つらんを語の落たるならん今の如くては詞たり侍らざる也　女の弱くてまだ男にあひなどせぬを世を經ずといへりさてしか思ひてをりつる女のはやく人にあひつと聞てよめるなり後撰に女にもの云男二人有けり一人にかへり言すと聞て今ひとりがつかはしけるなびくかた有けるものをなよ竹のよにへぬものとおもひける哉とよめるがごとし○ほどへて後と書たるはしか聞しより後はいよゝかたゝへもいひかよはすらんとおしはかりたる意なるべしさらでは鍋のかず見んとよめるにかなはずほどへてのちてふ詞もたゞにては益なかるべし

あふみなる筑摩のまつりはやせなんつれなき人の鍋のかず見ん

つくまの社の祭には女の男せし數ほど鍋をかづきてわたるといへりよりて其所の人ならねどたとへてよめる也

女の我につれなきを惡みてしか云也○近江の筑摩は御厨なれば延喜式などに多く出たり此神は文德實錄に仁壽二年二月授二近江國筑摩神從五位下一と見えたり

むかし男凝華舍より雨にぬれて人の往を見て

かゝる所々の名は其庭に藤あるを藤つぼ桐あるを桐つぼと云こゝは哥によるにも梅有によれる名也つぼとは大きなる庭ならで殿どもの間にてつぼかなる庭を云○まかるは宮中より退くを云今本にまかりいづると有もしかながら古本にまかると有にこゝはたれり

鶯の花をぬふてふ笠もがなぬるめる人にきせてかへさん

こは古今集に鶯の笠に縫てふ梅の花折てかざゝん老曝るやとよめるをとりて記者のよめる也○ぬるめるはぬれるてふ語を延ていへりるめの反れなり　此類にゆくめるはゆける也くめの反け也　いぬめるはいねる也ぬめの反れ也　すべてこをもて知べし

かへし

うぐひすの花をぬふてふ笠はいなおもひをつけよほしてかへらん

雨に濕て退るを鶯の縫てふ花笠きせてかへさばやとのたまへど是をばほしからずたゞそこの思ひを付てたまへさらば袖を干て立歸りぬべしとておもひを火にとりなしたり後撰集ににくからぬ人のきせたるぬれ衣はおもひにあへず今かはきなんとよめる類也さて此終の句をほしてかへさんと有は書ぞこなへるなるべし古本に將還と有て理りもよく聞ゆ花笠はいなといへばほしてかへさん物はなし我袖を干て歸らんとこそよみたれ○此二首例の記者のよめらんが中に返しはとにいやしげにていにしへの哥の容姿ならず

昔をとこちぎれる言あやまれる人に

契れる言のあらずたがひたる時に其女にいひやれる也

山城の井出の玉水手にくみてたのみしかひもなき世なりけり

此本は水を手にくみてのみしといひかけたる序にて末はたのみしかひもなき世の中ぞとなげく意のみ也水を手にくみて飲てふ事已に貫之のむすぶ手のしづくにゝごるとよめる類多し○たのみとは契おきつれば終にはあはあるべしに干てそこの志なむくひしんとひたるもいへるはしたがへたるもの云みたへかへさんのかへさんはそはとにもあれ古本にはそはとにもわりも心に明らけき也

或説に青柳をかたいはらに糸にのぬふてうくひすはの梅のぬふてふをかさはの花笠てふをかぶりてちかき今集より前にかき出來たるてあはやまりつけてなゝしめ〳〵かるへしゆめらすはあらすはいらす古今集よりはいと後の文也

玉とほめいふ語にさまゝ有かの中に此玉水は即玉川の事なら水の字なかはとよめる事古くに例あれはたま水むもの即玉川に同しからん

かりそめに狩をかれたる事六帖の哥にてもしれ

んとおもひたのむを云○玉水は袋さうしに井出の玉水とてめでたき水ありてゆきゝの人手にむすびてのむといへりさも有事歟猶おぼつかなし○大和物語に此哥の本の句に心あらせて詞を作りたるは又一つの作りざま也されども序哥の上の句にいはれあるやうに爲たるは同じ作りごとの中にもわろき也

といひやれど報へもせずなん

こは女の方に有まじうにくき心なるを舉て次の條のまとある女のさまをつよく聞せん料なるべしさる例此文に多しかくならへる例によりてあけおとしなとせる事條ゝに有もやすらん猶さまては心やりかたくておち〳〵にはいはす後の人心しておもひたまへ

むかしをとこありけり深くさにすみける女をやう〳〵あきがたにやおもひけんかゝる哥をよみける

こは古今集雜部に深草のさとに住はべりて京へまうでくとてそこなりける人によみておくりける業平朝臣と有て此前後友だちなどの贈答せる篇なれば是もしたしき人におくりつらんを此文には夫婦となりて住ける女にむかひてよめる事とつくりかへたりされど古今集にもかへしはよみ人しらずとあれば女にても有けん其次に男どちの贈答も戀のごとくよみたるによるにたゞしたしき女とはしらるとしをへてすみこし里を出ていなばいとゞ深草野とやなりなむ

年經ていと〳〵草ふかく住なしたる郷をわがすてゝいなばまことの野とやならんといひて深くさの郷を詞にせり且四の句にいとゞ深草といひつめたるが中々に上手のわざにて面しろし

女かへし

野とならばうづらとなりて鳴をらんかりにだにやは人のこさらむ

聞えたるごとく也其中にかりにとはかりそめてふ語なるを鶉狩にだに來んものといひそへたり六帖に我宿はうづら伏までではらはせじ小鷹手にすゑこん人の爲ともよみたり或說に鶉狩を豫たるにあらずと云は例のひがこゝろ得にて强たるもの也すべて鶉は野に住もの故に荒たる所をつよくいはんとては萬葉に故郷うづら啼ふりにし里の秋はぎの云々鶉なく人の古家に云々鶉なくふるしと人はおもへども云々などさへよめりこれらをうけてこきん集六帖などにはよめる物を

新勅撰には此二の句いはてたゝにそ古本に不言曾直爾とあるにとあれとよるへし

とよめりけるにめでゝ將往と思ふこゝろなくなりにけり

前の條には男のしたへども女のまとなきをいひこゝには男のあきがたになりて出ていなんとするを女のうらむるけしきもなくてたゞ野となるまゝに鳴をりつゝいとせめて狩にこんよすがをだに待居らんと云へるかぎりなき女の眞とを感て男のとゞまれるをいへり作りなしたる物といへど是をよむときあはれすゝまざるはなし然れば此こゝろをそへんとて巧に端の詞をかへはたこれぞ男女の中らひを云終なればいともたはれたりし事共の末にしかしながら見る人心せよとて記者の心せるにや侍らん見よ〳〵次の二つの條に故あるつらねざまなるをむかしをとこいかなるとをおもひけるをりにかよめる

此思ふ事を何々など云はわろしいかなる事をおもひける節にかと書たれば手を觸まじきてふ說はよし

おもふ事いはでぞたゞにやみぬべき我にひとしき人しなければ

人の心の裏に常ある事なれば云とかずとも有なんこは大かたの人の哥とも聞えず業平朝臣の年たけてよみしにやあらん姿情似たる所あり○たゞにとは万葉に默然と書たるにかなへり

昔男わづらひてこゝちしぬべくおもほえければ

古今集にはやまひしてよわくなりにける時よめる業平朝臣とありいづれも理りはたがはず○こゝちは心持を略せる言也心地と書るも假字也かなにいふ時はあやまりにはあられと心地の字になつみて誤る人あれは心地とは書ましき也つひにゆく道とはかねてきゝしかどきのふ今日とはおもはざりしを

こは心ことば明らかにて心の眞言をいひたればいかなる賤だにも聞得て且いにしへ今にふたつなき身の終の哥也けり哥てふ物はかくまとをいひ出るものなるを後の人は工みにからめられて心も心ならぬ事をいふはくちをしまして身のはてによめるにも心ともなきさとりがましき事いふよいとくちをし〳〵○豫兼等の字をかねてふ語に用ゐたる事万葉に多し前より末をかねたる事を云也○業平朝臣は元慶四年五月二十八日に齢五十六にて卒られし事三代實錄に見ゆ其ほどの哥にや有けん此物がたりを實記のやうにおもひまどへる事久しさるは是を以て古今歌集などをも誤れる人あり仍て其理りをいひとかんとするまゝにいひ過したる事もおほかりきすべての書さまをもいとまあらばなほしつべし

昭和五年十月五日印刷
同　年十月廿日發行

國學院大學藏版

（賀茂眞淵全集第十卷奥付）十回配本

再校訂者　賀茂百樹

發行兼印刷者　東京市京橋區鈴木町十一番地　吉川弘文館　代表者　林譲

印刷所　東京市神田區鎌倉町二十番地　川瀬丙午郎

發賣所

東京市日本橋區吳服橋二　六合館
大阪市東區北久太郎町四丁目　合資會社　柳原書店
名古屋市西區下長者町四丁目　合資會社　川瀬書店
東京市京橋區鈴木町十一番地　日用書房
東京市牛込區早稲田鶴巻町二三　國際美術社

コ-3590
郷く

~~44~~ 081.5 44
~~311~~ K41 311
(10)

終